謎手本忠臣蔵



加藤廣

（上）

新潮文庫

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

上　巻

加藤　廣著



新潮社

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

上巻

加藤廣著



新潮社版

9327

上巻　目次

第一章　柳沢保明周辺　元禄十四年春　7
第二章　殿中異変　元禄十四年春　67
第三章　赤穂　元禄十四年晩春　145
第四章　大石内蔵助周辺　元禄十四年晩春　217
第五章　江戸　元禄十四年初夏　305

謎手本忠臣蔵 上巻

第一章　柳沢保明（やすあきら）周辺　元禄（げんろく）十四年春

1

二月二十八日――。

夜の沈黙（しじま）が一段と深まろうとする四つ（十時）過ぎのことである。

五代将軍綱吉（つなよし）の御側（おそば）用人筆頭・柳沢出羽守（でわのかみ）保明（のちの美濃守吉保（みのかみよしやす））の常盤橋（ときわばし）邸門前に、ひっそりと一挺（ちょう）の網代（あじろ）乗物がとまった。

貴人用の乗物である。

月の出はない。が、この日は、朝からの強い北風で、夜空は雲一つない満天の星で

ある。星明かりに淡く浮かぶ乗物には、「五三の桐」の定紋のほかに将軍家の葵紋が燦然と輝いていた。

乗物の主は幕府の対朝廷外交を一手ににぎる男――高家肝煎（筆頭）・吉良上野介義央。

乗物の葵紋は、足利幕府以来という貴筋と「従四位上」という破格の地位の象徴である。

随行は八人、うち供侍は三人。元々、呉服橋の吉良邸使用人は仲間、足軽を含めても三十人足らずで、剣を卑しむ家柄のため武士は少ない。

代わって、随行者に倍する忍びの者が、周辺の護衛として保明から派遣されていた。彼らは乗物の主が無事柳沢邸門前に着いたのを見届けると、無言のうちにうなずき合い、闇に散った。

その内の一人が、柳沢邸の長屋門をすり抜け、春霞のように邸内に消えたのとほぼ同時であった。門の両脇の番所から数人の仲間が柳沢の「四ツ花菱」の提灯片手に飛び出し、続いて正面の重い樫の大門がギーッという鈍い音と共に開かれる。

と――、網代乗物と八人の従者は、すっぽり邸内にのみこまれた。再び大門は閉ざされ、門前は何事もなかったような静寂に戻った。

同刻。広い邸内の奥では、この頃から俄に動きが慌ただしくなった。屋敷の主・出羽守保明が、正面玄関に走り出て平伏。異例の最高儀礼でこの客人を迎え入れたからである。

保明、この時、四十四歳。脂の乗りきった働き盛りである。

他方、迎えられた吉良上野介は、六十一歳。

正月十一日に大内（御所）への賀使を命じられ、最近、江戸に戻ったばかり。疲労困憊のところを、今宵、保明に無理やり呼び出され、いささか不機嫌の体であった。

「夜分、突然のお呼び出しをかけて恐縮でござる。ささ、奥へ」

保明は、丁重な言葉とは裏腹の強引さで、上野介を奥の黒書院へと誘い込んだ。

上野介が床柱を背に座ると、間髪を容れず、二人の侍女が、茶菓を捧げて現れる。

「まずは遠路のお役目ご苦労でござった。夜分のことゆえ抹茶代わりに桜湯といたした。伊豆の早咲きの桜漬けでござる。ゆるりご賞味下され」

保明は、にこりともせずに上野介に告げた。

保明は、上野介が桜湯を飲む様子をじっと眺めていた。わざと小ぶりの花柄の伊万

里天目を使って、二杯目の桜湯を所望させたのは、上野介の心底を推し計る保明の策略である。一杯目の桜湯には桜の塩づけに、上野介の隣地・吉良吉田（松平大河内領）の塩、二杯目には上方に出回る赤穂産の上質塩を用いた。上野介の心に余裕があるなら、そして自領にない塩の生産地・吉良吉田が、此度の賀使の成功の褒美として欲しいなら、二つの塩味の違いぐらいは研究していなければおかしい。

赤穂塩の話からは、この月の四日、「館伴」（饗応役）を命じた浅野内匠頭長矩へと、自然に話題も弾むだろう。

だが、なんの反応もなかった。

茶道を千宗旦に学んだ茶人だけあって、桜湯を嗜む茶碗の扱いにそつはなかったが、ただ、それだけである。

（気持ちに揺れのある証拠よ）

保明は、易々と老人の心を見すかした。

吉良上野介は、これまで京への使者を二十四回果たしている。

年賀使が十五回

年賀使以外が九回

保明は、そのすべての出入記録を調べ上げていた。賀使としては、通常、正月の十

日頃に江戸を立ち、二月十五日には戻るのがしきたりである。

ところが、此度は京で風邪をこじらせたために江戸戻りが遅れたという。

果たして本当か。

今日も危うく居留守を使われるところだった。

それを強引に引っ張り出したのは、「吉良さまが京でお風邪を召された形跡はありませぬ」という、全く反対の報告を、忍びの黒鍬組頭領・堀田将監から得ていたからである。

（この男、誰と余計な会合を持ってきたのか。明日はどんな報告を上さまのお耳に入れる気か）

御側用人としては、報告の内容を事前に把握しておかなくてはならない。

それが今夜の強引な呼び出しとなった。

それに今年の賀使は、ただの年賀使節ではなかった。元禄十年に策定した「桂一計画」（綱吉の母・桂昌院に従一位を取らせる五年計画）の最終年度に当たっている。老人の密命報告如何では、いよいよ自分が乗り出さねばならなくなる。

保明は、そのことで頭がいっぱいだった。

しばらくは両者無言だった。
黒書院が静寂に包まれる――。
沈黙を破ったのは上野介の方だった。二杯目の桜湯を飲み乾したあと、
「時に、例のご要望の件だが……」と、しょぼしょぼした老人の細い目線を投げてきた。
「謹んで承りましょう」
保明は傲然と胸を反らし、上野介の次の言葉を待った。
保明は、部下の報告を受ける時、必ず「事実」と「意見」とをはっきりと分ける。
「まずそなたの摑んだ事実のみを申せ。判断をまじえるな。判断を言うことは、余が求めた時だけに許す」
判断は上司たる自分がする。部下の勝手な予断に影響されないためである。この伝でいえば、直接の部下ではないが、この夜の上野介の「桂一計画」報告は完全な落第だった。
「例のご要望の件は、予想外に難儀でござるな」
自分の感想を一言述べただけで、後は沈黙してしまったのである。突然の呼び出しに臍を曲げたせいもあろう。だが「万事お任せあれ」と、大口を叩いて上洛した上野

介である。朝廷の誰が、どのような理由で反対するのかを報告すべきではないか。

それさえ判れば、手の打ちようもある。

が――、「だれが反対するのか」と訊ねても、上野介は「そればかりはご容赦を」と、交渉の機密を盾に、がんとして答えなかった。

「なぜだ」と訊くと横を向く。

「では、桂昌院さまの従一位は駄目を出されたのか」と訊くと、そうでもないらしい。なんとも反応が鈍い。しかし、最後の最後に交わした次の会話だけが、この夜、上野介を呼び出した唯一の収穫となった。

「引き続き禁中では、この件を〈予備の調べ〉としておいてもよいとのご意向で」と上野介。

「禁中とは誰のことじゃ」と保明が追うと、

「誰かれはいえませぬ。が、朝議の一つに残しておくがよい、と申されたのは、関白さまらしゅうございますな」と、ぽろりと名前をこぼした。

「関白がそう申したのか」

それなら一安心と、保明は思った。

時の関白は、近衛基熙（近衛家二十代）。戦国時代に織田信長らを相手に権謀術数の

限りを尽くして戦った近衛前久（同十六代）の再来と噂される俊英だが、幕府に対しては、霊元上皇より、よほど柔軟な協調路線をとる男である。

今更予備の調べもないものだが、これは公家特有の一時逃れの常套語であろう。

過去四年で問題は出尽くしている。後は「認める」か「認めない」かの腹一つだ。

継続審議と実力者の基熙が考えているのが事実なら、毛一筋でも可能性は残っている。

今後は朝廷の切所（攻め所）を変えるしかなかろう。

（この男のやり方では無理かもしれぬ……）

長い間、偉そうにしてきた幕府の高姿勢を背に、強引な交渉をしすぎて、朝廷の恨みを買ってきた男である。今は、もっと柔軟路線に換えねばならないのに、それが理解できない。

上野介を帰したあと保明は、こみ上げる不満を抑え、作戦の練り直しに取りかかった。

その保明の脳裡に、四年前の「桂一作戦」策定時の上さまの心細そうな姿が過る……。

（あれは元禄十年九月十二日のことだ）

今更当時の日記を探さずとも、保明は、昨日のことのように鮮明に覚えている。

午前十時。三の丸さま（御母堂・桂昌院）は上さまご同道で保明の常盤橋邸に初めて御成りになった。

「弥太郎、あれを見よ」

広い保明の上屋敷の高台に登られた上さまは、そう言いながら下を指さされた。

弥太郎は保明の通称。綱吉は館林時代から保明を、この通称で呼んだ。将軍になっても、二人だけの時は、この通称を好まれる。

その指さす彼方に、柔らかい秋の日差しを浴びた桂昌院が、保明の妻・定子と嗣子・安貞（当時十一歳）に両手を支えられ、庭を周遊している姿があった。

当時、七十一歳。

「ご壮健にてなにより……」と、保明は言った記憶がある。世辞ではない。年齢の割には桂昌院の足取りは、確かにしっかりしていた。

ところが――。

「いや、一見壮健に見えようが、よく見よ、母上の背の高さを。今年一年でずいぶん屈んでしまわれ、あんなに小さくなられた。眼もすっかり弱うなってな。これで、余

はあと何年母上に孝養ができることやら……」

上さまは、悲しそうに保明を振り返った。

ちなみに、桂昌院の生前の身長は、後の遺体発掘で判ったことだが、百四十六・八センチ。徳川将軍の正室・側室の平均百四十四・八センチの中でもすこし高い方である。

なお、身長に関連して、綱吉が低身長症（百二十四センチ）だったとするのは、綱吉を憎悪した後の六代将軍家宣とその子・七代将軍家継時代の悪質な作為である。綱吉は生前オランダ人と比較的多く会っており、彼らの残した記録では「立派な風貌に強い印象を受けた」となっている。世辞をいう必要のない彼らの意見の方が正確である。綱吉は将軍の平均身長（百五十五センチ）前後あった。また、そうでなければ、自分を生んでくれた桂昌院に、これほどの孝養を尽くすはずもない。

余談だが、逆の作為が後の八代将軍吉宗の身長である。その偉大さを強調するため、使用した太刀、鎧、さらには「大わらじ」まで造って六尺豊かな大男に創り上げた。が、吉宗も将軍の平均値以上の存在ではない。

歴史が作為に満ちている好例である。

閑話休題。

綱吉は感情過多な将軍であった。

特に母のこととなると、気持ちが高ぶって涙腺が極端に弱くなる。

「そこでな、弥太郎。物は相談だが……」

そう言ったときも、今にも泣き出しそうだった。

「下々には、〈親孝行したいときに親はなし〉とかいう諺があるそうな」

保明から眼を移すと、再び桂昌院の周遊を愛しげに見下ろして続けられた。

「なるほど。言い得て妙でございますな」

「……であろう。また、こうもいうそうじゃな。〈親の墓に布団を着せても始まらぬ〉と」

「上さまは、どこぞでそのような俗諺を入手されるのでございますか」

「ふふふ、知らぬか。そなたの屋敷に行った時に見る女どもの絵草紙よ」

保明に向き直った上さまの眼には、子供のような悪戯っぽさが漂っていた。

綱吉の保明邸への御成りは、元禄四年三月に始まり、年三、四回の割合で行われている。

「……さような絵草紙一つにも、よく読めば案外な教訓があるものじゃな」

「存じませなんだ。以後気をつけましょう」

二人は、顔を見合わせて笑った。

が、すぐに上さまは、真顔に戻り、

「そこで、ふと思うたのが母上の官位じゃ。朝廷から従三位を戴いて十二年たつ。が、一向にその後の昇叙（昇格）がない。寄る年波の母上を見るにつけ、余は悲しゅうてのう。女としては従三位が限度かの」

「いえ、阿茶局さま（家康側室）と台徳院（二代秀忠）御台所さまは、従一位に叙せられました」

「阿茶局さまは、東福門院（秀忠の五女、明正天皇の母）御入内の節、御母堂代わりとしてご上洛された。その苦労への当然のお礼と聞く。が、祖母への追贈は、東福門院の、ただの血縁（母）ということで朝廷から押しつけてきた官位だ。父（家光）は、この追贈に怒り心頭だった」

家光は弟国松を偏愛した母を終生許さなかった。そんな母の従一位を認めたくなかったのも解る。

「そうでございましたか」と、保明は初めて聞いたように頷いたが、これは周知の事実である。

「他に前例はあるか？」

「この弥太郎の知る限りでは、他には関白・豊臣秀吉公のご正室さまだけでございます」
「ほう、それは追贈か」
「いえ、生前でございます」
「益々心強い。で、いつのことじゃ」
「天正十六年。お与えになられたのは後陽成の帝でございました」
「なにか関白に特別なご奉公があってか」
「いえ。逆に、関白さまは、永年の子なきを諦め、後陽成の帝の弟君・胡佐丸さまをご養子に戴きたいと夫婦揃って参内された。この時の正室祢々の参内の資格として戴いたものでございます」
「ほう、秀頼の生まれる前にそのようなことがあったのか。聞かせよ」
上さまは、ここでぐっと身を乗り出された。

豊臣秀吉は、正室祢々、多数の側室のいずれからも子宝に恵まれなかった。やむなく後陽成天皇の異母弟で、細川幽斎から――皇室関係者では初めてという――『古今伝授』を受けた英才・胡佐丸君をご養子に戴くことで朝廷の内諾を得た。

天正十五年。秀吉五十一歳、胡佐丸君九歳の時のことである。

このまま胡佐丸君がすんなりと秀吉のご養子に納まっていたら、あるいは徳川政権はなかった。

しかし、当時は後陽成天皇の父君・誠仁親王の喪中であったため、この喪明けを待っての正式発表となった。

この正式発表の直前――秀吉の側室の一人・茶々の懐妊が判明し、胡佐丸君のご養子降下の話が宙に浮いてしまったのである。

どう計算しても、秀吉の九州遠征中の懐胎であるから、茶々の子は「夫重ね（不倫）」の結果は明らかであった。

「茶々の陰謀」は明白だが、表だってこれを言いだすのは憚られた。茶々の妹が秀忠夫人であるためである。

また、茶々の夫重ねが公知の事実としても、そのお陰で、胡佐丸君が秀吉の養子にならず〈豊臣永久政権〉が阻止できたからである。

それを思えば、家康としては悪口がいえない。

徳川家が、茶々の悪口を「淀の方」と言わず「淀君」と蔑称する範囲にとどめたのはそのせいである。当時の女性の「君」には、誰にでも身を任す娼婦の意味がある。

「そうか、淀君大明神のお陰で、今日の徳川があるのか。わはは……、いずれにしても前例があるのじゃな。では心強い」

上さまは祢々の先例を小躍りして喜ばれた。

「はい、しかし、豊臣殿のご正室の話は、例外中の例外でございましょう。まして従三位からの飛び昇叙となると、なかなかもって……」

保明は慎重だった。

「そこをなんとかならぬのか、弥太郎」

上さまは、祈らんばかりに言われた。

難しい。が、綱吉あっての今の自分である。なんとかならぬかと頼まれれば、否は言えない。

「心得ました。そのかわり、手前の作戦が成就するまで、上さまには、三の丸さまのご健勝をひたすらお守りくださるように……」

つまり長生きさせて欲しいと言ったのである。

「桂一計画」は、こうして始まった。

計画遂行のために、保明が真っ先に採ったのが、細井広沢の対朝廷融和策であった。

（あの男に捨て扶持を与えてきたことが今ようやく役に立つ）

この時の高揚した気持ちは、今も忘れない。

2

保明の朝は早い。

通常、月番老中は昼四つ（十時）、その他の老中は四つ半（十一時）が自邸を出る時刻だが、保明の場合は、六つ半（七時）前には必ず「三之間」に侍（はべ）っている。

三十代前半までは、江戸城に泊まりきりで、月に二、三日しか自邸に帰らなかった。それを思えば、今の早朝登城になんの苦痛もない。

それに――、譜代年功だけで「用部屋」に詰めて、終日居眠りしているような、老中たちと顔を会わせなくて済む。

早朝登城には、もう一つ利点があった。上さまの起居する中奥の御座之間が、主室二間（上段之間三十畳、下段之間二十畳。別に御休息之間）と二之間、三之間の四部屋で「田の字形」に構成されており、三之間で待てば、お互いにその日の部屋の出入りと所在を、問わずして確認できる。

二十九日は普段より四半刻（しはんどき）（三十分）早く自邸を出た。桂昌院がお風邪気味という

ことで、上さま自らお見舞いにお出ましになるはずである。

「おお、そこに居ったか、ちょうどよい。母上のお見舞いが済めばすぐ戻る。しばし待て」

「承知仕りました」

この日の朝も、そんな軽い会話で、二人の一日を始めることができた。

上さまは機嫌よく見えた。おそらく、今日予定される吉良上野介の京報告に期待しているからであろう。湯水のように朝廷関係に運動費をばらまき、「この上野にお任せあれ」と胸を張って上洛した上野介。（今日の返事は期待できる）と考えるのも無理はなかった。だからこそ不首尾と知った時の上さまの落胆と怒りが問題だった。事前の「耳打ち」が必要。併せて、側近としては今後のなんらかの対応策を述べねばならない。

昨夜来、何度も思案し、苦慮してきた想定問答を再度確認する間もなく、上さまは戻られた。

「奥へ参れ――」といわれて後に従うと、上さまは、下段之間、上段之間を通り抜け、そのまま「御休息之間」に保明を誘った。家光の時代、公務繁多のため、主室の上段之間が執務室化したことから、新たに設けた将軍の私室である。

二間半四方の上下段構成に小座敷まで付けたのは保明の新設計である。

「そなたの造ったこの部屋なら誰にも聞かれぬ。先ほど、そなたの顔を見て、これはよき報告ではないなと、ふと思った故、この小座敷にした」

「ご配慮有り難き幸せ。恐縮至極にございます」

「で、どうなのだ。やはり母上の生まれが、昇叙の障碍なのじゃな」

上さまは、眉間に皺を寄せて呟かれた。

まともに「余の母の生まれ（の卑しさ）が従一位を拝受する障碍か？」と訊かれて、部下としては、「然り」とも「否」とも答えられない。俯く保明に、「そうか、いやそうであろう」と、上さまの方が、あっさり降りてくれたことで、この場は救われたかに思えたのだが……。

「出自の障碍」はまぎれもない事実である。

桂昌院は幕府公式記録では「二条関白光平公家司本庄太郎兵衛宗利（初名・宗正）の女、初め光子、次いで秋野と称し、また於玉の方と改む」とある。

後に、宗利の子道芳が、慶安元年（一六四八）於玉の子・徳松（綱吉）付きの家臣となり、本庄を——もっともらしい——北小路と改め、北小路大輔道芳の妹とされた。

しかし、目の前で、つぶさに事の成り行きを見てきた町民の口は塞げない。まして、この出自の話は朝廷のお膝元・京都の町中の事件である。

桂昌院は、京堀川の八百屋の娘であった。

もっとも、その母が「飯炊き女」として本庄家に入り、後に、主人の寵愛を受けて妊ったのが光子だとするのは、後世の『玉輿記』あたりの創作である。これでは年代が合わなくなる。

しかし、光子の父である八百屋の仁左衛門が若くして死んだ後、その母が、子連れで二条関白光平の家司・本庄太郎兵衛宗利の家の飯炊き女となり、美女故に宗利の手が付いた、というのは事実であろう。

後に、この母は宗利の後妻に納まっている。

連れ子の於玉は、成長するにつれて母以上の美女になった。義父宗利の勧めで江戸に下り、当時三代家光の寵愛を受けていたお万の方――元慶光院主――の部屋子となり、ここで家光の目にとまった。義父の仕える二条家と、お万の方の生家の六条家が親族関係にあったことから始まった御奉公である。当然、桂昌院の素性は、朝廷関係者には筒抜けであった。

「とんでもない。これまでの従三位ですら、御台さま（綱吉夫人）との均衡上、やむ

なく差し上げた官位。従一位など滅相もおじゃりませぬ」

朝廷はこの四年、抵抗姿勢を崩さない。

「上さま。今日のところは、吉良めのご報告を黙ってお聞き流しくだされませ」

保明がそう言ったとたん、上さまは一転、唇を震わせて叫んだ。

「今朝の母上は、お熱も高い。万一ということもある。余はこれ以上の時は待てぬぞ、弥太郎」

「親ゆえの闇」には、孝養という大義名分がある。この時、保明は逃げ場を失っていた。

「この一年内に三の丸さまの従一位、必ず戴いてみせまする。弥太郎、武士の面目にかけても……」

朝廷という相手のあることだが、こうなっては後には引けなかった。

まして、保明自身、父安忠が侍女に手を付けて生まれた妾腹の子である。生母の出身の卑しさと哀しさは身に染みて解る。

上さまの名誉のためにも、桂昌院さまに従一位を獲得しなければならない。

出来ねば腹を切るしかない。

寝屋を出るより（家を出る時から）
其日を死番と可得心（その日の勤めが人生最期の御奉公と心得よ）
この「常在死番」が、御側用人・保明の密かに心に刻む〈座右の銘〉である。
「うむ。弥太郎がそうまで言うてくれるなら、今日のところは我慢しよう――」
綱吉は、ようやく機嫌を直した。

この日（二十九日）十時から始まった吉良上野介の報告は「継続審議に持ち込んだ」だけでよしとする綱吉の意外な姿勢で早々に終了した。
びくびく物でやってきた吉良は、報告後、保明の事前工作を察し、涙を流さんばかりに感謝の言葉を述べると、そそくさと消えた。
吉良を送り出すと、次の仕事が待っている。
明日一日は定例の「諸大名一斉総登城日」。江戸滞在中の大名は、病気でもない限り一日と十五日には必ず登城して、将軍、将軍世嗣に拝謁する仕来りになっている。その出欠の確認、拝謁の席の並び方の変更等、事前の把握が必要だった。
「特に問題はないであろうな」
関係書類を眺めていた保明は、用人の一人・佐瀬三太夫に気軽く訊ねた。母の生家

から随身している子飼いで、気心の許せる男である。
「それが一つだけございますが」
「申してみよ」
「赤穂藩主・浅野内匠頭が、明日と上巳（桃）の節句の両方の拝謁ご辞退を願い出ております」
「なんだと！」
眦に一瞬衝撃が走った。
「どうやらご持病の癪（さしこみ、胃痙攣の一種）が春先は特にお酷いようで。城中で粗相があってはならぬとのご懸念を申されております」
「しかし、浅野殿には、此度の御勅使東下では館伴（饗応役）の大役を命じておる。明日の拝謁には、松之間の前方にお座りいただき、上さま直々に、例のお言葉（《念を入れて務めい》という）をいただく算段をしていたのじゃが」
「殿からそう伺っておりましたので、浅野殿の願い出は保留にしてございますが」
「では上さまのお声掛けだけは中止と致そう。前方に座らずともよい。だが、どちらも欠席だけは許さぬと申し伝えよ。よいな」
（あの男。饗応役任命の時も、ぐずりおったそうだが、明日も三日の節句の拝謁も懈

怠したいか……）

保明は、妙な胸騒ぎを覚えた。

去る二月四日のこと――。老中一同は、播州赤穂の城主・浅野内匠頭長矩及び予州吉田の城主・伊達左京亮宗春を呼び出した。来る三月の勅使東下の際、内匠頭に勅使御館伴を、伊達左京亮に院使御館伴を命じるためである。

なお保明は、この時の命令伝達に加わっていない。三年前から大老格になってはいるが、これは、あくまで「格」であって公式発令ではない。だから「老中の公務」には一切顔を出さない。

将軍の意向を笠に、強引に出席しようと思えば、出られないことはない。が、別に出たくもなかった。名誉だけで「老中職」にしがみつきたい彼らと、膝をまじえて談じる気にはなれない。

「いずれ将軍に報告書が提出される。それさえ見れば、出席せずとも事の経緯はわかる」

保明は高をくくっていた。やがてきた（この時の）指名報告によれば、命令書を読み上げたのは、四人の老中の一人、この一月に老中になったばかりの稲葉丹後守正通である。

稲葉家は、内匠頭長矩の父・長友が、幼少（九歳）で家督を継いだ長矩のために、生前、後見役を依頼してきた名家である。ところが当日、内匠頭は、蒼白な顔を引きつらせて言ったという。

「かかる重き御役儀を仰せつかることは、家の名誉、身の面目、この上もなき儀におわせど、公儀の御作法にならわざる不肖内匠、御用を全う仕らんこと覚束なく存じ奉る。恐れながらこの儀は余人に仰せ付けさせられるよう願わしゅう」

老中一同、呆れて顔を見合わせた、との言葉が、即日、丹後守の口から直接入った。誰だってこんな堅苦しい愚かな役はやりたくない。やって来るのは武家伝奏（朝廷と幕府の間の意思疎通を図るための朝廷の役職）三人（天皇家二名、上皇家一名）だけではない。

江戸への物見遊山を兼ね、女官など朝廷関係者がぞろぞろと五百人も付いてくる。接待費用は軽く一千両（一億円以上）を超える。それが指名された藩の負担になる。命じられるのは禄高五万石前後の中堅外様大名を中心とする三十数家だが、定例の年二人の他に臨時の饗応もあるので十年内に一度は回ってくる。ところが浅野家の場合、祖父の長直は二十年で三回だが、内匠頭は十八年前の一回きりである。不思議に思って保明が極秘に調べた結果浮かんだのは、浅野の家老・大石内蔵助が、主君のために、

密かに老中に金をばらまき、指名回避工作をしてきたという事実であった。

だが、保明は空とぼけて丹後守に訊ねた。

「で……、内匠頭殿の言い分に対する御老中さま方の結論は如何(いかが)あいなりましたでござろうや」

「もちろん、はねつけましてござる。当然でござろうが、柳沢殿」

丹後守は憤然として言った。

保明は、にっこり頷(うなず)いて、続けた。

「で、なんと申されて……」

「さよう。拙者かく申し上げた。その儀なれば御懸念(ごけねん)には及ばぬ。大小名の如何(いか)なるお方とて、このお役目に練達の方は、日本広しといえどおわすまい。それゆえ、この儀については多年勅使の御館伴役を申しつかっている高家衆がござる。なかんずく此度の大役仰せつかった吉良上野介殿は、この道の肝煎(きもいり)（筆頭）なれば、とくと諸事に相計られよ。なお諸事、建前の他に本音の部分もござろうが、これについては前年の勅使御館伴・稲葉能登守(のとのかみ)、前々年の鍋島摂津守(なべしま)にご相談されるがよろしかろうと申し上げておざる。如何か」

「老中さま方のご忠告、非の打ち所ございませぬ。これで安堵(あんど)いたしました」と保明

は答えた。

今回の浅野内匠頭の接待役指名には、事前にこんな経緯があった。

（ここまで丹後守の指導を得ているのに、またぞろ、明日も一斉登城に出たくないなどとぐずるとは？　一体、この男は、己れをなに様と思うてか……）

疑惑を胸に、保明は、この日、自邸に戻ると、早速、書斎の隠し扉の中から『土芥寇讎記』とごく最近出来上がったばかりの『諫懲後正』を引っ張り出した。前書は、将軍綱吉の意向を受け、初代御側用人・牧野成貞が集めた大名の「素行調査書」である。貴重な報告書だが、忍びの者の偏見が多いという上さまのご不満で保明が再調査させたのが後書である。ただし、保明自身は、日常の施政の予断を避けるため、両書とも問題が起きた時だけしか開かないことにしている。

まず、前書の第二十巻に次の記載があった。

浅野内匠頭源長矩　従五位下

紋　丸に違い鷹の羽　二十三歳（元禄三年当時）

室（妻）は、浅野因幡守長治（広島の三次藩主）の娘

嫡子（ちゃくし）、（記載なし）
本国尾張、生国武州（武蔵（むさし））。童名は又市郎。……
延宝三年（一六七五）九歳で家督を相続し、同八年、従五位下となり、内匠頭の官職に任じられた。

と公式記録は続く。
だが、その後の〝人物評〟まで読んできて、保明は、にやりとした。

長矩は頭がよく利発である。
家臣や領民の取締もきちんとしており、士も一般の人々も豊かである。
（だが）女好きが激しい。そのため主君におもねるために、長矩の好みの女を探し出して差し出すような輩（やから）が出世する。そんな女との血縁関係の者が高禄を得て、金持ちになることが多い。
長矩は、そんな（好みの）女のところに入り浸っており、政治は幼い頃から今日まで、家老の大石内蔵助に任せきりである。

保明は、一人、笑みを浮かべながら報告書を閉じた。

忍びの者たちは、日頃の過酷な肉体の鍛錬とその維持のために女色を避けることを自分に課している。いきおい、若い女に溺れる為政者を見る目がゆがむ。その点を割り引いて読まねばならないのだが、頭の堅い老中たちには、これが解らない。だから、この二冊の調査書は彼らには見せられぬ「秘中の秘」扱いとなっている。

「女のところに入り浸っている」というが、権力と精力は、男の征服欲に由来する業の河の表裏をなすものである。

まして内匠頭のように嗣子のない大名は、女に戯れているように見えても本人にとっては必死の「子作り」作業かもしれない。大目に見なくてはいけないのだ。

この点は同じ立場の綱吉公も同意見である。

「大名の女色批判はやめさせよ。殿さまとしての資質と施政者としての姿勢の論評が大事」

後書『諫懲後正』は、こういう柔軟路線で再調査させたものである。三十代になった内匠頭の論評が、後書では次のように全く反対になっている。

長矩は文の道を学ばず、武道を好む。生来、気が小さく律儀である。

それだけに、心が真っ直ぐで非難すべきところはない。

（しかし）家臣や領民に対する思いやりがない。政道に厳しすぎ、民に対して必要以上に、あれこれ言い過ぎる。

軍学と儒教の教えを大切にし公務を怠らない。

世間体ばかり気にして、性格に幅がない。知恵なく気が短かいが、品行はよい、等々。

気が短い例として「先年奥方の下女について、少々『道にはずれた行動があった』と記してある。おそらく「気が小さく、気短か」な長矩のこと。女どもの些細な規律違反も許せず、一刀のもとに切り捨てるような狼藉を犯したのであろう。それもあってか、

そのころ専ら世間の評判よろしくなく、既にこの家危ういことなりと批判したが、（今のところは）何んなくおさまっている。

と続いている。「何んなくおさまっている」とはいうものの、「既にこの家危ういこ

となり」とは、いささか物騒な記述ではある。

「ま一度内匠頭は調べ直さなくてはいかんかな」

思いたったら即断。

保明は小姓を呼ぶと耳打ちした。

「堀田将監を至急呼べ」

密使の早馬が、黒鍬組屋敷のある円通寺坂下に向けて飛び出したのは、この直後である――。

3

徳川家と「忍び衆」とは切っても切れない関係にある。

有名な話が神君家康の〈伊賀越え〉である。

天正十年六月二日明け方。偶々堺に居て「本能寺の変」にぶつかった家康は、伊賀の忍び・服部半蔵の諜報によっていち早く事件を知り、その手引きによって混迷する京を避けて、伊賀山中を長駆三河に帰ることができた。

以後、この時の大功によって、服部半蔵は、徳川方の忍び軍団の総大将として重き

をなした。

しかし、四代目の服部半蔵が、その妻に金山奉行・大久保長安の娘を娶ったことから、長安の幕府転覆嫌疑の巻き添えを食って失脚した。

以後、服部家は絶家となった。

代わって台頭したのが黒鍬組である。

元々は、農耕の際の臨時雇い人の別称に過ぎなかった。しかし、戦国時代の度重なる合戦で、築城、地下壕の掘削、間道の整備などの土木作業に熟達し、戦功を重ねているうちに、いつしか特殊技能を持つ秘密工作隊に変身したのである。

最大の保護者であり、利用者でもあったのが武田信玄である。武田軍が、「疾きこと風の如く」といわれたのは、進軍に際し、あらかじめ黒鍬組を先発させ、敵陣内の河川、道路の状況を把握した上で、兵と騎馬の移動を図ったからである。

武田家が勝頼の代で滅びると、家康は、豊臣秀吉の「武田浪人採用禁止令」を無視して、旧武田軍団をそっくり自分の家臣に組み入れた。

その中で黒鍬組が復活した。

保明の祖も、甲斐源氏を源流とする旧武田武川衆で、武田家の滅亡によって、この時、同じように徳川方に組み入れられた。

徳川家では新参の「旧武田仲間」ということで、黒鍬組と保明は最初から仲が良かった。

特に黒鍬組の総帥が堀田将監となり、将監の次女が桂昌院の侍女としてご奉公に上がってから両者は急接近した。

当時、小姓組番衆であった保明は、将監の次女を一目見て綱吉の好みの女と判断。ご主君の目にとまるように工作したのである。

この娘が側室・お伝の方となり、後に、延宝五年（一六七七）に女子鶴姫を、続く七年（一六七九）嗣子・徳松を生んだ。が、好事魔多し。徳松は五歳で病死した。その死因を巡って暗殺疑惑が起き、これがまた黒鍬組の増強に一層拍車をかけたのである。俗に言う「焼け太り」である。

この巨大化した影の軍団の総帥・堀田将監が、今、円通寺坂下から、疾風のようにやってくる。

やがて現れた将監は、長身の齢七旬（七十歳）に余る老人である。一見、真っ白な総髪を肩の下まで垂らし、いかにも老人臭く見えるが、なかなか、正面から見る顔は、矍鑠たる赤銅色で、壮年のように輝き、皺一つない。

着ているものも、褐色の着物に五つ紋の羽織。袴は、当時流行の先端を行く仙台平である。

「相変わらず気持ちがお若いの、将監殿は」

保明は、心底から感嘆の声を上げた。

今もひ孫のような若い美女を毎晩両脇に抱えて寝るという。これを、からかうと、

「いや、これは神君直伝の養生法でござれば」

否定もせずに言ってのける人を食った男であった。保明とは年齢に三十近い差があるが、言わず語らずで通じる莫逆の友（気の合う友）でもある。

そんな将監も、出会った頃は、小谷権兵衛を名乗る十二俵一人扶持の軽輩。こちらも武蔵国鉢形で、わずか禄高二百三十石を頂戴する勤番に過ぎなかった。

それが、権兵衛は、娘のお陰で、今は三千石の旗本となった。もっとも、幕府の『玉輿記』などでは、延宝九年（天和元年）七月二十七日には、ぐれた息子（権太郎）の仲間の博徒の手で、とっくに殺されたことになっている。

実は重傷を負っただけで生き延びたのである。

したたかな権兵衛は、この時に、自分の名を堀田将監と変えた。

「拙者は一度死んだ身。墓まで造った。それゆえ二度とは死なぬ」が口癖である。

ちなみに権兵衛の墓は千駄木の世尊院にある。こちらの方では、没年は同年七月十七日。公式記録と十日の差がある。ともかく不死鳥のような男である。

こちら保明の方は、これも又、綱吉公の破格の恩寵を蒙り、禄高九万二千三十石の大名に取り立てられた。

余談だが、ある時、保明は、「末尾端数の三十石が邪魔だろう」と、綱吉にからかわれたことがある。

だが、

「とんでもありませぬ。弥太郎、初心を忘れぬためにも、この末尾端数の三十石、死んでも離したくございませぬ」と言って断っている。

今も二人は、軽輩当時の初心を忘れない。

が、お伝の生んだ嗣子が亡くなり、お伝も四十四歳の「お褥滑り」（枕席奉仕の辞退）となった今は、将監の受ける七光り効果――当時、これを蛍出世、大名ともなると蛍大名と揶揄された――も薄れている。

保明も、この四年間、ご加増がなく、十万石目前で出世が止まったままとなっている。

なにかこの辺であっと驚く功をあげたい。そんな気持ちが、どちらにも言わず語らずにあった。

特に、年齢的にも将監にはあせりがある。

「して、御用の趣(おもむき)は？」

保明を促す将監の吐く息が、まだ荒かった。

「まずは、一服せい」

保明は、笑いながら、侍女を呼び、昨夜と同じ桜湯を出した。茶碗(ちゃわん)だけが昨日と違って普通の天目茶碗である。

将監は一口飲むと「うまい」と一言。そして、

「さすれば播州赤穂がことでござるかな」

と、不敵な笑みを浮かべた。

「さすが将監。よくぞ塩の味見をしたな」

保明は、笑いながら自分も桜湯を嗜(たしな)んだ。

桜湯に赤穂塩を使っていた。吉良や関東の行徳(ぎょうとく)産の塩にない、なんともいわれぬ甘

みがある。

「では、播州浅野家の殿様の再調査をすればよろしいのでござるな」

将監は「造作もない」と言いたげな表情で、早のみこみした。

「いや、再調査ではない。もっと見方を深めよ、ということじゃ」

「と、申されると、なにか調査にご不満があるやに聞こえまするが？」

「不満で申すのではない。内匠頭の性格や物の考え方は、そなたらの調べに尽きよう。だが、余はそれだけでは満足できぬのだ」

保明は、顎をさすって一呼吸おいた。

「第一に、内匠頭には、女のような痞の持病があるそうじゃが、知ってか」

「いえ、存じませぬ」

「であろうな。そなたの報告にも、十年前の牧野さまのご報告にも、その旨の記載がない。まず、それが生まれつきの蒲柳の質（虚弱体質）によるものかどうかを知りたい。生まれつきならそれでよし。しかし、なにか成年期前後に胸につかえるようなことがあっての痞なら、その原因を突き止めよ」

「難しゅうござるな。例えばどのようなことでござろうや」

「あえて申せばこの幕府体制への不満じゃ。だがそれ以上は、そなたに予断を与える

ゆえ、独力で考えよ。追々指示を与えよう」

「お願いいたしまする。で、もう一つは」

「赤穂塩の製法じゃ。今飲んだ桜湯で判るとおり上質の赤穂塩には独特の風味がある。これが他の塩田の塩にはない。そこに特異な製法技があるならそれを知りたい。できればそれを行徳その他の塩田にも普及させ、江戸町民の塩を、より良く、またより安きものとしたい。これは、諸式高直（物価高騰）の折、この国のためでもある」

「要するに製法を盗めばよいのですな」

将監は、こちらなら「お手の物」と、にやりと笑った。

「まあ、露骨に言えばそうじゃが、こちらが製法を把握した後は、余が直々浅野家にその公開を申しつける。製法を知らずして話せば、技を隠され、かえって事が面倒になる。失敗は許されぬ。召し捕られて、余への面当てに遺体を江戸に還されるようなヘマは二度とするな」

数年前のこと。薩摩に派した隠密の遺体が塩漬けとなって屋敷の前に放り出されていたことを、保明は、苦々しく思い出していた。

派遣した隠密の遺体を送りかえされても幕府は文句がいえない。

保明は、黙って遺体を捨てた。

このように隠密は、戦国時代以来、過酷で報われることのすくない仕事であった。だが徳川も中期になってからは、その処遇は改善されている。

現在の黒鍬組の総員は、およそ四百人。内五十人から百人が、全国の諸藩に隠密として派されている。残りがその予備と補充人員である。

彼らは、円通寺坂下に密集する黒鍬衆集落内で、豊富な公費によって常時集中特訓を受ける。

特訓は方言と職業の二つに大別されていた。

方言は、もちろん隠密として地元に一定期間定着するためである。地元出身者を師とし、それこそ、一年中方言の中で呼吸し、朝の近所の挨拶から遊女と寝るときの睦言まで仕込まれる。

職業の方は、先天的な素質や能力にもよるが、ピンからキリまである。最上位が旅絵師。幕府御用絵師となった狩野派の弟子から手ほどきを受け、同派の画論の基本である狩野永納『本朝画史』や狩野安信の『画道要訣』を隅々まで暗記させられる。

この職業の志願者は年々増え、競争率は十倍という激戦である。絵描きなら、楽に地方の藩の上位層に食い込めるからである。次の人気は連歌師と茶道師。これも退屈

をもてあます三百石以下の田舎武士層に入り込む絶好の職業である。この後に続くのが、出替わり者（年季奉公人）や薬売り、鋳掛屋などの職人修行だ。

キリの方は、巡礼、古手買（古物商）、節季候（歳末の門付け）、猿遣いなどの遊芸人から、偽按摩、博打打ち、遊女までである。

特訓を受けた後、黒鍬衆は地方に飛ぶ。形式的には吹上奉行の組下として若年寄から命令を受けるが、隠密の特権として、江戸城の「西の丸」の西に広がる吹上庭園で、将軍に直接に言い付かるのが慣例である。お手元金も、この時、直々にくだされる。それを路用として、江戸城から真っ直ぐ出発するのが、三代将軍・家光以来の習いとなっている。命じられたら、その日をもって出発する。以後、自分の家に帰ることは許されない。

厳しいようだが、吹上庭園で与えられる隠密の役目は、一生に一度、それも原則として期間一年に限られる。大役を果たして無事戻れば、後は江戸で片手間の目明かし稼業などで、のんびり暮らせる保障がある。これが忍び商売の最大の魅力だった。

「ところで、赤穂に派する候補じゃが……」

保明は、将監へ膝を進めながらぽつり呟いた。

「二人必要じゃな」
「拙者もその積もりでござる」
　将監は、即座に保明の二人提案を呑んだ。
「さきほど殿に赤穂への派遣を指示された時、即、候補者が一人浮かびましてござる」
「うむ。如何な者じゃ」
「円通寺坂下で歌舞伎役者修行の後、堺町の中村座に潜り込み、もっぱら裏方で舞台装置を手がけております。舞台役者よりそちらの方が性に合うのか、木組み、金組みの〈からくり〉造りでは、右に出る者がおりませぬ。年は三十五。出身も摂津なれば赤穂の地元言葉も達者でござる。この男なら塩造りの現場は、すぐにのみ込めましょう」
「よかろう。早速、来る五日の吹上の上さまの〈お逢いの日〉に召し出せ」
　隠密の発令は、必要の都度、さみだれ式に行うこともあるが、定時異動は、三月五日である。
　この日、将軍は、何気ない風を装って吹上庭園を、保明と小姓を伴って散策する。そこで満開の桜を眺め、小姓を残して気の向くままに樹間にふらりと入る。と、そこ

に吹上奉行に引率された黒鍬衆の指名者が、普段の庭の手入れ姿で、平伏して控えているという趣向である。

　これを〈将軍お逢い〉と言った。忍びの者としては、一生に一度、将軍にお目見えして、お声を掛けていただく無上の光栄の日である。

「で、もう一人の候補はどうだ？」

　保明は結論をせかせた。

「こちらは、まだ少々迷っておりますが……」

　将監は大袈裟に顔をゆがめた。保明の指示を得たい時、将監はこうした仕草をして見せるのである。

「では、女忍びとせい」

　保明としても、この時、ぽんと飛び出した思いつきに過ぎなかった。

「えっ、女でござるか。で、女密使をどこぞに放たれますので」

「江戸藩邸でも赤穂の藩主邸でもないわい」

　保明はにやりと笑ってみせた。

「じらさずに、お教え願います」と、将監。

「では申す。浅野には、筆頭国家老に大石内蔵助という者がおる。そなたらの調べで

は、女遊びばかりしていて、主君のお覚えもわるいようだが、なかなか裏技に長けている男のようだ。この男の本当の姿と、その主君・内匠頭を見る冷静な見方が知りたい。それには大石が気を許して本心を語る筋の調べが必要になる」

「ということで女というわけですな」

「将を射んとすれば馬の譬えがある。主君の器は部下筆頭の眼を通して見るが一番確かじゃ」

保明は、自分の発想に心地よく酔っていた。

4

「だが、浅野がことは、ここまでとしよう。ま一つ難問が残っておる。かねてからそなたに申しつけてきた《神君の密書》の件、その後、なにか手がかりはないか」

保明は、ぐっと将監の目をのぞき込む。だが、

「そのご下命なれば、拙者、片時も忘れたことはござりませぬ。が、こればかりは、そもそも、そのような密書が、今もあるのか、ないのかも判らぬ、化け物のような代物でござれば……」

と、将監は、大きな身体を縮めるだけである。

「化け物か。そうかもしれぬ。だが、まことの化け物なら、かえって楽だが」

保明は苦笑いした。

「しかし、此度の五日の〈お逢いの日〉の時、またぞろ、上さまは、この化け物の話を持ち出されるかもしれぬ。余としても、そなた以外に語ることのできぬ秘事ゆえ、何度も、せかせるのだ」

最後は愚痴に近かった。だが、放置できない由々しき問題であることは事実だった。

《神君の密書》は、徳川幕府成立にまつわる屈辱の伝説である。これは、今からおよそ百年前、家康が、下野・小山の陣で、秀吉子飼いの猛将・福島正則を、東軍（家康方）の味方に引きつけるために、誓書を正則に与えた事に始まっている。

保明が、最初に、この誓書の噂を知ったのは三年前の七月。保明が東叡山根本中堂造営の総奉行を務め、その功によって、左近衛権少将に任ぜられて、大老格となった時である。綱吉自ら、「祝いの後での話としては、ふさわしゅうもないが、歴代の大老だけに徳川家が口頭で申し継ぐ事項となっておるのでな」と前置きして、次のように言った。

「今は誰一人、見た者もない。が、それはそれは、大権現さま（家康）らしゅうもな

い、とんでもない誓書があったという話なのじゃ――」

福島正則。秀吉恩顧の子飼い大名である。ところが、関ヶ原の天下分け目の合戦では、自軍六千を率いて東軍（家康方）の旗振り役を務め、実戦では先陣を買って出て東軍の勝利を決定づけた。

この裏に、小山陣中で家康の巧妙な調略があったことは、つとに有名である。だが、正則も愚か者ではなかった。その証拠に家康に味方するに当たって厳しい条件を突きつけていたのである。

「秀頼公のお命を守り、豊臣家を地方大名として存続させること。これを誓書としてくだされ。しかし、拙者、内府（家康）殿の言葉だけでは信用できませぬ。それゆえ万が一にも、誓書の内容を違えたときのために、保障を付けて戴きたい」

この時、渋々家康が正則に与えた保障が、この百年を引きずる悪夢の種となったのである。

「この誓書には、万一、約定を破った時は、代償として、誓書の〈持参者〉に江戸城を明け渡す、と書いてあったそうな。大権現さまは、この江戸城を正則への誓書の担保とされたのじゃな」

と、綱吉公は言われた。

「持参者に明け渡すのでござるか、さて……」

ちょっと首を傾げたが、保明は、すぐ、その言葉の恐ろしさが理解できた。

「そうじゃ、そなたなら言わずとも解ろう。福島正則は、関ヶ原の戦いで大権現さまが勝利した暁には、一時は功労者として報われるとも、いずれは煙たい存在として邪魔者扱いされ、果ては抹殺されると予感したのであろう。それゆえ〈持参者〉を、己れではなく、あえて、無名の持参人にさせたのじゃな。だが、恐ろしいのはそれだけではない。実は、この誓書に要求した立ち会い人がとんでもないお方だったのじゃ――」

綱吉は、ここで眉をひそめた。

「誰だと思う、弥太郎。あくまで噂だが、当時の今上の君・後陽成天皇その人だったというのだ」

「ということは……」

保明も思わず身震いした。

「この誓書の持参者が、朝廷あるいは回り回って豊臣恩顧の大名であれば、我らは江戸城を……」

「そうじゃ。理屈としては、そのいずれでも明け渡さざるをえないことになる。だが

な、弥太郎、徳川家もこの密書対策は十分講じてきた。だから百年この方、事なきを得てきたのじゃが……」

家康は、関ヶ原の戦いで大勝すると、正則に大禄を与えて、まず懐柔策をとった。次いで大坂と事を構える段には、一転、江戸の「留守居役」名義で、事実上蟄居閉門とした。最後に、慶長二十年（元和元年）、大坂夏の陣で秀頼を倒すと、密書の約束違反が明確になったため、正則の安芸・広島城を「幕府に無断で修理した廉」という屁理屈で召し上げ、忍びを使って徹底捜索を行ったのである。

「じゃが、どこからも密書は出てこぬ。大方、福島家断絶の際、どこぞに滅失したか。あるいは、そもそも、そのような密書、最初からなかったのでは、と言う者もおる。だがの、余は今も存在すると思うている。弥太郎、余の意を体して調べてくれ、頼む、神君の密書を」

本心から心配していたのだろう。命令というよりこの時の綱吉の姿勢は、懇願に近かった。

「なんとかしなくては――」

保明の堅い決意の中で、いつか、一つの突破口が浮かんだ。

（この密書探しの原点は福島家の安芸・広島城。それは今浅野宗家に継がれている）

飛躍かもしれぬが、そこに内匠頭の痞の原因がないだろうか——。

5

三月一日と三日の上巳（桃）の節句の「一斉登城日」は、何事もなく済んだ。浅野内匠頭は、いつものとおり大広間の南側中央の「松之間」に多くの大名に伍して目立たぬように平伏していた。

保明は胸をなで下ろした。

ところが、三月五日の〈お逢いの日〉には、ちょっとした事件があった。

絶好の好天だった。桜はまだ三分咲きだったが、綱吉公は、上機嫌で桜の樹間を保明と共に逍遥され、平伏する黒鍬衆を引見された。日頃の「念を入れて務めい」のお言葉に加え「つくづくと身をいとえ」とまで言われて一同は大感激。

ところで、この派遣する黒鍬衆の中に、一際横顔の美しい女忍びがいた。

めざとく見つけたのは綱吉公だった。

「おなごには、この年になっても、なぜか目が敏うてな」と、悪戯っ子のように身をすくめた。

「お気が若い証でございます。女を見るお目が高いのだとお考えくだされませ」

保明は、ほほえみながら答えた。

「では自分で言うのも可笑しいが、目が高いと敢えて言う。で、あれはどこぞに送る女忍びじゃ」

「播州赤穂の浅野家でございます」

「ほう、此度、館伴を申しつけた浅野か。なにか隠密を送り込まねばならぬような問題があるのか。嗣子がないのか」

「嗣子はおりませぬ。が、弟の大学長広を仮後嗣として届け出ておりますれば、その点の問題はありませぬ。しかし、浅野については、調べたきことが多々ありますれば、身共の一存にて隠密の派遣、相決めました。その経緯と詳細、ここで上さまにご説明申し上げてもようございますが」

「いや、よい。そのような細事はそなたに任せる。余が知りたいのは、あの女の出自じゃ」

「と、申されますと？」

「判らぬか」

ここで公は、にやりと笑われた。

「あのおなごは、昔の伝そっくりじゃ。あれは将監の娘であろう。あ奴、相変わらず達者じゃな」

言われて、保明は、はっとなった。

「そう仰られれば似ておりました。私めともあろうことが迂闊でございましたな。では……、今からでも遅くはございませぬ。隠密を即刻やめさせ、お側仕えといたさせては？」

「その必要はない。そちらの方は、そなたの屋敷で待つ女だけで十分じゃ。そういえば、そなたの所に参ったのは二月九日だったな。十五日の母上との観桜の会の後、また早々に寄せてもらうことにしよう」

公は上機嫌で中奥に戻られた。

6

三月一日、三日、そして五日と続いた春の公式行事。この裏の大役を果たした保明は、五日昼過ぎ、疲れ切って常盤橋の自邸に戻った。

だが、六日後には、さらに大きな年中行事である「勅使東下」を迎えなければなら

ない。その前に会わねばならない男がいた。

家臣の細井広沢である。

実は、三ヶ月前、広沢を極秘に長崎の築島（後に出島と呼ばれる）に派し、在留オランダ人を通じて海外事情の聞き取りをさせていたのである。

その広沢が江戸に戻ってきて、早急に長崎報告をしたいとの連絡が入ったのである。

「ちょうどよい。弁庵（広沢の俗称）先生に、骨休めを兼ねて、今夕、駒籠（駒込）の六義館までお越しくださるようお願いしてまいれ」

保明は部下に命じた。直ちに使者が、浅草茅町の柳沢の別荘に住む広沢の所に飛ぶ。

保明も、肩衣袴に着替え、急いで六義館に向かった。すこしでも早く明るいうちに行って、未完成な作庭を進めておきたかった。

この駒籠の別邸は、元禄八年四月に松平加賀守の上屋敷を拝領したもので、当時増改築中である。更に元禄十年と十三年の二度に亘って地続きを拝領。総面積は四万八千九百二十一坪という広大なものとなった。

保明は、元禄十一年、この別邸の庭を六義園（またの名を、むくさのにわ）、建物を六義館と名付けた。贅沢なようだが、天下人・綱吉の側近筆頭として、昼夜の別なく献身する保明にとって、この庭は、唯一の〈癒しの場〉であった。

幸い、着いたのは保明の方が早かった。早速、肩衣袴も脱ぎ捨て、好きな野良着に着替えると、広い庭に草鞋履きで飛び出した。

働いている作男たちの迷惑にならぬよう、そっと庭園に紛れ込む。

生来〈土いじり〉が好きである。

土や草木は、丹精して育てれば育てただけきちんと結果がでる。手を抜けば、手を抜いただけしか人間に報いない。土は正直者である。人間のように、駆け引きもないし、裏切ることもない。

日頃、江戸城の権謀術数渦巻く真っ直中で悪戦苦闘する保明にとって、野良着でこの庭園に立つ時だけが、本当の人間に戻れる時空である。

忙しくて、江戸周辺から出ることができないところから、全国八十八ヶ所の名所をこの庭園内に造ろうと思い立ったのは昨年だった。まだ名所は半分も出来ていない。

「細井先生がお見えです」との注進が来た時も、保明は、写生で見ただけの〈妹背山〉の造成構想に夢中になっていた。

「殿さまが農夫姿でおられるとは、いやはや驚きでござる。ついつい、お見それしました」

広沢は、鼠小紋の小袖に茶の袴姿だった。鍬を握る保明の姿が信じられなかったのか、保明の側近くまで寄ってきて、自分の目で確かめた後、初めて屈託ない笑みを浮かべた。

細井広沢。遠江・掛川藩の御典医・辻玄佐知治の子で、保明と同年生まれの四十四歳である。広沢が十月、保明が十二月生まれだから、二月広沢の方が先輩ということになる。

十一歳で父の江戸詰めとともに東上し、父の期待を一身に集めて多方面の勉学に励んだという。

才が余りすぎて、勉学は儒学、陽明学から天文、測量、書道、果ては剣術、柔術、槍術、馬術、弓術、鉄炮術に及び、「十二芸に長じていた」というから、尋常一様な人物ではない。

（戦国の世なら、万石を以ても召し抱えることのできぬ人材）と、保明は信じた。事実そのとおりであった。それが、太平の世、巷に浪人があふれる時代とあって、わずか二百石で柳沢家に仕官してくれたのである。それも大身の甲府公・綱豊への仕官を振り切っての参加であった。

保明の方が直接幕政に参加できる可能性が高いという、いかにも実践を重んじる陽

明学者らしい広沢の選択であった。元禄三年末、保明が禄高三万二千三十石になった頃のことである。

（我が屋敷を開放し、どんな文人、学者でも心おきなく語れる場を提供したい）と思った保明は、この頃から積極的に在野の逸材集めを開始している。元禄九年に召し抱えた荻生徂徠もその一人である。

「早速ですが弁庵先生……」

鍬を置くと、保明は庭内の四阿に広沢を誘った。

「先生の長崎の土産話は後でじっくり聞くとして、まずは最近のこちらの動きについて、先生のご意見を賜りたい」

「よろしい。伺いましょう」

「実は、先月末、我が邸に高家肝煎の吉良上野介殿を招きましてな」

「ほう、あの権高な爺さまが、よくぞ殿のお屋敷まで……」

さすがに広沢は分析が鋭い。保明は、苦笑いで上野介〝拉致〟の一件はごまかしながら、「桂一計画」を、差し障りない範囲で語った。

聞き終わった広沢は、破顔一笑して言った。

「殿。自分の貴種を唯一の誇りとして生きている爺さまに、八百屋の娘を従一位にで

っちあげる朝廷工作をさせることが、そもそもおかしゅうはござらぬか。文字通りの矛盾というものじゃな」

「いや、全く先生の言われるとおりなのじゃが、実は朝廷の切所（攻め口）が見つからぬので弱っておるのだが」

「そうでしょうか」

広沢は平然と答えた。

「ほう、といわれると、なにかありますかな？」

「ないことはありませぬな」

「どこに？」

「歴史に――」

広沢は涼しい顔で言った。

「歴史でござるか」

思いがけぬ答えだった。

「さよう、温故知新。すべての問題も解答も、我々の歴史の中に隠れておりまする」

「それをお教え戴くにはどのようにしたらよろしゅうござろう」

保明は神妙に下手に出る。

「いや、拙者は逆に、殿のお働きで、もし桂昌院に破格の従一位が戴けた場合、殿はどのようなことになられるかと、お聞きしたいが……」
「どのように、と申されると？」
「要するに成功報酬でござるよ」
広沢は、あっけらかんと言った。
「さて、そこまで考えたことはござらぬが」
「それがいかぬのじゃな」
「いけませぬか」
「いかぬ。いくら人に仕える身でも、頭の中のすべてを仕える者に捧げているわけではない。それを弁えながら働かなくてはいけませぬ」
「なるほど」
「決して才を出し惜しめというのではありませぬ。ただ無限定に知恵を吐き出すなと申すのじゃな。ということで、殿は成功した場合、綱吉公にいくらの加増を申し出になられますかな？」
広沢は、にやにや笑っている。
「さあ、そこまでは……」

「五万石か十万石吹っかけなされ。拙者はその半分を戴く」
広沢は、すました顔で続けた。
「そのくらい大きく出なされ」
「なかなかもって、そこまではいえませぬな」
「では、拙者もやめたい」
「というと朝廷の切所もお教えいただけぬので」
「いや、それはいずれお教えしてもよろしい」
「いつ頃までにでござろう。余は一年以内に従一位を戴くと上さまに約束してしまいました。できねば腹を切るしかござらぬ」
「ははは、殿に腹を切られては拙者も食い上げになる。こうしましょう。半年以内にということで。亡き兄が大層に世話になったご恩もござれば無下には致しませぬ」
さわやかな笑みが漏れた。
ほっとした保明だが、両脇からは、冷や汗が流れ出ていた。

広沢には一人の兄がいた。細井知名。号を芝山と称し、父玄佐と共に、明石城主松平日向守に仕えていた。が、松平氏が転封となったことから、大和郡山に移り住んで

いた。

以後、七年の間、土地の故事旧跡を訪ね歩くうちに、「応仁の乱」以後の乱世に、多くの皇室御陵（天皇・皇后の墓所）が判らなくなっていることを知り、一念発起した。芝山は、余暇を割いては山野を渉猟し、御陵の隠れた所在地数十箇所を丹念に記録したという。

その後、藩主の移封で、しばらく下総（しもうさ）・古河（こが）にあったが、元禄六年、松平氏が断絶したため、芝山は浪人して江戸に出た。仕官して三年、ようやく生活の安定した弟の広沢を頼って、自分の調べた皇室御陵の荒廃を保明に報告。その祭祀（さいし）と修理を願い出たが、果たせぬままに元禄十年を迎えた。

この年の夏、芝山の嫡男（ちゃくなん）が早世し、気落ちした芝山も病床に伏す身となった。

見るに見かねた広沢から、再度兄の嘆願が保明の所に提出される。これが保明の「桂一計画」による対朝廷融和策の一つの柱となったのである。

綱吉は、保明の口添えで、ただちに朝廷の歴代御陵の修理を受理し、即実行してくれた。

大和の国の天皇・皇后の、お墓の調査について。

元禄十年九月。江戸（幕府）からの依頼によって、この年の十一月から与力六人、同心六人が三方に分かれて調べ歩き、翌十一年三月に、お墓の廻りに竹垣を造った。

はるか後年、幕末当時奈良奉行であった川路聖謨（かわじとしあきら）はこう記している。

御陵の修垣が始まることは、広沢からただちに病床の芝山に伝えられた。

この時の広沢の報告を、保明は今もよく覚えている。広沢は、満面に笑みを湛（たた）えて言った。

「兄は、拙者の報告を聞くと、病床から起きあがり、両手をついて江戸城に向かって平伏し、『いま聖君あり、賢佐（かしこい補佐役）あり』と、将軍と殿を讃（たた）え、さらに『これで、細井知名、死すとも骨の朽ちることなし』と申して、嗚咽（おえつ）の止まらぬほど喜びましてござる。お礼の申し上げようもありませぬ」

その兄・芝山は、元禄十年八月朔日（さくじつ）病没した。

（いいことをしてやれた）と思った記憶がある。

が、同時に、これも「桂一計画」の作戦の一つに過ぎなかったと思うと、ちょっぴり面（おも）はゆいところもあった。

保明は、そんな複雑な思い出をかき消すように広沢に言った。
「では、座敷の方に参りましょう、弁庵先生。今宵は長崎の垢落(あか)としと思って存分にすごされませ」
数日後――、江戸城で驚天動地の事件が発生するとは夢知らぬ、男同士の春の一宵(いっしょう)であった。

第二章　殿中異変　元禄（げんろく）十四年春

1

元禄十四年三月十四日――。

この日は、徳川幕府が、京からの朝使を迎えての、いわゆる「勅使下向」の三日目。五代将軍綱吉（つなよし）にとっては、朝廷への御礼の言葉を述べて、朝使を丁重に送り出す、という大切な日であった。

勅使登営（とえい）（登城）の予定は昼四つ（午前十時）である。

それまでの、時間の余裕はたっぷりとあった。

それでも、将軍綱吉は、日頃の生活行事を大幅に繰り上げ、中奥の御湯殿で斎戒沐浴するという入念な準備ぶりであった。

綱吉の朝使尊重の意向を受けた保明は、さらに慎重だった。

例年どおり、勅使下向以来の城内泊まり込みを続けている。

この日も、早朝から出仕して、綱吉が斎戒沐浴する御湯殿の次の間で、じっと待機していた。

（今日一日、何事もなければよいが――）

何気なく空を見上げる。

昨日とうってかわって、生憎、雲のたれ込める、嫌な空模様に変わっていた。

保明は、密かに、軽く舌打ちして、座り直した。

この後、将軍を待つ間は、無為の空間期間である。

だが、保明の頭の中は片時も休む間はない。

今朝がたから、

（どうしたものか）

という難問を、一つ抱えていた。

第一日目のことであった。朝使は、宿泊する伝奏屋敷（現『日本工業倶楽部』の建つ

辺り）から江戸城に登営し、幕府の年賀の答礼を将軍に言上した。

この時、かつて、将軍は、朝使より一段下がって答礼をお受けした。ところが、明正天皇の御代（在位一六二九～四三）、将軍が御外戚になったということで、答礼を同じ高さの「上段之間」でお受けすることにした。

将軍とは二代秀忠、三代家光である。秀忠にとって、明正天皇は孫（娘・和子の子）であり、家光にとっては姪であったから、一段下がってお受けする必要はないという判断である。

当時の激しい幕朝対立の中、幕府は武断派が勢力を占めていたから、幕府側の「抜き打ち」措置であろう。

保明は、一度、この点を吉良上野介に質したことがあるが、「存ぜぬ」との素っ気ない答え。

知らない筈はないのだが、上野介としては将軍の儀礼にまで触れたくなかったのであろう。

ともかく、同じ「上段之間」での答礼授受は、明正天皇の在位中の十数年続き、これが四代家綱、五代綱吉と、なんとなく続けられてきた。

ところが、三年前の七月、保明が左近衛権少将に任ぜられ、大老格になった翌年

の朝使で、「答礼をお受けなされるお場所、そろそろ元のしきたりに戻されるがよろしゅうはおじゃりませぬか」と柳原前大納言に、やんわり忠告されたのである。

（そして去年も、今年も……）三年連続の、前大納言の、ねっとりした囁きが保明を悩ませた。

銀二百枚、綿百把という過大な―収賄に近い―土産物を幕府から戴いている手前、強面の要請はしない。がそれだけに、ねちねちと嫌らしい。

今年は、下段に控えている保明に、ちらりと物問いたげな視線まで投げてきたのである。

柳原前大納言の投げた視線は、明らかに（まだ将軍に〈答礼授受の件〉を伝えていないのか。側近として怠慢ではないか）という督促の含みがあった――、と今も思う。だが、保明はあえて無視した。確かに今の綱吉には、二代将軍、三代将軍のような、孫や姪といった天皇家からの血縁関係は遠い。

しかし、綱吉の御台は前左大臣・鷹司教平の娘・信子。霊元上皇の中宮（皇后に当たる）は房子。二人は姉妹である。つまり綱吉と霊元上皇とは、義理の兄弟関係にあたる。そして現天皇（東山天皇）は霊元上皇の第四皇子である。

この相互関係を考えれば、答礼授受を同じ「上段之間」で行っても差し支えないのではないか。

まして現天皇は、温厚なご性格で、保明が細井広沢の提言で行った歴代山陵の修復をいたく喜ばれておられる。問題は対幕強硬派の上皇だけではないか。せっかく好転した幕朝関係に、こんな些細なことで水を差すべきではない。

この十四日朝の一時も、長い自問自答の末、（このままでいこう）と保明は自分に言い聞かせた。

納得すると、急に気が軽くなった。

そこで上さまの様子をそっと窺って見る。

どうやら、今日はことのほか斎戒沐浴が長いようだが――、耳を澄ますと、なんと、御湯殿の方から、「とうとうたらりたらりら……」という上さまの高い声と共に、女どものかすかな含み笑いが漏れてきた。

昨日、朝使饗応に、七つの能・二つの猿楽を催した。その曲柄の冒頭『翁』の「前触れ」の一節である。

上さま自ら吟じておられるようだ。

（ご機嫌のいい証拠だ）

昨日、饗応の折、「わが母者の件をよしなに」と、柳原前大納言に確認の耳打ちをされたとき、前大納言が大きく頷いたという。これが上さまのご機嫌な原因であろう。後で上さまから、この話を伝え聞いた保明は、「それはそれは、よろしゅうございました」と、当たり障りなくお答えをしておいた。そんな生やさしい問題ではないとは思いながらも……。

と――、ここで突然、御湯殿と違う本丸表方面から、遠く、鋭い奇声が上がった気がした。

しばらくすると、せわしい足音が、怒声と共にこちらに向かってやってくる様子。

すわ異変か！　保明は本能的に立ち上がった。

御湯殿との間の襖の前に立って、そっと小さ刀の柄を握り締めた。万一曲者が駆け込んできたら、身をていして上さまを守らねばならない。

ふと、十七年前の記憶が頭をよぎった。

貞享元年八月二十八日、保明二十七歳の時のこと。時の大老・堀田正俊が、城内で若年寄・稲葉正休に刺殺され、正休も居合わせた役人たちに斬殺されるという大事件が発生した。

この時の騒ぎで側用人の牧野成貞が、あわてて、綱吉の御座所に、報告のため走り込んできた。瞬時の判断で、保明は身をていしてぶつかり、成貞に怒鳴りつけられた。相手は御側用人、こちらは、たかだか小納戸役。

「この火急の際になにをする、無礼者」

といわれたが、保明は黙って成貞の腰の辺りを指して平伏した。

成貞は、自分の腰を眺め、刀を帯びたまま将軍の前に出ようとした自分の非礼に気付くと、そのままへたり込んだ。

「よくぞ止めてくれた」と成貞は礼を言い、改めて身を正したうえで将軍への報告を果たした。

成貞は、この話を綱吉に隠さなかった。

やがて、事に当たっての保明の沈着冷静さが上聞に達し、現在の大出世の端緒となったのである。

そんな甘い記憶を、今、保明は振り捨てようとしていた。本丸表といっても三千坪以上の大建築物である。奇声は、どうやら本丸表中央付近からのようだが、普段は森閑と静まりかえっているから、遠くからの声でも伝わる。だが、距離的には恐ろしく

遠い。それでも足音の方は確実に大きくなっている。それもどうやら複数人のようだ。

他方、綱吉公の方は御湯殿を出られ、御化粧之間で、御櫛上げを終わり御装束にかかられたらしい。

本丸表の騒ぎが公に聞こえてはいけない。

保明は、思いきって席を立った。公からできるだけ離れ、御通廊下の半ばで、こちらに向かってくる曲者と対決しようと思ったのである。

だが、息せき切って現れたのは曲者ではなかった。

数人の表坊主。保明には名前もろくに知らない者たちである。それぞれが勝手に、出入り禁止の中奥前までやってきて、

「一大事にござる」

「浅野さま御刃傷」

「吉良さま御流血の大惨事」

と泡を吹いて喋りまくる。脈絡もなく、一向に要領を得ない。

保明は一喝した。

「控えよ。上さまの御出御、間近ぞ」

だが今は、上位の者は大名から老中、若年寄まで、重装備の式服で動こうにも動け

まい。彼らが迅速に報告にくる可能性は少ない。
（やむを得ぬ。坊主の報告でも聞かぬよりまし）
と保明は即断。急ぎ近くの「囲炉裏之間」にこの者たちを招き入れると、早口に命じた。
「まもなく上さまの御出御じゃ。急ぎ余に聞かせよ。誰が、何処で、何をしたのじゃ」
「はっ」と、真っ先に答えたのは、奥坊主部屋の関久和という若手坊主だった。
保明が名前を知る数少ない一人であった。
関久和はひるむ様子もなく、保明を見上げながら答えた。
「御下間の件、順を追って申し上げます。刻は、朝五つ半（九時）すこし過ぎと心得ます。私どもは、朝使をお待ち申し上げるべく、柳之間溜りの御廊下にて待機しておりました」
「うむ、それで」と、聞きながら、保明はそっと公の様子に耳を澄ませた。御櫛上げはまだ続いている。時間はある。話を続けさせよう。
「事件の発端は白書院前。本日の役方の控え所となった柳之間を、急にお出ましになられた浅野さまが、急ぎ足で白書院に向かわれるのが見えました。そこには梶川さま

と立ち話しておられた吉良さまがこちらをご覧になっておられ……」

柳之間溜りから隣の柳之間の動きを知ることは容易である。白書院も、西北側の中庭を隔ててではあるが、久和が望見できない所ではない。

「続けよ」と、保明は先を急いだ。

梶川は名を与惣兵衛頼照といい、大奥留守居役の旗本である。なんのために、この場に、のこのこ出てきて吉良と話していたのかは解らない。

が、これは後で調べるより他はない。

「浅野さまは、白書院まで来られると、吉良さまと、なにか一言、二言お声を交わされたようでございますが、私めの耳までは……」

「聞こえなかったと申すのじゃな」

念を押す。

「はい、残念ながら」

「しかし、近くには聞き取った者がおろう」

保明は、これだけは後々のため確認しておかねばと思ったが、久和は、「居られるとは思いますが、私めにはわかりかねます」と、慎重だった。

周囲に居たのは偉い殿様ばかり。聞き質すわけにもいかない、といいたいのかもし

れない。

「この直後でございます。浅野さまが突然、小さ刀をお抜きになり、『覚えたるか！』と大声で叫ばれて、吉良さまに斬りかかられましたのは……」

覚えたるか？　妙な言葉だ。その前置きが抜けている気がする。それに小さ刀は、普通、相手を刺すもので、振り回すものではない。

「いえ、確かにそう叫んで斬りかかられました。私めがこの耳と目でしかと――」

「なればよし。続けよ」

「そこで、私、急ぎ白書院まえへと駆けつけましてございます」

「ほう、そちが！」

奥坊主にしては出すぎた行動に思えた。

保明の疑問に、久和はひるむことなく答えた。

「はい。私め、こう見えても、いささか腕に覚えもございますれば……」

しかし、そんな久和自身を詮議している暇はない。構わず急ぐ。

「解った。先を……」

「はい。私めが書院に向かう合間のことでございますが、浅野さまは、吉良さまの御眉間に向かって御一刀浴びせられました。しかし、間一髪、梶川さまが身体ごと飛び

込んで阻止なされ、大事には至らなかったようでございます。次いで、梶川さまが『御場所柄でござる。お止めくだされ』と叫ばれ、浅野さまのお手首を取られました」

「右腕の手首か？」

「はい、さようで」

武士がやすやすと右手首を取られるとは、浅野も情けない男よ、と思った。が、この日、浅野は重装備の束帯。一方、軽輩の梶川は布衣の軽装。身動きの速さに差があったのだろう。

「で、浅野は？　おとなしくなったか」と、保明は、核心に迫り、無意識に身を乗り出した。

「いえ、浅野さまは『お放しくだされ、お放しくだされ』と悲痛な声で叫ばれ、一旦は身をよじって梶川さまを振り切られました。さらに小さ刀を握り直され、此度は、松之廊下の方に逃げられた吉良さまを追われて、背後から吉良さまの御背中を、袈裟切りに一刀浴びせられました」

「二の刀で、浅野が背後から斬りつけたと申すのじゃな。で、吉良の様子は如何に？」

「幸い深手には到らなかったご様子。と申しますのは、梶川さまが、此度は浅野さま

を背後から両の手ごと抱き抱えられたからでございます。そこに私が加わり、僭越ながら、浅野さまの小さ刀を、お押さえ申し上げました。浅野さまは、二人がかりで背と小さ刀を押さえられてからは、がっくりとお力が抜け、御廊下際にて、崩れるように腰を落とされてございます」

「解った。だが、吉良の手傷で、白書院と松之廊下を血で汚しはしなかったか？」

「さてそれは、品川豊前守さまが吉良さまに駆け寄り、覆い被さるようにして、そのまま高家衆の詰所にお運びなされたので、それはなんとも……」

「見えなかったか。では仕方がない。ここまでじゃ」

保明は立ち上がった。上さまへの初期報告は、これで十分。だが問題は朝使。こんないざこざは、彼らの耳目に入れたくない。

（今後の「桂一計画」にも悪影響があるだろう）

ふと不安がよぎった。

2

「上さまの御英断を得たきことが二つございます」

綱吉の、さわやかな正装姿の前に出ると、保明は努めて平静を装った。一大事という言葉は、将軍との応答では決して使わない。使いたくなかった。必要なのは仰ぐべき御判断。感情や感覚は一切抜き。だが、この時ばかりは、勝手が違った。

「なんじゃ、出羽。顔色がよくないぞ」と、心中の動揺を、あっさりと見抜かれてしまった。

保明は、己れを恥じた。この程度のことで顔色が変わるとは、まだまだ俺も未熟だな――。

保明は、意識してゆっくりと言上した。

「顔に心の動揺が出たとすれば、お恥ずかしき限りでございます。実は、先刻、表（本丸表）にて、つまらぬいざこざがあり、多少の流血騒ぎになったとの報告を受けました。御答礼の席の直前ゆえ、対応を考えるにいささか苦慮いたしました。未熟者とお叱りくださいませ」

「さようなことはかまわぬ。いざこざで血をみたというは事実か？　大事な式の直前であるぞ。誰じゃ一体！」

今度は綱吉が顔色を変える番だった。

「はい、事を起こしたのは、浅野内匠頭。先日いささか気になり申し、上さまご存じ

のとおり忍びを派したばかりにございます。今朝のいざこざの発端の事情も、目下は不明でございます。しかしながら、原因や動機はいずれ解明いたしまするが、城中の刃傷は御神君以来の御法度なれば、先例に即し厳しいご処断が必要と存念いたしまする」

「当然じゃ。例の母上の頼み事の行方にもかかわる大事ぞ。厳罰を以て臨め」

「心得ましてございます」

「で、浅野の相手は誰ぞ」

「高家の吉良上野介殿。幸い浅野の軽挙を阻止する者あり、軽傷で済んだとのこと。目下お手当を受けている最中の由にございます」

「それは重畳。まだあの男には母がことで働いてもらわねばならぬでな」

事件を、「桂一計画」への影響を巡って考える点では、保明と同じだった。

「で、余になにを決めよと申すのか」

「一つは白書院がこと。血の不浄を見たとなれば、今朝の御式事の場を変更すべきかと……」

「判らぬよう、直ちに黒書院に変えよ。次は？」

「饗応役を別人に差し替えねばなりませぬ」

「腹案は？」
「下総佐倉城主・戸田能登守殿。来年の候補者と存念いたしおりまする者にございます」
「よかろう。そちに任せる」
「では即刻――」
保明は、さっと立ち上がった。

3

将軍勅答の儀式は、急遽、場所を黒書院に変更する旨を朝使方に伝達し、滞りなく行われた。
混乱は、式の直前、間一髪で収まった。
保明の指示が飛ぶ前に城中の混乱を収めた者がいる。志州鳥羽の城主松平和泉守乗邑である。
この年わずか十六歳。後に松平左近将監を名乗り、老中筆頭に栄進する資質は、この危機に際して、遺憾なく発揮されたのである。

乗邑は、いい年した大名が、決められた部屋の配置を離れて右往左往する体(てい)たらくを見て、苦々しく思ったのであろう。大音声(だいおんじょう)で叫んだという。

「方々御鎮(おしず)まりなされい。方々の御伺候(ごしこう)は、かかる場合の御用を承らせんがためではおわさぬか。静かに御着席あって、御老中方の御指図を御待ちそうらえ」

この一声で、大人たちは、こそこそと席に戻り、城中は水を打ったように鎮まった。

他方、外の大手門内庭は、殿中の刃傷と聞いて大下馬(おおげば)先から駆けつけた大名の供廻りなどでごった返した。これも御目付(おめつけ)役・鈴木源五右衛門が営中から駆けつけ、

「殿中の刃傷は、浅野内匠頭殿と吉良上野介殿、その余(よ)の方々は別状なし」

と大音声。さらに御徒目付(おかちめつけ)数人を隈無(くまな)く走り回らせて事なきを得た。これと前後して、保明から、将軍・綱吉の命令として次の指示が伝えられた。

式場の黒書院への変更
浅野内匠頭の饗応役罷免(ひめん)・田村家お預け
戸田能登守の饗応役新任

続いて保明は、朝使の黒書院誘導のために、

麝香之間(じゃこうのま)・大広間の取付

を命じた。松之廊下から白書院へと向かう時は、部屋の襖絵(ふすまえ)などを鑑賞に供するた

め、開け放たれる。しかし、黒書院に向かうためには、あちこち覗かれると使者の誘導が厄介になるため竹製の据物を置いて通行を閉ざした。次いで、

蘇鉄之間伺候者の移動

南北に長く、通常は諸大名の登城の世話係の控える所である。松之廊下を避けて黒書院に行くには、この前を朝使にお通り戴くことになる。目障りになるのを恐れて在室者を追い出し閉鎖した。

しかし、両書院の広さの違い（白書院五十二畳半、黒書院三十六畳）、特に上段之間の広さの差（白書院二十八畳、黒書院十八畳）はどうしようもない。儀式の後、「御休息之間」（大広間の転用）に戻ると、公家からどっと不満が出た。

「式場の御変更は、事前に承っておじゃりましたが、御上段が狭うて狭うて、麿などは危うくこぼれ落ちそうになりましたえ」

柳原前大納言は皮肉たっぷりに訴えた。

いくら黒書院の上段之間が狭くても、勅使最上位の柳原前大納言が、十八畳の上段から落ちこぼれるはずもない。

あくまで公家独特の嫌みである。

だが保明は、じっと耐え、

「それはそれは、到らぬこととて、ご無礼仕った。二度とこのようなこと、いたさせぬ所存なれば平にご容赦を」

丁重に詫びて座を立った。公家との、のらりくらりの会話に付き合っている暇はない。

上さまが式服から執務着にお召し換えになる間、かなりの余裕がある。この間を利用して刃傷事件報告を関係者から聴取しなければならない。

朝使一行を、なんとか納得させて昼食の用意されている伝奏屋敷に送り返すと、保明は一人「時計之間」へと急いだ。

本丸表と中奥の境界にある小部屋である。中奥への出入りは、「御錠口」が正式な出入り口だが、この時計之間を抜けても出入りできる。その方が、正確な時刻を知って行動できるため、なにかと便利で、保明はもっぱら、ここを本丸表と中奥の往復に使っていた。

通常は、時計坊主が数人侍って、当時「自鳴鐘」と呼ばれる時計（和時計）を主に管理している。

自鳴鐘は湿気を嫌う。部屋は密室に近く、時刻が判るので会合に適していた。もちろん、その場合は、時計坊主は部屋から追い出させる。

時計部屋の一番奥の上席に座った保明は、

「では、お願い申す」

と、待っていた月番老中・土屋相模守と当番目付・多門伝八郎、同目付・近藤平八郎に告げた。

ちなみに江戸城内の刃傷事件は今回が三度目である。

最初は、寛永五年（一六二八）八月十日。

目付・豊島刑部信満が老中・井上主計頭正就を殺害した事件。加害者の豊島はその場で小姓役番士・青木久左衛門忠精の手によって斬り殺された。あるいは自裁との説もある。保明が生まれていない頃のことで、記録でしか知らない。当事者両方が死んでいることもあってその原因究明はされず仕舞いである。

二度目は貞享元年（一六八四）、八月二十八日。

若年寄・稲葉石見守正休が大老・堀田筑前守正俊を刺殺している。この時は老中四人が寄ってたかって、その場で加害者の稲葉を斬殺した。前述したように、これは保明が小納戸役の頃のことで、事件の判断側には加わっていない。

今回が、保明が幕閣として対処する最初の事件となる。だが、困ったことに――、

前例とは二つの点で大きく違っていたのである。

今回が、過去の刃傷事件と異なるのは、

第一に、加害者（浅野内匠頭）被害者（吉良上野介）共に生きていること。

第二に朝使下向という、賓客を招いている最中の失態であること。

特に第二の点を、綱吉と保明は「桂一計画」との絡みで重く見ている。

この政治判断の綾と重みは、規則を建前とする部下に説明が難しい。それが厄介である。それもあって、保明は、穏やかな口調で切り出した。

「まず、皆々様に断って置きたい。小職は、いつ何時、上さまから此度の件でお呼び出しを受けるやも知れぬ。よって結論を急ぐ。事件の吟味報告は、浅野が存念糾し（事実糾明）してからとせられたい」

出席者は一同に、顔を見合わせて頷き合う。そして、

「では、拙者から」

と、目付の多門が口を切った。

多門伝八郎。四十三歳。禄高は七百石の小身だが、当時、この目付という「役方」は——我々の想像する以上に——強大であった。

まず、評定所のあらゆる審議に加わり、すべての書類を検閲し、訴訟・土木・兵事・国防など幕政一切の監察権を持っていた。そのため随時、国内を出張し、学問所から普請場まで臨検できた。

殿中の作法を正すのも、その権限の一つで、殿中で小刀の鐺（鞘尻）が襖に触れただけでも、本人に下城停止を命じるほどの力があった。

武士の家では、「お目付が来た」といえば泣く子も黙ったという。

目付を現代にたとえるなら検察官であろう。一人一人が独立機関であり誰の指示も受けない。この時、上司の老中土屋相模守を差し置いて単独で保明への報告を始めたのも、この職柄故である。

なお、目付は、徒頭・小十人頭・御小姓から、あらかじめ先輩目付の投票によって選ばれ、若年寄の認可を経て就任する。徳川幕府の「役方」の中では、――年功序列とは全く無縁な――異例の登用方式の職である。それだけに名誉心と誇りが強い。特に当番目付である多門伝八郎は、堅物で有名だった。その四角四面な性格から、「あの男は、登城の時、石垣を直角に曲がることしか知らず、斜めに突っ切ることができない」と揶揄されるような男である。この日も、朝使の儀式が終わると、早速、役儀の地味な黒紋付に着替えていた。

大老格の保明の前でも、物怖じすることなく伝八郎は報告した。
だが、その語る内容は、保明の期待からは、ほど遠いものであった。

4

意外だったのは――、伝八郎が、
「結論から先に申し上げます。浅野内匠頭殿は、この度のことに関しては、一言も申し開きをされませぬ。上将軍家に対しては、いささかの恨みもないと申されました」
と、最初から情状酌量願いのような姿勢で陳述を始めたことである。
保明は腹を立て、
「いや、余は此度の浅野の軽挙妄動の原因がなにかを知りたいだけじゃ。上さまへの恨みの有無などは論外ぞ」と、論述の軌道修正を求めた。
しかし、伝八郎は、
「その点については、全く浅野殿お一人の宿意で前後を忘却し、刃傷に及んだゆえと申されました」
とまでしか言わない。

「宿意？」

保明は思わず聞き返した。

思ってもみない言葉である。前々から浅野が吉良に恨み心を持っていたとは知らなかった。

「では、宿意とやらの内容は如何に」と追う。

すると、「それが内容は皆目わかりませぬ。ご本人も、これ以上は口をつぐんで語りませぬ」と、後はなんとも、しどろもどろである。

「それでは、なにもわからぬと同じではないか」

そう叱ると、「残念ながら……」と、首をすくめるだけであった。やむを得ずこちらから、

「余が今朝ほど、事件早々にやってきた坊主たちから聞いた所では、浅野は吉良に切りかかる時、『覚えたるか！』と、大声を発したそうだが……」

と、誘いをかけた。

「いや、それは初耳。梶川殿は拙者にそのようなことは申されませなんだ。この点、相模守さまのお取り調べでは如何でござりまするか」

伝八郎は相模守に質疑の先を向け変えた。

どうやら、土屋相模守以下の老中は、梶川を招いて、独自に参考人の聞き取りをしていたらしい。

不意の名指しに、相模守は一瞬たじろいだが、それでも慎重に、言葉を選ぶように答えた。

「いや、拙者が梶川から聞き取ったところでは、浅野は吉良殿の所に走り来たりて、こう叫ばれたそうな。『此間の遺恨覚えたるか』と……」

関久和が聞いた「覚えたるか！」の前にあったのはどうやら「此間の遺恨……」という言葉だったようだ。新しい事実の発見ではあるが内容がない。このまま事件が世間に拡まれば、憶測が憶測を呼び、物見高い一枚摺屋（後の瓦版屋）の虚言・虚報の餌食になることは必定である。

明日にも幕府としての統一見解の発表をせねばなるまい――。保明は、ここで決意の臍を固めた。

再び伝八郎の陳述――。

「拙者の吟味の間じゅう、浅野殿は繰り返し申されましてございます。この上は如何ように御咎めを仰せつけらるるとも、かれこれ申し上げる筋はござりませぬ。よろし

く御処分願いたいと」

保明は舌打ちした。これでは、まるで開き直りではないか。どうやら伝八郎は、こんな姿勢を〈潔い〉と勘違いしているようである。

保明は、自分の弁論に自己陶酔しているかのような伝八郎の赤ら顔を避けて部屋の大時計を眺めた。すでに質疑に入って四半刻が過ぎた。まもなく上さまからお呼び出しがかかるだろう。だが、この間に得た知識は、「覚えたるか！」の前の「此間の遺恨……」の五文字のみである。

それも梶川のような、大奥から偶々出てきただけの、言ってみれば闖入者の証言である。

肝心なのは、「遺恨の内容」だが、それを浅野は頑なに開示しない、いや、できないのかもしれない。だとすると――。

それは、遺恨が、披瀝するに値しないほどのものか、それとも、逆に天下の経綸（幕府方針）に関わるような重大なことかのどちらかであろう。

おそらく後者だ。言葉の行き違い程度とは思えない。だからこそ開示できないのではないか。

ここまで考えて保明は、はっと気がついた。

もしやそれは、吉良の江戸帰国の遅延と関係しているのではないか。
保明の推理は、さらにここで飛躍する。
伝八郎の報告の最後、浅野が次のように嘆いたとの件が手がかりとなった。
――ただただ、上野介を討ち損じたことを残念に思いまするとと申されました――
大名が、それほど老人一人を殺せなかったことを残念と思うのはなぜであろう。
もしや？
（吉良は、先月中旬、一日、二日の遅れだけで帰国していたということが本当だったのではないか。浅野は、勅使饗応の指導を受けるため、吉良邸に何度も赴いた。そこで浅野は、なにか大名として、あるいは男として耐え難い侮辱の言葉を浴びたのだ。それは五万三千石を秤にかけて捨てても惜しくないと思い詰めるほどの屈辱だったのだ。きっと――）
浅野は、本当に怒っていたのだ。
だがそれにしても、選りに選って朝使との儀式の真っ最中に私怨を晴らすこともないではないか。後一日の我慢――が、なぜ出来なかったのか！
この自制心の欠落は、間違いなく、あの持病の痞、そこからくる乱心に違いない。

5

乱心の原因がどうあれ、男の行動は、結果責任で判断すべきであるというのが、保明の持論である。その意味で、この時点での保明の結論は、「浅野の乱心」という線で固まりつつあった。

だから――、上さまが何と思われようと、いっそのこと、この傷がもとで吉良が死んでくれれば、なにもかもすっきりする。

「で、吉良の様子はどうだ。重傷ではないのか」

できればそう願いたい。そんな気持ちを込めて保明は伝八郎に訊ねた。ところが――、

「いや、吉良殿の取り調べ役は拙者ではござりませぬ。久留十左衛門、大久保権左衛門の担当でござる。ただいま駆けつけて参りまするゆえしばしのお待ちを」

こんな危機に際しても、伝八郎は目付の権限とその範囲に拘っていた。

保明は、そんな小役人の考えの馬鹿ばかしさに再び舌打ちした。

（俺にはそんな暇はないのだ！）

そう言いたかった。

だが、保明の堪忍袋の緒が切れる寸前、十左衛門と権左衛門があたふたと飛び込んできた。

「遅いぞ！」と、土屋相模守が、保明を代弁して怒鳴りつける。その剣幕にあわてた二人が、ぺろりと、余計なことを喋った。

「申し訳ありませぬ。実は、吉良殿の手当に当たった御典医に、傷の状態について、再度その後の様子を聞きに参っていたものですから」

「御典医？」

保明は、十左衛門の言葉を聞きとがめた。

「では、吉良殿は、御典医の手当を受けられているのか。それはどなたのお指図だ？」

保明は、ちらりと十左衛門を睨む。

「ははっ」と十左衛門は平伏したまま声がない。

返事ができないのである。

だが、隣の土屋相模守の蒼白になった顔が、「老中方の指示」を歴然と物語っていた。

城中での刃傷の際、一方が乱心の時は、負傷者の治療は幕府の責任である。乱心でなく、双方の意地――伝八郎のいう「宿意」――で刃傷に及んだ場合は、両者の手落ちとなり、負傷者は自己責任で手当すべしというのが昔からの定めである。

目付が御典医に治療の指示を出すことはない。

当然、それは老中。ということは、老中は、「内匠頭乱心」の線で、すでに走り出していたことを意味する。

「相模守殿」

と、保明は呟み付けた。

「ははっ」

と相模守は、からくり人形のように平伏した。

「老中方は、すでに浅野の行為を乱心として結論を出されているやにお見受けするが如何に」

相模守の肩が震えだした。

「いえ決してそのようなわけでは……しかし、先例に鑑みれば早まった指示でござった。されば早速に治療費の方は、しかるべく処置を……」

と、相模守は、弱々しくかすれた声で答えた。

「いやいや、そのような些細な出費のことで相模守殿を責めておるのではない。吉良殿の出血が酷ければ緊急の手当も必要。偶々御典医が通りかかったのかもしれぬでな」と、保明の方から助け船を出した。

この事件、保明は、できれば老中と対立したくなかった。まして保明自身、この時、判断が「遺恨」から「浅野の乱心」へと傾きかけていた所だったから、尚更であった。

「では、ここで吉良の様子に話を戻そう。目付殿が意見を訊いたという御典医殿はどなたじゃな」

保明の言葉に「はっ」と、かしこまった久留十左衛門と大久保権左衛門が口をそろえて答える。

「津軽意三師（内科）と坂本養貞師（外科）のお二方でござる」

「ほう。栗崎道有殿は如何なされた」

栗崎道有が、外科の主任御典医である。だが、生憎、この日は城上がりしていなかったようだ。

「では、坂本養慶師の御見立てを承ろうか」

「はい。坂本師は、即座に血止めの処置を講じられ、額の出血は早々に止まったと申されました」

当時の血止めは生薬に石灰を混ぜた膏薬。即効性は抜群によかった。

「うむ、で、お背中の方はどうじゃ」

「こちらも上野介さまの下着の白帷子の袖を引き裂いて、これに血止めの膏薬を付けて巻き置いたそうでございます。まもなく出血は収まったとのご報告を戴きました」

（なんだ、たいしたことにはならぬのか）

保明は内心落胆した。ところが、十左衛門の次の一言で、事件は新しい展開となった。

「なお、さきほどお話に出た治療費のことでございますが……」

「ほう。そなたに意見があるなら忌憚なく申すがよかろう」

保明は努めて優しく呼びかけた。

「はい。有り難き仰せ。では拙者の存念を申し上げます。この刃傷事件が、もし浅野さまの乱心でない時のことを想定し、拙者、勝手ながら吉良殿に念を押しておきました。その場合は、治療費用は吉良殿のご負担になるが、それでよいかと」

十左衛門は、ちらりと伝八郎を見て言った。

どうやら二人には見解に相違があるらしい。

保明は、目付間の意見の相違を無視して十左衛門に話しかけた。

「念のいったこと、褒めてとらす。で、吉良はなんと答えたのじゃな？」
「吉良さまは、お支払い致しますと申されました。しかしながら、此度の事件は、ひとえに浅野が乱心。拙者には、毛頭恨まれる筋合いはござらぬゆえ、そのようなことにはならぬであろうと」
「ほほう。吉良は、此度の事件は、ひとえに浅野が乱心だと申すのじゃな」
保明は身を乗り出す。
「御意」と、十左衛門が受けた。
「では、先ほどの〈宿意〉とやらの話と食い違うな、多門殿」
保明は、再び話を伝八郎に向ける。
しかし、伝八郎は抵抗した。
「今の吉良殿の話、全くもってけしからぬこと」
すでに、先ほどから、ぷりぷりして十左衛門の吉良報告を聞いていたらしい。
「では、そなたの存念を申してみよ」と、保明。
伝八郎は、再び顔を紅潮させてまくし立てた。
「拙者も、浅野殿の乱心の有無については注意深く観察致してござる。去る十一日、お疲れのあまり痞を起こし、藩医寺井玄渓殿の診察を受けられました。その後の投薬

の効果ですっかり平癒され……、今朝方の浅野殿は、全くの正常心でございました。間違いなく両者には、以前からなんらかのわだかまりがあったと存じまするが」

「そうか」

「それに拙者、浅野殿に、その事、吟味にあたってしかとお訊ねいたしております」

「その事？　しかと？　とは、どういう意味じゃ」

「気は確かか、御乱心ではなかったのかと。その吟味記録がここにござれば、どうぞご覧くだされ」

やおら懐から、吟味の時に書きとめたらしい走り書きで、浅野の言ったままを見せた。

乱心ニアラズ　即座ニ何トモカンニンノ　成ラザル仕合（成り行き）アルユエニ斬リツケ申シタ

しかし、乱心している者に「乱心ではないか」と訊ねれば、誰でも「とんでもない。まともだ！」と否定するに決まっている。

（吟味で乱心の動かぬ証拠を示し、本人に認めさせることが基本ではないか。馬鹿ばかしい）

保明は、最後にもう一度念を押した。

「そうか、浅野は、あくまで乱心にあらずと言い張るのだな。なればやむを得まい」
「と、申されますと？」と、伝八郎は不安そうな目で保明を見上げた。

6

保明は、伝八郎を睨み付けた。
「乱心にあらず、しかし、宿意の内容の披瀝もできぬとあれば、小職が独自で判断するしかない。その場合は反論は許さぬからさよう心得よ。それが嫌なら、今からもう一度浅野の元に走り、その宿意とやらを吐かせるがよかろう。よいか」
愕(おどろ)いた伝八郎は、真っ青になって飛び出していった。続いて後の三人の目付も追った。
これから内輪で相談事でもする気なのだろう。
（愚かものめが！）
去っていく伝八郎らの背中を追いながら、保明はそう思った。
そのまま中奥に戻ろうと立ち上がる。
ところが、残っていた土屋相模守が、ここで、おどおどした様子で声を掛けてきた。

「拙者より申し上げたき儀がござるが……」
「なんでござろう」
「今のご報告に付け足したきことがござる……」
「ほほう。では申されよ」
保明は仕方なく座り直して時計を見た。
上さまの衣装換えは、すでに終わったかもしれない。だが、相手が老中では、立ち話もできない。
「申し上げたき証言は、例の、浅野の止め男・梶川の申すことでござるが……」
「うむ、手早くお願い申す」
大奥留守居役の梶川が、なぜ、あの時、本丸表に出てきたのかは、事件の核心とは関係がないように思った。
だが――。
「まず第一点。浅野殿が斬りかかった順でござる。最初に後ろから切りつけたのか、前から切ったか」
と、相模守は、思わぬ問題から入ってきた。
それなら興味がある。

保明は応じた。

「その点については、小職が今朝ほど表坊主どもから得た報告の限りでは、浅野は最初、吉良に呼びかけて、なにやら一言、二言。その上での刃傷なれば、まず正面から斬りつけたものと思っておったのだが……、違うか」

相模守は頭を振った。

「梶川証言では、浅野は、最初に吉良殿を背後から小さ刀を一閃。愕く吉良殿が向き直ったところを、その額に向かって二の刀を振るわれたと申すのでござるが……」

「まさか！」

いやしくも武士たる者が、背後から人を斬りつけることなどあってはならないこと。まして己れは五万三千石の禄をはむ大名ではないのか！

しかし、相模守は首を振り続ける。

「拙者も、浅野の名誉に関わることゆえ、何度も確かめましてござる。だが、梶川は、浅野は最初、間違いなく吉良の背後から斬りつけた。それを拙者がお止め申したと言って聞きませぬ……」

（余計なことを言う男だな、梶川は！）

あり得ないと思う。が、たとえあったとしても、武士の情け、後ろから斬りつけた

などとは「言わぬが花」の証言ではないのか。

だが、こうも考え直した。

（そうか――、だとすると、やはり浅野は乱心なのだ。いや乱心と考えてやらなければ、かえって〈武士の名誉〉を辱めることになる）

どうやらこの〈逆説の証明〉が事件の落着ではないかと思った。それに、乱心の上の凶行なら、――当時まだその旨の公式通達はないが――下手人（浅野内匠頭）の刑事責任能力の軽減を口実に、浅野家の存続を諮る余地が残る。

それが浅野家のためだ。よし、この線で明日の幕府公式通達を書かせよう。そう決心すると、保明は、胸のつかえが一度に消えたように軽くなった。

「解った。だが、まだあるのか？」

保明は、冷静に戻った。しかし、相模守は、

「ござります。更に事件の根幹に関わることでござるが……、よろしいか」と、念を押してきた。

「これ以上、今更なにも驚かぬ。この部屋は外部と遮断されておりまする。遠慮なく申されよ」

保明は、頷くと、そっと目を閉じる。

「されば申し上げる。実は今朝の朝使がことでござるが、この刃傷事件の起きたとき、御一行はどこに居られたと、出羽さまは思し召されるや」

保明は、目を閉じたまま答えた。

「小職は、朝使が伝奏屋敷から御登営（登城）の途中と理解しておるが……、それがなにか？」

「ところが……」

相模守は一旦言いよどんだ後、「……朝使は、この時、すでに本丸表の『御休息之間』におられましてござるぞ」と叫んだ。

「なに！」

保明は思わず目をむいた。

一瞬、意味が理解出来なかった。

朝使の御登営予定は昼四つ（午前十時）。

上さまが斎戒沐浴に入られたのは、その一刻前。

保明が、隣室で上さまをお待ち申し上げ、本丸表の絶叫を聞いたのは、四つより半刻以上前である。朝使御登営が、事件の前ということは、絶対あり得ない。

「そんな筈はないが……」と、保明は反論した。

朝使に「御休息之間」として提供したのは、日頃は外様の大身の居間である「大広間」である。

この部屋の真北側が松之廊下。その先に、中庭を隔てて御白書院がある。刃傷の事件当時、「御休息之間」に朝使が在室していたとすれば、事件は公家たちに丸見えだったことになる。

そんな恥晒しをしたとは信じたくない。

しかし、相模守は、ゆっくりと、からくりの張り子の虎のように首を振り続けて言った。

「いえいえ、実は御朝使、今朝は、ご都合あって半刻ほど前から繰り上げ登営されておったらしゅうござるぞ」

「まさか！　小職は知らぬぞ」

「拙者も聞き及びませぬ」

保明は、再び平静を失いかけたが、かろうじて思いとどまった。

「そのような重大な儀式次第の変更が、我々への報告や相談もなく行われていたとは信じ難いことだが――、では相模守殿は、その事実をいずれからお知りになられたのでござろうや」

「大奥留守居役梶川の証言調べの過程で判明いたしました」と、相模守。
「ほほう。またしても梶川か。人騒がせな奴めが」
「……ではござろうが、出羽さま」
相模守は、苦渋に満ちた顔で答えた。
「他の大名方は、もそっと近くに居られた方も多かろうに、後難を恐れて、誰一人証言に立とうとはなされぬ。梶川が唯一の証人でござれば多少の出過ぎ、間違いは大目にみてくだされ」
「なるほど。そういうこともあるのか」
「それでは」と、次の証言が始まった。
梶川は不思議な巡り合わせの男であった。十七年前の貞享元年葉月（八月）二十八日。若年寄稲葉石見守が大老堀田正俊へ殿中刃傷に及んだ際にも居合わせていたという。
「本人は、前回は偶然であったが、と笑っておられた。が、今回は、御台さま（綱吉夫人）のご依頼で、土産物のお礼の品を御勅使にお届けするために表に参ったのだが、と盛んに弁解されましてな。まあ、ここまでは間違いござるまいが」
「いや、話は最初から違うな」

保明は口を挟んだ。

「と、申されますと？」

「梶川への御用の依頼主は御台さまではない。桂昌院さまだ。これは間違いはござらぬ」

「だとすると、この唯一証言もあてにはなりませぬのか」

相模守は、がっくりと肩を落とした。

どうも梶川という闖入者の証言の扱いが厄介なようだ。しかし、相模守の言うように唯一の証言者となれば、いやでも無視するわけにはいかない。

「いや、依頼主の件は些細な勘違いとして捨ておこう。それより朝使の繰り上げ登営とやらを――」

こちらの方がはるかに重大である。

「解りました。では、その梶川の申すままをお伝えしましょう。梶川は、今朝五つ時（午前八時）に登城。自室に腰の物（帯刀）を置き、ご依頼主からお預かりしてきた包熨斗を持って大奥を出た。そして『御勅使さまはいずれに』と捜しに来たと申す。しかし、これはおかしい」

相模守は、再び首をかしげる。
「早すぎるということだな？」
「さようでござる。朝使御登営は四つ（十時）。これは前日から幕吏の全員に知らせており、しかも朝使が柳営にご到着される時は、表の全員に判るように太鼓で合図する仕来りでござる。それゆえ、刃傷事件の起きる前、そんな早朝に、大奥留守居役の梶川が、勅使を捜しに出てくる必要はない。拙者、ちと、意外に存じた次第で」
「なるほど、御疑念尤もと存ずる。で？」
保明は先を促した。
「その点を梶川に質すと、ここで梶川の意外な答えが返ってきたのでござる」
「ほう」
「梶川はこう申した。今朝の御朝使の御登営は刻限が繰り上がっております。これは留守居役の主計殿（松平主計頭近鎮）から承った事実とのこと。そこで、拙者、さらに主計殿を招いて、事の次第を確認いたした。すると……」
「やはり時刻は繰り上がっていたのか！」
保明は開いた口がふさがらない。が、
「……では主計は誰から知らされたのか」

と、さらに追う。

「それがなんと吉良殿でござってな。吉良殿は、今朝『今日の朝使の登営の刻限は、予定より早くなり申した』と主計殿に耳打ちされたそうでござる。それを梶川は、主計殿から伝え聞き、早朝にかかわらず大奥から出てきたといった次第で」

話の経緯がやっと呑み込めた。

だが、朝使の登営刻限が早まるとは、重大な式次第の変更である。綱吉にも保明にも知らせがないのはおかしい。さらに、老中の相模守までが知らなかったという。とすると、式の総指揮を執る吉良の独断ということになるのか――。

（そんな勝手をしておったのか、吉良めは！）

怒りがこみ上げてきた。

朝使の登営刻限変更が本当にあったのか――。

そんな保明の気持ちを察したのか、相模守は、ここで次のように補足した。

「しかし、朝使登営の刻限が繰り上がったとすれば、今朝の決め事でござろう。それも緊急のことなれば、化粧めかしに手間暇かける公家がこと、早々に打ち揃ってやって来たとは思えませぬ。せいぜいが露払いのような下の者たちばかりと存ずるが……」

とってつけた慰めでしかないが、考えられないことではない。だが――。

「いや、仮に露払いにせよだ。朝使との間に、そのような馴れ合いが吉良如きの判断で行われていたとは解せぬ話じゃ。あきれてものが言えぬわ」

保明の怒りは収まらない。

しかし、怒ってばかりも居られない。

「時が迫っておる。ここまでとしようぞ」

と言って立ち上がった。

今が公のおられる中奥の「御座之間」に戻る潮時である。しかし、どうにも足が重かった。

御廊下を戻りながら、もう一度考え直した。重箱の隅を突っつくような気の小さな朝使の下では、下僚の公家は必要以上に気を遣わなくてはならない。早めに登城して、色々と確認やら下準備を必要とする者がいたとしてもおかしくない。

（だが、それだけか？）

吉良は、長年の朝使との付き合いで、彼ら「露払い組」の繰り上げ事前登城を黙認してきたのか。

それとも、今年だけの特別の容認か。

いずれにしても、将軍も保明も知らぬ間の時刻変更らしいが――、事実とすれば、彼ら「露払い組」が偶然目撃した刃傷事件は、その目から上司の耳へ、そして、更に上の上司へと、素早く伝わったことであろう。

いや、すでに伝わっているに違いない。

それが、やがては天聴に達し、天皇や関白の「話の種」となる。

困ったことだ。

さらに問題は、江戸町民だろう。誰もが退屈しきっている。皆、面白いことに飢えていた。この種の話は絶好の退屈しのぎ。物知り顔の公家たちに、町人どもがどっと群がるに違いない。

（今頃は、すでに一枚摺屋が、版木の元になる諜報集めに伝奏屋敷に集まっているのではないか）

保明は秘かに舌打ちした。

なんと書かれることやらと思うと憂鬱になる。

きっと俺の知らないことまで勝手に忖度して、でっち上げ記事にするに違いない。

思わずため息が出る。

ちなみに、一枚摺号外は、文字どおり木版一枚摺の早耳速報で、当時は、読売、絵

草紙とも呼ばれ、江戸町民の話題の発信源である。

江戸では、天和年間（一六八一～八四）、八百屋お七事件による江戸大火。上方では、近松らの書く人情物。これらの事件報道や読み物に触発されて、一枚摺屋が雨後の筍のように増えた。

幕府が、この情報流通に禁圧を加えるのは、ずっと後のこと。当時は、まだ野放しである。

その出鱈目報道を防ぐためには、幕府の公式発表を急がねばならない。

だが、そこで御朝使の到来時刻の変更をどう扱えばよいのか――？

朝使の受け入れを総差配している吉良上野介という執務方の、ただの黙認だったのか。

それとも、浅野の刃傷沙汰を予見した公家が、わざと傍観のために予定を繰り上げてやってきたのか。それなら最悪だ。

が、もし公家たちが事件を予見してきたのだとすれば、そのような予見がなぜ可能だったのか。

考えれば考えるほど思考が混乱していく。

重い足を引きずるようにして、保明は、綱吉の待つ中奥の「御座之間」に着いた。

幸い公は、保明の報告をじっと待ってくださったらしい。この間、誰からの報告も寄せ付けなかったと、小姓に耳打ちされた。

保明は恐懼感激、御座之間下段に平伏した。

やがて出御した綱吉。御簾を揚げての対面だった。保明が、報告の遅れをお詫び申し上げる前に、いきなりお声をかけてくださった。

「出羽、面をあげよ。どうした、顔が今朝以上にやつれておるぞ。それに、その身なりはなんだ」

「はっ」と愕く保明。

気がつけば、事件後、事情聴取に忙殺されて、式服からの着替えができていなかった。

「これは、とんと気がつきませんでした。ご無礼仕りました」

保明は、更に恐縮した。

「式服なれば、別に無礼はないが……」

綱吉は軽く微笑むと、

「着替える間もなかったのであろう。気の毒したな。では、そなたの調べてきた事実を余に語れ」

と言って、小姓たちを全員退出させた。

「では……」

保明は、簡明直截に要点だけを述べた。しかし、浅野が背後から斬りつけたこと。事件当時の朝使の所在の二点については、どうしても言い出せなかった。まだ不確実であり、いずれも梶川のような一介の闖入者の証言に過ぎない点で、証拠としても不十分と思ったのである。

聞き終わった綱吉の判断は、意外に簡単だった。

「浅野が吉良にどのような意趣を持っていたかは知らぬ。また余が知る要もあるまい。ただ朝使東下という重大な儀式の折りに、浅野が、場所柄も弁えず狼藉を働いたという事実。この一点だけは許し難い。それは余ばかりでなく、忝なくも天朝さまに対する大不敬である。よって……」

ここで綱吉は天井を見つめて声を落とした。

「浅野については、打ち首にしたきは山々なれど、かの武士の面目を考慮し、罪一等を減じて切腹を命ずる。なお、吉良については、急難にありながら、よく時と場所柄を弁え、手向かいもいたさざるは神妙。よって御構いなし。以上の余の判断について、そちの意見を聞きたい」

保明は、一瞬考えたが、
「申し分なき御英断と拝察いたします」
とだけ答えた。
「ほほう。では浅野の処断に、余が、その乱心の有無と原因を酌量せぬ点で、いうことはないか」
「ございませぬ。浅野本人が乱心を否定する以上、考慮の余地もその必要もないものと心得ます」
「逆に吉良は浅野の乱心を申立てているが……」
「吉良の自己保身の弁にすぎませぬ」
「ではこの内容で老中一同に宣言いたすがよいな」
「承知いたしました」
「しかし、そなたは、即刻、屋敷に帰り休むがよい。疲れすぎであろう。帰って自愛せよ」
「有り難き幸せ。されど……」
「されどは、いわせぬ。ゆるりと休め。以後のことは、余がすべて取り仕切る。これは余の将軍としての命令じゃ。それより明日の観桜の宴の天気のことでも心配してお

れ」

「ははっ」

再び平伏しながら、保明は、危うく涙ぐむところであった。「余がすべて取り仕切る」ということは、全責任を上さまが被るという意味であろう。

言い換えれば、相談に与った保明に一切の非難を及ばせないための配慮である。

保明に帰宅を命じるのも、そのためであろう。

帰路、乗物の中から、保明は上さまの温情を想い、頭を垂れて城に向かって手を合わせた。

そして心に誓った。

（誰がなんと言おうと、たとえ万人が、この処断に反対しようと――、以後、この線で上さまの御英断をお守りするのみ）

再び気力が蘇った。と、急に現金なもので、今朝からなにも食べずにいたことを思い出した。

7

綱吉の命令で常盤橋の自邸に戻ったものの、急なことで食事の用意まで若干の時が必要だという。

さりとて今は書類を読む気にもなれない。

内庭の桜は満開で、野面も見えぬほどの素晴らしさだが、明日、三の丸庭園で上さま、桂昌院さまと観桜の宴を堪能できることを思えば、楽しみは取っておきたい気がする。

仕方がない、風呂でも浴びるかと思い立って、女たちが用意していた風呂場に飛び込んだ。

真っ昼間の風呂は何年ぶりであろう。檜の香るゆったりした湯船に浸かりながら、この十四日という日が恐ろしく長かったな、と改めて思った。

陽光はまだ高い。七つ（午後四時）ぐらいであろうか。今頃、本丸表は、上さまの厳しい宣告にあわてふためいているに違いない。それに比べて自分が、ここで、こんなことをしていていいのか、と思わぬでもない。だが、恐らく一生に一度の大事件に

直面して、自分が上さまの大英断に加われた喜びを、ここで一人嚙みしめるのも悪くない。

風呂から出ると、食事の用意されている居間へ戻る廊下で空を見上げた。今朝ほどのたれ込めた雲は去り、薄日がさしている。

間違いなく明日もこんな天気だろう。そして、風もない絶好の観桜日となろう。

「しかし……」と保明は、ここで、上さまに「明日の天気の心配でもせよ」と言われたことを思い出した。念を押されると、かえって気になる。

居室に用意された膳部を前に、小姓を呼んだ。

「権右衛門をここへ」

あたふたとやってきた豊原権右衛門に、

「くどいようだが明日の天気について、ひとっ走り本所の春海先生の観測所に行って確かめてきてくれ」

と命じた。今朝登城前に報告を受け、明日は「花曇り」と聞いている。だが、その後の気象になにか異変がないか。

「いま一度、しかと確かめよ。明日の天気は確かか。〈明日は雨降る天気にござなく候〉などと、どちらにでもとれる表現に二度とごまかされるなよ」

命じながら、思わず苦笑した。

一度引っかかったことがある。雨が降らないというので、予定どおり六義園で女たちと園遊会を催すことにしたが、生憎の朝からの大雨となった。

だが、春海は、しゃあしゃあと言ってのけた。

「拙者、明日は雨が降り申す、天気にござなく候と、区切って申し上げた積もりでござったが」

保井春海。十七年前、綱吉が初代幕府天文方に起用した天文暦学者。六十三歳の老人だが滑稽を解する男であった。それに碁打ち名人でもある。

権右衛門を使者に走らせた後、保明は、久しぶりに定子（正室）を侍らせて食事を摂った。

中途半端な時刻だったが、御朝使、御三家などから栄螺、蛤、蒸餅などの慮外の頂き物があって手早く料理ができたようだ。

珍味に舌鼓を打った後、珍しく妻と二人だけの静かな夕刻になった。

この機会にと思ったのか、定子は、あれこれ明日の観桜の宴で着る衣装や三の丸さまの侍女たちへのお土産物の相談を持ちかけてきた。

保明も、こんな時は滅多にないので、なにくれと相談に応じる。やがて――、時が

過ぎ定子が退くと、保明は書斎に戻って、この日の日記を認めた。

以下が、後に『楽只堂年録』として残る膨大な（二百二十九冊の）柳沢吉保の日記の内の、当日（十四日）の事件部分の記述（現代訳）である。

なお「楽只」とは楽しむという意味で、「只」は助辞（中国語の付属語）である。

十四日。

この日は天皇さまと上皇さまの御使者が登城され、将軍と会い、お別れのご挨拶をするということで、烏帽子直垂の正装で参った。

嗣子安貞も同じ。

勅使が将軍と会う前に、柳之間の廊下で、浅野内匠頭長矩、心に含むところあって、小さ刀を抜いて吉良上野介義央をうしろより二刀きる。浅手ではあったが、老人のことで倒れた。

御留守居番梶川与惣兵衛頼照そばあって長矩を抑えて刀を奪い取る。田村右京大夫建顕に預けられ、今夜同宅で切腹仰付られた。

検使は庄田下総守安利並びに御目付両人が来た。

上野介義央は治療をうけて治った。

ただし原本は、翌年（元禄十五年）の火事で焼失し、その後、儒臣たちの手で再編集されたものである。このため奇妙な箇所が随所にある。例えば本人の名前。当時は、まだ保明であって吉保ではない。事件に関しては、場所を「柳之間の廊下」と取り違えている。しかし、浅野の刃傷を「心に含むところあって」「うしろより二刀」と明確に記述すること。この段階で吉良の傷は癒えた、と断定すること――などは、事実か、誤記か、はたまた作為か。それとも政治家保明の意図的記述なのか。判断に苦しむところである。

日記を書き終わった頃、保明をひょっこり訪ねてきた男がいた。保井春海、その人である。

「おやおや、これは都翁（春海の諱）先生」

と驚く保明に、春海は、挨拶もそこそこに、

「こちらこそ驚きじゃて」

そう前置きして言った。

「殿がご帰宅と聞いて飛んで参りました。このような大事件、さぞかし殿には、城中

で頭を抱えておられると思いきや、至って平穏なご様子で」

皮肉ではない。顔がすこぶる厳しかった。

「ほう。と言われると、すでに都翁先生のお耳にまで入りましたかな」

と、保明は、一応軽く受けた。

「入るも入らぬもない。これこのとおり。江戸中は今朝の刃傷事件の話題で持ちきりじゃ」

春海は、ぱらぱらと、手にした何枚かの一枚摺（いちまいずり）を差し出した。発行所が違うらしく、少しずつ描かれている木版画が違っている。

だが、いずれも、「松之廊下」らしい場所を背景に、中央やや左に、のけぞっている束帯の老人。右側に、同じ衣装の若い大名が、老人に立ちはだかっている絵が描かれている。老人は右斜め正面を向いて、両手を胸の前で広げ、天を仰ぐような姿勢。額からは血のようなものが流れている。

対する若い大名は、背中だけで顔は見えないが、手に血刀を下げている。それも長刀に近い。

絵そのものは、粘土板で作った稚拙（ちせつ）なものだし、解説も見出しばかり扇情的（せんじょうてき）で内容はない。

だが、そこに書かれていた以下の、二人の短い喧嘩口上に、保明は凍り付いた。

内匠頭：登城時刻が繰り上がったというではないか、上野介
上野介：そのようなことも知らぬか
内匠頭：知らぬ。なぜ余に知らせぬ。とんだ恥をかかせおったな！　おのれ、こうしてくれようぞ

刃傷事件の原因に、すでに登城時刻の変更問題が組み込まれていたのである。
江戸町民の早耳に、保明は舌を巻いた。
しかし、すこし落ち着きを取り戻すと、保明は笑顔を繕って訊ねた。
「都翁先生は、この一枚摺を、いずれでお求めになられましたのかな」
「いやなに、夕刻の散歩がてら、神田明神下まで足を伸ばして求めたものでござるよ。だが、飛ぶように売れておりましたぞ。もはや止めることは無理じゃな」
「いや、別に止めだてする積もりはござらぬ」
「さようか、それならよいが」
春海は、思案顔のまま答えた。

「いやいや、かと言って、かような一枚摺を、大袈裟に止めぬのもどうかと思うが」
保明は、紙面の字面を追いながら言った。
「では、どうなさいますかな」
「こういうものは、面疔や癰のようなものでござってな、都翁先生」
「面疔や癰？　どういう意味でござるか」
「つまり、いらえば（触れれば）いらうほど大きくなり、悪化するということよ」
「なるほど。ほっとくに限るというわけですな」
「いや、ほっとくわけにも参らぬ。よき治療が必要じゃ。神君さまの癰の手当のような」
「ああ、例の笠森稲荷の由来でござるな」
「さよう」
家康が秀吉と戦った小牧・長久手の戦い。
その直前、家康は背中に大きな癰を患っていた。
出陣を急ぐあまりに、家康は、小姓に命じて腫れ物を貝の蓋に挟ませて膿を出させた。これで癰をこじらせて死に損なったことがある。
その時、部下の一人が、摂津国真上村の笠森稲荷の境内に、腫れ物の治癒に効くと

いう不思議な土の存在の話を聞いた。急ぎ、その土を岡崎に持ち帰り、家康の背中に塗った。不思議や、これで膿が吹き出て、熱も去り、家康は九死に一生を得たという。これは、百年を超える今も、徳川家中の語りぐさになっている。

「かような仕儀で、やむを得ぬ。先生、拙者、もう一度城に立ち戻り面疔の治療を講じなくてはなりませぬ。折角の大先生のお出ましだが、今夕は碁のご指導も仰げぬ。この一枚摺は、治療の処方箋を書く参考に頂戴したいがよろしいか」

「結構、結構、差し上げますわい。しかし、これから、またお仕事とは難儀なことでござるな」

「なに、城は目と鼻の先。昔から慣れておりますれば、一向に苦痛はありませぬ」

「仕事中毒で不感症になられているのではござらぬかな」

「それも多少は」と、保明は、かすかに笑う。

「まあ、若い内はそれもよかろう。しかし、この大騒動の最中、上さまは、明日、予定どおり桜見物をなされるのかな」

「もちろんでござる。それゆえ大先生に何度も明日の天気を確かめに上がった次第で」

これしきのことで、大切な年中行事である観桜の宴を取りやめては、幕府の沽券に

関わる。

保明は胸を張り、大きく呼吸した。

（今頃、上さまは大奥入りだ。登城しても見つかるまい――）と、思いながら。

8

保明は、「三之間」に夜中一人戻ると、早速明日発表する予定の「浅野事件に関する幕府見解」をまとめた。以下が保明の書いた素案である。

十四日、

朝使の会見があり、今朝、将軍に拝謁（はいえつ）のため公家（くげ）が表（幕府の執務所）に入った頃、留守居番梶川与惣兵衛頼照、公家の宿舎に赴くに際して、その相談のために、白書院の廊下で高家吉良上野介義央と立ち話している時、接待役の浅野内匠頭長矩が、義央の元にきて、含むところがあったように、小さ刀で切りつけた。義央が驚くところ、また眉間（みけん）を切る。与惣兵衛頼照、そのまま長矩を抱き留め、義央には同僚がかけ集まり、義央をかかえて他の場所に移した。このため公家の拝謁は黒書院

で行われた。

梶川が本丸表に出てきた時刻とその理由に触れず、浅野が吉良に切りつけた宿意の存在も曖昧にした。さらに浅野の吉良の切りつけ方は、いかにも前から切りつけたかのような表現にしている。

日記は日記、公式記録は公式記録。

この区分を使い分けた。政治家はそれでいいのだと割り切っていたのであろう。

書き終わった頃――、保明が再登城していることが茶坊主から城中に漏れたらしい。若年寄の加藤越中守と稲垣対馬守の二人が「恐れながら」と、保明の元にやってきた。

九つ半（午前一時）過ぎの事である。彼らの報告から、期せずして保明の帰宅中の殿中の様子が判明した。時系列で追うと、次のようであったという。

昼八つ（午後二時）過ぎ。

綱吉、老中の四人を召して所定の裁決を発表。

昼八つ半（午後三時）頃。

老中四人、浅野内匠頭を「時計之間」に召し、将軍の裁決を申し渡す。

なお、綱吉の裁決発表の折り、老中末席の稲葉丹後守が口を開き、「内匠頭の所為（行為）いかにも不届き至極におわせど、ひたすら乱心の体にも見受けられまする。御処分の儀は、今しばらくご猶予（ゆうよ）あられては」と申し出た。

これに土屋相模守と秋元但馬守（たじまのかみ）が同調し、公との間に一悶着（ひともんちゃく）あったという。

「で、上さまは、どのように対応なされたのかな」

保明は、努めて冷静を装（よそお）って訊ねた。

「後で相模守さまにお伺いしたことでございますが、烈火の如くのお怒りでござったそうで」

（当然だ。相模守も相模守ではないか。俺と多門伝八郎とのやり取りをつぶさに見ていた癖に、丹後守に同調するとは何事か！）

保明は、激しく舌打ちした。

「で、その結末は？」と、保明は厳しい口調のまま訊ねた。

「もちろん、上さまの御裁決どおりでございます。上さまは、お怒りのままお席を立たれました」

「さもあろう。で、丹後守は？　余計なことを言って上さまに叱責（しっせき）され、落胆してはいなかったか」

目付の多門伝八郎と保明のやり取りを知らない丹後守が、浅野の行動を乱心と断定し、その糾明が必要と叫ぶのも無理はない。

（明日にでも、ここに呼んでお慰めしてやらねばなるまい。そして上さまと上さまの御裁決の本心を話してやらねばならぬ）と、思った。だが――。

「それが、そうでもございませぬ。かえって晴れ晴れしたご様子でした」との返事。

「ほう、なぜかな」

「上さまが、お立ちの折りに、丹後守さまに、お言葉を賜ったそうで」

「なんと申されたのか」

「『丹後、遠慮には及ばぬぞ』と」

今後とも、進言に遠慮は無用、またこれしきのことで致仕（辞職）するなよ、という意味である。

（お見事！　上さま、よくぞ申された）

保明は、綱吉の――怒り心頭の中での――気配りが嬉しかった。城に戻ってきて仕事をしてよかったと、この時、本心から思った。

気分のいいところで帰ろうとしたが、

「ほかになにか、小職に訊ねたきことあれば申すがよい」と、念のため訊ねた。

「それでは、お許しを得て、お聞きしたいことがございますが」
二人は、顔を見合わせながら膝を進めた。
「うむ、申せ」
「浅野家は、今後如何あいなりましょうか」
一瞬、保明は答えに躊躇した。が、自分を敵視する老中たちとは違う。若手幹部は大事にしなくてはいけない。この種の難しい問いにも誠意を持って答えなければ——。
「正直のところ、十分詰めてはおらぬ。が、内匠頭の行動は、時と場所を心得ぬ不届きな振る舞いであり、乱心もないとご自身で言い立てる以上、救いの余地はない。小職としては処罰を一身限りとし、お家にまで影響を及ぼしたくない気持ちは山々だが、さて難しかろうな。殿中の行動には神君以来の鉄則があり、動機より所為（行為）で判断せざるを得ない。となると、丹後守の言う如き許すべき理由がないのだ。それが上に立つ上さまのお辛いところよ。解ってくれ」
保明は、噛んで含めるように言い聞かせた。

その夜、就寝は遅かったが、保明は、気分よく眠りに就いた。
翌三月十五日。

例月の月次拝賀の後、予定の観桜の宴が――何事もなかったかのように――三の丸庭園で催された。

保明一家三人（妻定子、嗣子安貞）は、老中夫妻、若年寄とともに陪席している。

しかし、その他の参加者は、ごく内々の者に限られていた。

かつては、そんなことはなかった。この観桜の宴は参加者も多く、実に華やかであった。

幕府が、大名同士の私的縁組を禁じていることから、御一門の御簾中（大名の妻）のほとんどが、かつては、この機会にと、年頃の娘や子息を連れて参加したのである。この宴が縁となって嫁取り、婿入りが決まった例が多かったものである。

しかし、昨今、この春の花観の宴では、女たちは「綺羅に綺羅を尽さねば叶わず、土産物も気張らねばならず、女中へも一々目録を配らねばならず」（『定本　江戸城大奥』）――、いずれも大変な出費になるところから参加者が激減していた。

近時、特に派手になった理由がある。

三の丸さま（桂昌院）と御台所の侍女が、お茶屋同士で妍を競いあうようになったためである。

三の丸さまが無官、御台所が従三位だった十七年前の貞享元年まではそれほどで

もなかった。

だが、その年の十一月、三の丸さまが従三位になると、御台所が、露骨に対抗心を燃やすことになったのである。

「今年の御台所さまは特にお派手な様子だな」

と、保明は御台所が茶屋を構える方向を眺めて苦り切った。

この日、三の丸庭園では、御台所の御女中の溜まり場の幔幕には、厚板染めの緞子で作った紫、萌黄、空色の縫い合わせの高価な練綾の縄が所狭しと飾られていた。その中央の一際美しいお茶屋が御台所の御座所である。

やがて「奥締り」（将軍のお成りに当たる言葉）が仰せだされると、中臈に扶けられて御台所の蓮歩（美人の歩み）が始まった。続いて女中共も、新調の晴れ着を競うように、しゃなりしゃなりと列をなして歩き始めた。いかにも姑への挑発的な行動であった。幸い桂昌院さまはお目が悪いので御台所さまの派手さには気付かれないが、傍目で見る保明にはよく判る。

保明は、ここで一計を案じた。

保明は、早速妻の定子と嗣子安貞を呼ぶと、

「よいか、二人とも三の丸さまのお側を離れるなよ。桂昌院さまの興味が御台所さま

に向かないようにせよ、そして話題を絶やさぬように」
と命じた。
なにしろ大事件の翌日である。なんとか今日一日を無事に過ごさねばならない。そんな思いの保明の所に、若年寄の加藤越中守がそっと近づいてきて囁いた。
「出羽守さまに是非お耳に入れたきことが……」
「なんじゃ」
保明は、そう言いながらも、なお御台所の動きを注意深く目で追っていた。
「明け方近くの七つ過ぎ（午前四時半頃）、浅野さまの切腹がようやくにして執り行われました」と越中守。
今日（十四日）中に切腹という上さまのご命令の執行が、ぎりぎりの夜明け前（当時は翌日の夜明けで日が変わる）まで延びていたのであろう。
「だから、それがどうだというのじゃ」
保明は、不愉快な話題に、ぶすっとした調子で聞き返した。
「また一悶着あって遅くなったというのではあるまいな」
「ご明察の通りでございます」
「そうか、では――」

保明はやむなく立って、幔幕の陰に越中守を招き入れた。
「申してみよ、その悶着とやらを」
「はい、浅野さまの切腹の場所に関してでございますが、検死役の庄田下総守と多門伝八郎とのお二人の間で、もめごとがあった由にございます」
庄田下総守は大目付であるが、「大」が付いているからといって目付への指揮権はない。見解の相違があってもいいではないか。ところが――。
「下総守殿は浅野さまの切腹は田村邸の庭で行えと主張されました。これに対して多門殿は、『浅野殿はいやしくも一城の主。武士道のお仕置き仰せつけられた以上は、庭においての切腹はあるまじきこと。反対でござる』と言って聞かず、とうとうつかみ合いの大喧嘩になりまして」
ここまでもめては只では済まない。
「で、結果はどうなった」と、保明。
「下総守殿が検死役方と謀って強引に田村右京大夫さまに指示され、庭前で強行されてござる」
大名は大目付の監督下にある。だから、田村右京大夫としては、最後は下総守の方の指示に従わざるを得なかったのであろう。

しかし、それにしても大人げない処置である。

「解った。心得よう」

保明は、何気ない様子を繕って、観桜の宴に戻ったが、心ではこの場で即座に下総守の免職を決めていた。

（心ないことをする男よ、許せぬ）と思った。

9

保明の登城中、春海から一枚摺（いちまいずり）が数枚届けられていた。急ぎ見出しを読む。

浅野内匠頭、田村邸庭先にて無念の御最期（ごさいご）

一枚摺は、またしてもこの江戸市中の取り合いとなるかもしれぬ。ここまで思い到（いた）ったところで、ふと、保明は、考えてもみなかった一人の男の名を思い出した。

大石内蔵助（くらのすけ）。

そうだ、この浅野の家老の存在を、俺は一件以来忘れていた。この男は、一連の浅

野家への処置をどう取るか。庭先での切腹など、主君への最大の侮辱と思うに違いない。

（ひょっとすると、つまらぬ事で目覚めさせたかもしれぬな、あの切れ者を）

一瞬、かすかな戦慄が保明の背中を走り抜けていった。

十五日の昼時を挟んで行われた観桜の宴は昼八つ（午後二時）過ぎに終わった。

この直後、将軍綱吉の主導によって進められた苛烈な浅野家処分の全貌が、以下のように明らかになった。

一　浅野内匠頭切腹（十四日夜実行）

二　浅野大学（内匠頭弟）閉戸（同夜示達）

三　江戸鉄砲洲上屋敷、並びに赤坂下屋敷召し上げ引き払い（三日以内）

四　赤穂領召し上げ・城明け渡し（四月中旬）

なお、浅野家本支の、以下の一家一門にも、閉戸（閉門）に準ずる「遠慮たるべきこと」の沙汰が下されている。

大垣城主・戸田采女正氏定

大垣支藩・戸田淡路守氏成

前三次城主・浅野式部少輔長照
現三次城主・浅野土佐守長澄

次いで、戸田采女正には浅野屋敷受取りを、宗家の松平安芸守には立ち退き実行が申しつけられた。同族相い食む形である。もっとも、これなら説得しやすいし血を見ることもなかろう。

だが、浅野の近親者にとっては「同族同士の血の屈辱」である。しかも、その部下にとっては、「親戚の馬鹿殿のお陰でこっちまでいい迷惑だ」という憎しみでしかない。

勢い立ち退き要求が乱暴になった。

戸田采女正は、物頭に士卒百五十人余を添えて、鉄砲洲邸付近に駐屯させ、外から邸内を厳重に監視した。松平安芸守は家老豊島安右衛門に士卒二百余人を引き連れて屋敷に乗り込ませ、浅野一族とその部下を、〈石以て追う如く〉に叩き出したのである。

あわてふためき、号泣する者が続出した。

その中で、一人内匠頭の妻だけが別格であった。

鉄砲洲屋敷立ち退きの時、内匠頭の内室阿久里は二十八歳。三次城主・浅野因幡守長治の娘で、長治没後、今回、閉戸に準じる「遠慮」扱いとなった三代・式部少輔長照の養女となっている。

すでに十四日夜（現在の十五日早朝）夫内匠頭の切腹の報を聞くと、直ちに髪を下ろしていた。

昨夜中に涙も涸れ果てたのであろう。出立に当たっては、微塵も取り乱すことがなかった。

甲斐がいしく老女、腰元を指図して奥の重宝什器、手廻りの調度品などを片付け終わると数人の供だけを引き連れて女乗物に消えた。行き先は、実質閉戸中の養父の待つ赤坂今井（現在の港区赤坂・氷川神社付近）の実家である。

だが、この一部始終をじっと下働きの老人に混じって注視している男がいた。黒鍬組頭領・堀田将監。そして秘かに呟いた。

「あの無表情なお顔の裏になにかがある。ひょっとすると……浅野の宿意とやらを知るのは、あの御内室かもしれぬな」

将監は、その足で常盤橋の柳沢邸に出向くと、保明の帰りを待って報告した。

「かような次第で……、浅野の宿意とやらを知るのは、案外内匠頭の御内室かもしれ

ませぬぞ」

まず、こう保明に切り出した。

「なるほどそうかもしれぬ。あれきり目付の多門もなにも言ってこなかった。結局宿意の内容が解らず仕舞いということだろう。だが、閉戸に処した浅野の舎弟とやらはどうだ。事情を知っているのではないか。あるいは御内室からなにか聞いているのではないか」

「大学殿は聞いてはおられませぬな」

「なぜじゃ」

「浅野の御内室は大学殿を嫌っておられます故」

「ほう、それは知らなかった。昔からか？」

「過去は知りませぬ。が、侍女たちの噂では大学殿が鉄砲洲屋敷に、昨夜、兄の異変を知らせに飛んで来られた時、御内室はまずこう申されたそうな。相手の吉良はその場で果てたか、と」

「ほう、相手を知っていたのか、すでに」

保明はぎくりとした。それでは宿意の存在は間違いない。内匠頭は、宿意のあることを、伝奏屋敷入りする弥生（三月）前に妻に語っていたのだ。ということは、吉良

は予定どおり如月（二月）中旬江戸戻りして浅野と会っていたことになる。

「御意、それも涙も見せずに質されたそうでござる。この御内室の問いに、大学殿は答えられなかった。城内に居られたわけではないので仕方のないことでござるが、御内室は大学殿を許されなかった。目をつり上げて叱ったと申しますな」

「なんと言ってか」

保明は興味津々訊ねた。

「いやしくも大学殿は殿の御舎弟ではおわしませぬか。それが御相手の存生（存命）も質さずわらわの所に参られるとは何事ぞ、この身には口惜しゅう存じますと。後は、堰を切ったように号泣された由で」

（恐るべきおなごよ）

益々浅野を田村邸の庭先で切腹させたことが心の重荷になった。

「内室と内蔵助、……どうやらこの事件で我らは要らざる敵を二人作ってしまったようじゃな。それに、いずれこの二人は組むな」

「間違いなく大石は江戸に参ります。そして御内室より宿意の真相を知るに至りましょう。その内容如何では、いずれ徒党を組んで、つまらぬ騒ぎを起こすやもしれませぬぞ」

「あり得るな。取り敢えず事前に相手の動きを察知せねばならぬ。忍びの大増員が必要じゃな」

保明が、初めて大石内蔵助を「敵」と意識した瞬間であった。

しかし、表だっては浅野事件は幕政に何ら影響を与えなかった。まず公式行事でいえば、翌十五日の観桜の宴のあと、十六日には日光御門跡公弁法親王が予定どおり本丸に参上している。一日措いた十八日には、綱吉自ら紀伊中納言綱教の館に臨み、娘の鶴姫をまじえて団欒の時を過ごしている。

すべて予定どおりである。この綱吉の「お成り」には保明は安貞を引き連れてお供している。

以下が、これを裏付ける柳沢保明の日記『楽只堂年録』の十五日以後の記述である。

十五日

一　三の丸さま（桂昌院）より花見の御膳のために献上された進上物の干菓子一箱、干タラ一箱、縮緬五巻

また三の丸さまへの御進物の内から御すそわけとして拝領物（あり）

吉保も安貞も絹三疋、黒絣の羽二重二反、はな紙袋三つ、檜重一組、文夾一綴

ら

十六日

一　日光御門跡公弁親王御本丸に参上

十八日

一　今日紀伊中納言綱教卿の亭に（将軍）御成りとなり保明も安貞もお供した。

以下延々と「拝領物」の明細が克明に羅列されるだけ。すでに浅野の刃傷沙汰は、幕府にとっては一過性の事件の観を呈している。

だが、この頃、事件を知らせる早駕籠は、東海道を赤穂に向けてひた走っていたのであった。

第三章　赤穂（あこう）　元禄（げんろく）十四年晩春

1

〈春眠暁を覚えず〉

とは、どうやら若い頃だけの特権だったらしい。

播州（ばんしゅう）浅野家国家老・大石内蔵助（くらのすけ）は、最近そんなことを考えるようになっていた。

年齢（とし）のせいではない。

まだ四十三歳。心身ともに盛んな壮年である。

ところが、近頃は眠りが浅く、どんなに遅く床に就いても決まって毎朝八つ半（三

時）過ぎには目が覚めてしまう。起きあがると、下腹部に、はち切れそうに小便が溜まっていた。

就寝中、身体が冷えるせいかとも思ったが、そうでもないらしい。

別宅に囲っている若い妾の身体を抱いて、一夜ぬくもって寝た朝でも、早過ぎる目覚めと破裂しそうな小便の溜まり具合は変わらない。

明らかに生活に〈張り〉や〈けじめ〉がないせいであった。年々、自分の存在が耐え難いほど軽くなってくるような気がしてならないのだ。

明日起きて登城したら、まずなにをしなければならないという、明確な目標がない。だから、毎晩眠りに就く時、今日一日の仕事を終えたという達成感も得られない。それが無意識の苦痛となって熟睡を妨げるに違いない。

実際――、毎日の仕事は退屈の一語に尽きた。

ほとんどがつまらぬ書類の代理決裁か、部下の決めた事項の追認に過ぎない。

仕置家老（登用した一代家老）の大野九郎兵衛が有能すぎるせいもある。悔しいが、回ってくる〈伺い書〉に非の打ち所がなさ過ぎた。

だから、首を突っ込めば嫌がられる。黙って認めていれば無能――そして時には〈昼あんどん〉と陰口を叩かれる。

家禄こそ千五百石と申し分ないが、本音を言えば、到って冴えない役柄であった。

（もっと早く戦国時代に生まれていたら……）

と、腕を撫して思うことがある。

その昔なら、千五百石など、新規召し抱え時の〈屁みたいな禄高〉だ。俺なら、百万石の大禄取りに参戦できたものを……、そんな自信と自負がある。それができないなら、〈昼あんどん〉を決め込むしかないではないか――。

それとも、いっそのこと武士を捨てて商人になってやろうか。

幸い、赤穂には塩という特産品がある。

江戸の塩の需要は、昔は下級品ばかりだったが、元禄になって急速に高級化していると聞いた。

ところが、高級な赤穂塩の江戸での浸透度は低いままである。売り込み努力が足りないのだ。

商機は十分残っている。

江戸一番の塩商人になって、巨万の富を築きたい。そして、一夜でいいから、紀文（紀伊国屋文左衛門）のように、馬鹿を承知で吉原とやらを買い切って名を残したい。

悪名でもなんでも構わない。それができれば笑って死んでやろう。

つまらぬ仕事に飽いてくると、時々そんな〈刹那的な狂想〉に襲われることがある。
この「狂」の裏返しが、号とした「眠牛」、雅号の「可笑」である。
ところが、皆、内蔵助の書画の署名を見ても、ただ、くすくす、にやにや笑うだけ。
誰も内蔵助の心の深淵にひそむ屈折した感情を知る者はなかった。
それが、たまらなく寂しい。

三月十九日。
この日早朝も、そんな自嘲を胸に、例によって急いで厠に飛び込むという何の変哲もない一日の始まりであった。
溜まった朝の放尿の爽快感は格別である。
だが、これも郡奉行の吉田忠左衛門（六十一歳、二百石、役料五十石）に言わせれば、
「放尿の快感が、女を抱く気持ちより勝るように感じ始めたら男は終わりよ」
ということらしい。
若い頃は、笑って聞き流した忠左衛門の戯れ言だが、中年になって、なんとなく解るようになった。
（やれやれ、年齢は取りたくないものよ）

独り言を言いながら、内蔵助は一旦厠から臥所に戻った。

寝所では独り寝である。

妻の理久は、京極家（但馬国豊岡三万三千石）の家老で知行千二百石の石束源五兵衛の二女。

この年、三十三歳。

自分との間に、計算したように二男二女を儲けて、大石家をがっちりと支える、しっかり者である。女としては、夫より背が二寸以上高い大女で、閨では、材木を抱いているような大味なところがあるが、そこまで文句を言えば罰が当たる。

事実、内蔵助が妾宅を構えたのを知った三年前、三十歳を境に、理久は、愚痴一つこぼさず、さっさと寝所を別にしていった。

夫から見れば不気味。文句を言わない点では出来すぎた女房である。それだけに妾宅から帰った朝などは、かえって煙たかった。

内蔵助は、一人背伸びして大あくびすると、目をつぶってみた。が、眠気の方はさっぱり戻らない。

仕方なく臥所で四半刻（三十分）程ぐずぐずした後、木刀をひっさげて、水屋に行

った。

そこで、ごくりと冷水を柄杓で一杯。そのまま草履をつっかけて庭先に立った。

桜が散り、山が笑う季節である。

むせかえるような青葉の匂いが、夜気のあけやらぬ庭一杯に充ちていた。

三百回ほど木刀の素振りをやると、多少全身に活気が戻った。

やおら木刀を置き、薄明かりを見計らって庭の散策を始めた。だが、まもなく、耳元で、ブーンという虫の羽音を聞いた。

蚊にしては音が大き過ぎる。

（蜂だ！）

内蔵助は大の蜂ぎらいである。

あわてて身を屈める。

幸い、羽音は一瞬で消えたが、蜂が飛んでくるにしては時刻が早すぎた。ただの虻だったのかもしれない。やれやれと再び立ち上がる。

蜂といえば、ごく最近、城に奇っ怪な事件があったばかりである。

あれは五日前のこと。城の東門の裏に気付かぬままに三尺ほどの大きな蜂の巣が出

現した。

蜂の眠っている夜明けに引っ掻き落として、袋詰めにして始末しなければ、と思っていた矢先――、登城後まもなくのことだから、まだ四つ半（十一時）前である。

一匹の山蜂がどこからともなく飛んできて蜂の巣の廻りを飛び回ったという。すると、巣の中から小蜂が次々に飛び出して山蜂を追いかけ回し、ついに集団で山蜂を攻め殺した。

ところが――、これを待っていたかのように鷹取峠の方から、山蜂が、鞠のような黒い塊となって襲いかかってきた。

十以上の鞠が円弧を描いて急降下した。

これが蜂大戦争の始まりであった。

「それはそれは、紙鳶（凧）が風に鳴るようでございましたな」

と、事件を内蔵助に報告したのは、偶々遅れて登城して、この蜂大戦争をつぶさに望見したという勝手方吟味役・間喜兵衛（六十七歳、百石、二代目）である。

耳がすこし遠い。その喜兵衛が、凧が唸るようだというのだから、相当な騒音だったのであろう。

守る蜂の巣側は、迎撃十数回。巣がうつろになるまで果敢に飛び出していっては戦

った。

だが、小蜂の悲しさ、ついに一匹残らず刺し殺されてしまった。

山蜂側は、五、六匹の犠牲を出しただけで易々と小蜂の巣を食い破って侵入した。しばらく巣の中で騒動が続いたようだが、やがて掃蕩作戦は終了。再び山蜂は、十あまりの鞠の編隊となって、勝鬨を上げるように一段と羽音を高く鳴り響かせて、鷹取峠の彼方に飛び去った——という。

空き屋になった蜂の巣は、今も残骸を城の門扉の裏に醜く晒したままである。

「なんとも跡味の悪い事件でござりましたな。なにか不吉なことが起きなければよろしゅうござるが——」

喜兵衛は顎をしゃくりながら、こう結んだ。

しかし、世は天下太平。本人は、口ほどに深刻に思って喋ったわけではない。聞く内蔵助も、時間つぶしの話題としてしか受け取らなかった。

まさか、この蜂の大騒動が、本当に不吉の前兆になるとは、当人も内蔵助も、露ほども思ってみなかったことである。

それが現実になった。

この日（十九日）、内蔵助が、庭の散策を終わって縁側に戻った時の事である。朝の静寂を破って大石邸の長屋門の扉を激しく叩く者があった。

門番が潜り戸を開くと、「浅野家御用」の先触れであった。一刻ほど遅れて江戸表から早駕籠の使者が到来するとだけ告げると、先触れは、そのまま、仕置家老・大野九郎兵衛の屋敷のある搦手・塩屋門に向かって走り去った。

当時、極秘の大事件の伝達は、綱吉の「生類憐れみの令」で馬を酷使することを遠慮したせいもあって、もっぱら早駕籠が用いられた。

主君の内匠頭は、〈危機管理好き人間〉である。毎月のように「大名火消し」と呼ばれる消防訓練を行う他、年に一度は江戸と赤穂間の早駕籠訓練も怠らない。

訓練といっても手抜きを嫌う主君の手前、使者は真剣そのものである。

時間を競って、ろくに食事も睡眠もとらないため、回を追うごとに、半死半生で城に転がり込むことが多くなっている。

このため、あらかじめ関係者に予告して城に待機させ、場合によっては使者に重湯を与えたり、介抱する薬師の準備をさせておかなくては、急死する危険があった。

「急使が急死」

笑い事ではない冗談と、その必要から先触れの制度が生まれた。

浅野家の場合、先触れは、国家老（大石内蔵助）、次席家老（藤井又左衛門）、そして仕置家老（大野九郎兵衛）の順に告げ回ることになっている。

だが、この時は、藤井又左衛門が主君とともに出府中のため、大石の屋敷の隣にある藤井邸は素通りである。

内蔵助は、先触れの遠く去るのを見届けると、ただちに身支度に入った。一ヶ月ほど前、主君が、意に反して勅使饗応役に任命された時以来の久しぶりの緊張感が走った。

急ぎ腹ごしらえと思ったが、早朝で、まだ食事の準備が整わないという。

「旦那様に冷や飯をさし上げるわけにはいかない」と頑強に言い張る理久を、

「汁さえ温かければ、飯は前夜の残りでよい。この際は、早い登城こそ大事ぞ！」

と叱りとばし、急いで冷えた飯をかっ込んだ。

この後、中食、夜食の炊き出しと差し入れを指示して自邸を出た。

（ひょっとすると今日は帰れぬかもしれぬ）

そんな気になったのは、五日前の蜂の大戦争のせいである。

2

内蔵助が表御殿に上がると、追いかけるようにして大野九郎兵衛が駆けつけた。
二人は、朝の挨拶もそこそこに、「対面之間」に入って、急使の来るのを今や遅しと待った。
半刻が、無言の行とも思えるほど長く感じられた。
やがて――。
「早駕籠、塩屋門にご着到！」
物見からの伝令が伝わった。内蔵助は憮然として頷き、九郎兵衛は唇を噛んだ。
急使が吉報の場合は大手門から、凶報の時は大手門をはばかって搦手の塩屋門から城内に入るという不文律がある。これを知っての、二人の反応である。
続いて――。
「早水藤左衛門殿（馬廻、百五十石、二代目）、萱野三平殿（中小姓、十二両二分三人扶持、新参）、御玄関着到！」
玄関に待機していた中小姓が使者の名を告げた。

早水は、当時三十八歳。
萱野は、当時二十七歳。
江戸の早駕籠第一組の屈強者である。
ばたばたと数人の足音が続く。と、やがて使者の二人が、両脇を小姓に預け、蹌踉とした姿で「対面之間」に姿を見せた。
だが、目的地に到達して安堵したのか、部屋の入り口を入るやいなや、二人とも、へなへなと腰が砕けた。
小姓が、かろうじて抱え直す。
「しっかりせんか、気を確かに持てい。まず伝言を言え、伝言を。ええい、言わぬか」
内蔵助は、大声で、わざと邪険に叫んだ。
こういう時、優しい言葉は、かえって使者の気を萎えさせると知っての叫びである。
しかし二人は顔を上げない。疲労で声が出ないのである。なにしろ江戸と赤穂間は百五十五里。実際は百七十里強（六百八十キロ）ともいう。
通常の早駕籠で十日かかる。それを訓練目標の五日を切って四日半で走破してきたらしい。

ほとんど眠らず食わず、水だけで過ごしたのだろう。食べても駕籠の激しい振動で、吐き出してしまうからである。死なずにすんだのは日頃の鍛錬の賜であろう。

だが、それだけでは、こう速くは来られない。

実は先々代長直時代から、浅野家では、江戸伝馬町始め各街道の宿場の駕籠問屋や飛脚問屋に対し、いざという時のために多額の預け金――一説には飛脚問屋一軒ごとに二十両とも――を預けてきた。また、日頃から、末端の駕籠かき人足にまで付け届けを欠かさなかった。

浅野内匠頭が金銭に細かいとか、吝嗇だと言うのは、この点でも的はずれの批判であることがわかる。内匠頭は、筋の通る金は決して惜しまなかった男である。

この心くばりが、今、生きた。

ところが、駕籠の乗り手の方は、思うようにならない。

「は、はい。ごがろう……さま」

と、使者の早水も萱野も、ぜいぜい喘ぐばかり。

全く言葉にならなかった。

「挨拶は無用。それより用件じゃ。江戸でなにがあったのじゃ。申せ」

内蔵助は、思わず大声を張り上げた。

「で、で、でんちゅうにて、とのが……にんじょうあそばされて……ござる」

とぎれとぎれにそう聞き取れた。

「なに！　にんじょうだと。いかな意味じゃ」

今度は九郎兵衛が叫ぶ番だった。

九郎兵衛は、武の世界を全く知らない平和時の文官である。すぐには、にんじょう＝刃傷の、言葉の連想が浮かばなかったのかもしれない。

だが、使者は、九郎兵衛の声が耳に入らなかったらしく、

「これがその旨の書状で……ござる」

かろうじてそこまで言うと、二人ほぼ同時にばったりと意識を失い、控えていた薬師に引き取られていった。

内蔵助は、無言で使者を見送ると、手早く書状を開いた。大学長広から内蔵助と九郎兵衛に宛てたものであった。

特段のことにて一筆申し上げる。今十四日、勅答の儀について登城なされ、殿中において吉良上野介殿を内匠様一太刀切りつけのところ、御目付衆によって引き離され、内匠様（命の）別条これなき由。右の段言語に絶する事に候。

読むほどに、内蔵助は、自分の顔から血の気が失せていくのが判った。同時に、

（やはり、やってしまわれたのか）

という複雑な思いが、胸を締め付けた。

内蔵助は、痞が主君の持病であることを以前から知っている。特に春芽時がよくないことも重々承知していた。

そのため、これまで懸命になって饗応役指名の回避に暗躍してきたのである。

ところが、今年の二月初旬、内蔵助の裏工作の甲斐もなく、主君が勅使御館伴（接待役）を命じられてしまった。この時は、遠飛脚による連絡を受けた。

内蔵助は、直ちに事後策を講じた。

江戸詰めとして国元から随行させている家老・藤井又左衛門に命じて、吉良上野介を始め関係者一同へ「大役ご指名」の、御礼の挨拶と付け届けを、どんと、弾ませたのである。

もちろん朝廷側にも、関白の近衛侯を始めとして万遍なく挨拶することを忘れなかった。

このための臨時出費は、地元塩浜の運上銀（税金）を引当に、大坂の塩問屋から借

りている。

この種の送金は、昨年、又左衛門の出府に当たっての約束でもあった。

「ここだけの話だが……」

と、内蔵助は、又左衛門の江戸出立に当たって、内々語り聞かせていた。

「ご主君は、ご幼少（九歳）からの、根っからのお殿様ゆえ、世間知らずであらせられる。あまりにも清廉なご性格で、他人の言葉をそのまま素直に信じてしまわれる。だが、人の言葉には、本音もあれば建前もある。その辺の人の世の綾が、殿にはよくお解りにならぬ。じゃによって、そこもとがすべきは、事のすべての裏の意味を悟り、殿の気付かぬ本音部分を黙って補うことにある。あくまで殿には内密でな。特に柳営（徳川）の方々とのお付き合いには気をつけられよ。そのお付き合いでは一切金に糸目をつけるな。よくよくのお覚悟が肝要ぞ」

又左衛門も、また世慣れた男であった。付き合いの機微を重々承知していた。

「心得ましてござる。表だてられぬ資金入用の節は、飛脚を立てまするゆえ、よしなにご配慮のほどお願い申す」

と、ほっとした表情を見せて、江戸に下ったのである。

後年、「討入り」に参加しなかったことから、又左衛門は、先任の江戸家老安井彦右衛門共々〈気の利かぬ不忠者〉と決めつけられているが、そうではなかろう。

気の利かぬ者に「江戸詰め家老」が務まるわけがない。

それに、江戸詰めは、当時、江戸詰め同士で「組合」のような横の連絡会を結成していた。

江戸城詰席の区分によって結成した「同席組合」の他、屋敷が近所同士ということで結成された「向組」、親類同士の「親類組合」等々。

これらの連絡会は、仲良く吉原に繰り出して羽を伸ばしたりするほど、強力な親睦団体であった。

時に羽目を外しては、幕府から睨まれるほどの大きな影響力を持っていた。気の利かぬ江戸詰めなら、はじき飛ばされてしまう。

組合は親睦だけではなかった。幕府の要人の誰に、どのくらいの季節の付け届けや謝礼、あるいは「賄（賄賂）」が必要かについても、相互に諜報を交換し合っていた。

特に朝使の御館伴役は毎年のことであるから、この諜報交換は徹底していた。

この大役を仰せつかったら、どのような事前準備が必要か、老中以下吉良さまで、どのような付け届けや、お礼がいるか、その費用にいくらかかるか。さらには、饗応

役を指南する吉良の儀式手順まで、すべては、極秘のうちに〈御館伴役議事要領〉として、まとめられていたのである。

そのすべてを又左衛門は心得ていた。

そうした諜報を入手するための運動資金は、内蔵助の胸三寸の処理で賄われてきたのである。

もちろん主君の内匠頭は一切関知しない。

また、そのような些細な金銭事まで五万三千石の大名が知るべき筋合いでもなかった。

だから――、

内蔵助は、この時点では、今回の殿の行動は、あくまで「癪による突発的発作」以外には考えられなかった。現に、大学長広の手紙にも、刃傷の理由には一切触れられていない。

この手紙の後段は、以下のように、つまらぬ訓令・訓戒の羅列に過ぎない。

これによって、水野監物……中略……が来て、家中の火の元に気をつけ、騒動せぬように老中から申し渡しがあったということである。それについて赤穂でも家中、

城下の者、騒動せぬように必ず申し付けられたい……中略……赤穂城には人が少ないことであるから二人そろって江戸に下ってくることのなきようにせられたい。

三月十四日

浅野大学（花押）

大石内蔵助殿
大野九郎兵衛殿

なんとも〈危機を告げる手紙〉としては中途半端なものである。

が、まあいい。

江戸下りするな、と内蔵助は忠告されているが、自分が今更江戸に行っても、どうしようもない気がした。

ところが、この手紙の末尾の「猶書き」まで読んできて、内蔵助は、一瞬、「おやっ」と思った。

なお早水、萱野の二人を、そちらに差し向けるにあたり、いろいろ申し付けたる趣の第一は、札座（藩札発行を司る役所）のこと。よろしく申し付けらるべく候。以

上

この中にある「札座のこと」という言葉にひっかかったのである。ここで、

「なにかご不審でも」

と、九郎兵衛が、横から手紙をのぞき込んだ。

「いや、この最後の猶書きのことじゃが……」

内蔵助は、読み終わった手紙を九郎兵衛に渡しながら言った。

「……ここでは、いかにも大学さまご自身が考えつかれたように書かれているが、藤井又左衛門殿の意見に相違なかろう。大学さまは、浅野家の札座の詳細までご存じないでな」

大学長広は江戸の木挽町に住む部屋住みの「もしか殿様」に過ぎない。兄の所轄する赤穂の財政や藩札の詳細まで立ち入って知るわけがなかった。知っているとすれば、又左衛門しか考えられない。

読み終わった九郎兵衛も、

「なるほど、ご尤も。しかし、さすがでござるな、藤井殿は。このような緊急の時に、藩札のことまでお考えが及ぶとは」

と、ひとしきり唸ったあと、

「とすると……江戸衆は、最悪の場合、お家断絶まで心配しているということでござろうか」

と、急に不安顔を覗かせた。

「この文面では、残念だがそう読めるな」

内蔵助も、憮然として天を仰ぐ。

浅野の刃傷事件は――痞による一時的狂乱なら、精神障害としてお家断絶までの厳しいご沙汰はないのではないか。

手紙の前半を読んだ時の、そんな感触が、ここで朊くも消し飛んだ感じである。

「そこで、貴殿に訊ねたい」

と、内蔵助は、素早く言葉を改めた。

「万一の場合、確かに又左衛門の言うとおり札座の処理を考えねばなるまい。そこで、赤穂浅野家の総資産を含めて、札座の件、大野殿のご意見を参考までに聞いておきたいが」

「さてさて、難しいことを、あっさりとお訊ねなされる方でございますな。大石殿は」

九郎兵衛は、細い目で笑い、即答を避けた。
「いやいや、拙者、金には全くの素人ゆえ、難しいとも易しいとも、それすら判断ができかねる。ご無礼あればお詫びせねばならぬ。これこのように」
内蔵助は、かすかに苦笑いしながら、頭を下げた。
「詫びるなどとんでもござらぬ。拙者、大体はわかっておりまする。が、国家老の大石殿にお答えするには、数にいささかも間違いがあってはなりませぬ故、一刻ほどの吟味の時を頂けますかな」
「よろしゅうござる。では、後刻、いつものとおりの時刻に総登城を命じるゆえ、それまでで結構でござる」
内蔵助は、厳しい顔で答えた。
九郎兵衛が、あたふたと去ると、内蔵助は、やおら側用人を呼んだ。
そして無表情のまま告げた。
「巳の中刻（午前十時）、城下におる者全員に総登城を命じよ」

3

内蔵助は、この後、城の自室に籠もった。

すべての面会を謝絶した。

部屋の外で何人もの男が、入室を断られて小姓といがみ合う声がしたが、これも敢えて無視した。

無性に一人になりたかったのである。

一人になって、危機に際しての自分の心の中の〈本当の声〉に耳を傾けたいと思った。

小姓を遠ざけ、一人目をつぶり、長い、長い、無念無想の世界に入る——。

その中で最初に聴いたのは、この一国一城が、がらがらと崩れていく怪音であった。

国などというものは、なんと瞬の間で崩れてしまうものなのか——。そして、そんな脆い瓦礫の城の上に乗って、やれ「禄が少ない」の、「商人になりたい」だのと、ぶつくさ言っていた自分の愚かさが、今更ながら恥ずかしくなった。

（俺も甘いな）

と、改めて思う。

主君に対しては、不思議なほど、なんの感慨も湧かなかった。

一つには、大学さまの手紙にも、「内匠様別条これなき由」とあるように、（この段階では）主君は生きていたからである。

抜刀といっても、殿中なら、使ったのは、せいぜい小さ刀であろう。そんな小さ刀の「一太刀切りつけ」で引き分けられたのである。

相手に致命傷を与えたとは考えられない。

吉良の傷は浅手に違いない。

だから、持病の「痞」のせいとはいえ、

（殿もつまらぬ中途半端なことをしてくれたものだ）

程度の感触しかなかった。

もう一つ、主君に対して冷ややかだったのは、元々、内蔵助は、主君内匠頭の「お覚え」がよくなかったせいもある。

二人の物の考え方があまりにも違い過ぎた。

内匠頭は武辺好み。仕事では、なにもかも、重箱の隅まで、きちんと整っていなければ落ち着かない性分である。

藩内の農民や町民には、努めて優しかったが、これは祖父長直、父長友の薫陶よろしきを得ての表の顔に過ぎない。

部下に対しては、全く別の顔で接した。

性格的には包容力とか、温かみがまるで感じられなかった。国元にいる時は、侍女のちょっとした粗相にも、すぐに切れた。怒り狂い、抜刀騒ぎを演じることがしばしばであった。

要するに〈腫れ物に触るような殿様〉である。

心から笑ったのを見た者は誰もいない。

内蔵助は全く逆だった。

春風駘蕩、いつも微笑を絶やさない、捉まえどころのない男である。作ってそうなっているのではない。それが地であった。

武辺についていえば、この平和の時代に、刀や槍を、型どおり振り回す練習など、なんの役にも立たぬと思っていた。鉄炮の練習など撃つ機会すらないのだから、なお

更無駄なことである。

この時代の武術は、専守防衛。身を守るだけでよい。

となると、型どおりの武術の練習など、いざというとき、糞の役にも立たない。

内蔵助が嗣子松之丞（のちの主税良金。部屋住、十四歳）と次男吉千代（吉之進。十一歳）相手に木刀で日頃教えているのは、もっぱら、不意の攻撃に対する「瞬時の身のかわし方」や「居合い抜きの術」である。

だから――、型を習う剣術の練習などは頭から馬鹿にしていた。三十歳の時、讃岐国高松に、奥村無我の東軍流の剣を学びに行ったのもそのためである。

これが剣術の精神や作法、型好みの主君との間を疎遠にした。

また、内蔵助は、書画をよくするだけでなく、しばしば遊郭を徘徊する粋人でもあった。

そして遊びの場では、とことん楽しんだ。先に立って馬鹿をやり、歌や踊りを得意とした。

そんな内蔵助の浮いた噂を、殿は露骨に嫌がっている、と人づてに聞いている。

仕事について言うなら、内蔵助は大の算勘嫌いである。祖父の生きていた頃は、見

習家老として「勘定吟味役方」をやらされたので、嫌々ながら算勘の勉強もしたが、筆頭家老を襲職すると、二度と算盤を手にすることがなかった。

数字の記憶も大雑把である。

「上に立つ者は大局観だけでよい。だから覚えるのは暗算で済む範囲の数字だけで十分」

主君と全く逆である。

そういうものだから、主君に気に入られる筈がない。最近の主君は、もっぱら細かい数字に強い大野九郎兵衛を寵愛している。

内蔵助はそれを知って黙っていた。

別に嫉妬も羨望も感じなかった。算勘の能力では、はるかに劣るのだから仕方がないこと。

人は、持って生まれた資質によって取り柄、取り柄が違うのだから当然、と割り切っている。

そんな姿勢だから、今回の事件では、

（なにも勅使下向という大事な時に、よりによってご持病を爆発させなくても――）

という、いささか病持ちに冷ややかな感覚の方が強かったのである。もっとはっき

りいえば、
（部下にとっては飛んだ迷惑）
だが、国家老としては、そんなことはおくびにも出さない。また出せない。
（本音と建て前は使い分けねばならぬ）
それが内蔵助の持論でもある。

ここまで一人ぽつねんと考えている時、唐紙の向こうが、どっと騒がしくなった。
と――、
「大石殿、御家老殿」
と怒鳴る声が響いた。
聞き覚えのある老人の声だった。

4

内蔵助の部屋の唐紙を蹴破るようにして押し込んできたのは、例の間喜兵衛であった。

「何事でござる」

内蔵助は、にこにこと、作り顔で言った。

「何事でござるもあるものか。この重大事に、御家老は、ここでなにをしてござらっしゃる」

そう言う顔は、すでに真っ赤であった。

「ご覧のとおり。書見中でござるが」

言い終わってから、しまったと思った。書見台には、なにも置いていなかったのである。

もっとも老人は、頭にきていたらしい。そんな書見台など見向きもせずに、

「書見？　なにを愚かなことを」

と、一言で切り捨てた。

そんな押し問答の末、勝手に座り込まれてしまった。

日頃は、退屈しのぎの碁の相手である。

迷惑だが、追い返すわけにもいかない。

喜兵衛は、名を光延（みつのぶ）といい、父の左兵衛が山鹿素行（やまがそこう）の高弟で、自らも山鹿流軍学を学んだことを誇りとする「ウルサ型」の一人であった。

喜兵衛の言わんとすることは解っていた。

なにを、この緊急事態にぐずぐずしているのだ。国家老として、刃傷事件に対する藩としての態度を鮮明にせよ、と言うに決まっている。

だが、こんなウルサ型相手に、時を移す余裕はない。判断を迫られる総登城の前に、大野九郎兵衛の報告を聞かねばならなかった。

「拙者の意見は、総登城のみぎり、誤伝のないよう、全員を前に、時を同じゅうして申し上げたい。それまでは、みだりに開陳（皆の前でのべること）はできぬ。事情ご賢察くだされ、ご老体。これ、このとおりじゃ」

下手に出て、ようやくのことで引き取ってもらった。

これ以上ここにいては、ウルサ型がさらに押しかけてくるだろう。

そう思った内蔵助は、一瞬の判断で、侍女の被衣を借りて、九郎兵衛の部屋に転がり込んだ。

「頼む、匿うてくれや」

と言ってにやりと笑ってみせた。

遊郭で、内蔵助が、好みの女を口説く時によく使う手である。が、くそまじめな九郎兵衛は、もちろんそんなことは知らない。

算盤片手に書類を眺めていた九郎兵衛は、一瞬、呆れたように内蔵助を見上げたが、それでもなんとか事情を察知したのであろうか。

「ささ、どうぞお楽になさってお待ちくだされ。まもなくご報告がまとまりまするで」

と、愛想笑いしたものの、後は、そのまま仕事を続けるばかりであった。

部屋は、内蔵助の用部屋の三分の一しかない。

その三方に書庫を巡らせているが、ほとんどが、浅野家の出納報告や赤穂各地からの米作と税収の報告書類ばかり。

殺風景この上ない。

九郎兵衛は、書類の山の中で悪戦苦闘していた。根っからの「御算用者」であった。

（しかし、特技を持つことは羨ましいこと）

内蔵助は、侍女の被衣を腰の下に敷いて、やや離れて寝転がると、そっと九郎兵衛の仕事ぶりを横から観察した。

この時、不意に、この緊急時にも、算盤片手に数とにらめっこできる、この男に激しい嫉妬を覚えた。

初めてのことである。

禄高六百五十石。内蔵助の半分しかないが、経済に明るく、税収や藩札発行による塩田事業の拡張などの思いきった経国政策で赤字財政を立て直した功労者である。

しかし、当時は、まだ武士に戦国時代以来の「武辺第一」の風潮が残っており、武士が算盤を持つことを恥とした。そのため、どの大名家でも「御算用者」が払底していた。信用できる算盤屋は引く手あまたである。九郎兵衛は、そんな勘定方の中から徐々に頭角を現した一代家老である。

多くの算盤屋が、武士の無知をいいことに、数をごまかして私腹を肥やし、追放されたり殺されたりしている。

その点、この男は律義で信用できる。むしろ頭が良すぎるため、その調べが内蔵助と札座勘定奉行の岡嶋八十右衛門（二十石五人扶持、三十六歳）だけが握っている塩取引の簿外勘定――いわゆる裏金に及びそうで、冷や冷やさせられるのが欠点であるが。

どれほどの時が過ぎたか――。

「大石殿、できましたぞ」

という九郎兵衛の声に、内蔵助は、ふと目を覚ました。

「何刻でござろうか」
「まもなく巳の中刻、そろそろ総登城の太鼓の触れとなりましょう」
「で、浅野家の財産目録は？」
「これこの通り」
三寸ほどの分厚い書類が目の前に積まれている。
内蔵助は、一瞥しただけで、頭をかいた。
「読む間がないわな。済まぬが、拙者の問いに順に答えてくれぬか」
「かしこまりました。では、どうぞお訊ねくだされ」
「まず第一に赤穂の藩庫にある米の蓄えはいかほどじゃな」
「元禄十四年の知行引当として藩士に渡す予定の米は千二百石。これで過不足ありませぬ」
「二の丸倉の城付米は如何に」
「ほぼ同量。正確に申せば千二百十四石四斗。俵数で三千三百六俵となっております。これも所定の量目でござる」
城付米とは、城明け渡しに当たって次の藩主に引き継がねばならない米である。いわば幕府からの預かり米ともいうべきもので、勝手に処分はできない。

「では金品は如何に？」
「銀換算で七百貫ござる」
といってから、九郎兵衛は、手に持つ算盤をぱちぱちとはじいて、
「両換算では九千三百両ほどでございましょう」
と、注釈を付けた。
「で、肝心の藩札は如何に？」
「九百貫、同じく両換算一万二千両」
「ということは？」
「引当率七割七分七厘でござる。現在のまま清算するにはおよそ三千両ほど足りませぬ」
「その他の借財はどうじゃ」
「此度の江戸饗応を含め、江戸上屋敷関係の仮払支出が、溜まりに溜まって二百貫（約三千両）以上あり、これを大坂の塩問屋からの借財で賄っております。しかし、これは今年の塩浜から予定される運上金（税金）収入で、ほぼ見合っておりますれば、算上ではご懸念には及びませぬ」
「だが手許金で、藩札を全部換金しては、我らの手許に金員が皆無になるな」

「御意」
「では、どうしたらいい」
「ご宗家から借用できませぬか？」
「まず、無理じゃろう」
広島の浅野宗家は四十二万石の大藩だから貸せない金額ではなかろう。が、返す目途がないものを借りるわけにもいかない。
「塩の販売権を担保に入れるなれば可能と思われますが？」
「塩の権利は次の藩主のもの。これに触るわけには参らぬな」
「となれば、割り引くしかありませぬな」
「割り引くとはどういう意味じゃ」
「正貨（幕府通貨）との交換率に掛け目を作ることでござる。例えば正貨百両に対して七十七両という風に」
「それでも、お家の金蔵はほとんどすっからかんじゃ。もそっと余裕が欲しいな」
「では七割？」
「まだ余裕がすくない」
「六割五分では」

「まだまだ」
「では六割」
「そんなところが落としどころかな。利に聡い商人だけに、藩札が五割の減価では承知すまい。まあ、明日もうすこし考えよう」
にやりと笑って立ち上がった。

5

巳の中刻。
城の大太鼓が総登城を告げた時、大広間は、すでに主君の刃傷事件を伝え聞いた藩士で、ごったがえしていた。立錐の余地もない。
総員二百数十人。
元々、赤穂浅野家が抱えている藩士の数が多すぎたこともある。
公称五万三千石。元禄十四年当時は五万石ともいわれる。特産の塩の収入を入れても実収で六万から六万五千石の禄高である。
当時、大名が直接抱える藩士は、平均して禄高の三厘（〇・三パーセント）以下であ

るから、せいぜい百五十人。多くとも百七十ないし八十人程度が浅野家藩士の適正数である。

ところが浅野家は、承応、明暦、万治年間（一六五二～一六六一）に客分となった兵学者・山鹿素行の武士道鼓舞思想の影響が強すぎた。

この感化を強く受けた長矩の祖父・長直以来「世に埋もれた人材を発掘する」と称して、やたらと藩士を集め過ぎたのである。もちろん、長矩や内蔵助の生まれる前のことではあるが。

内蔵助は、家老になった時、いち早くお家の（人件費倒れの）事実に気づいた。しかし、いくら藩士の抑制を献策しても、武辺好みの主君長矩は言うことをきかなかった。

ちなみに、元禄当時の《浅野家分限牒》によると、いわゆる藩士は二百八十八名。そのほか隠居、お抱え薬師、内室衆、御女中等々を含めるとざっと五百名にのぼった。

この過剰人件費で、本来なら豊かな筈の藩財政は、近年逼迫気味。そのしわ寄せが農民に対する高課税となっていた。浅野家は、彼らからは怨嗟（恨み）の目でみられていたのである。

集まった藩士の雑踏の間を縫うようにして正面に据えられた席にたどり着いた内蔵助。

初っぱな、全員を見渡しながら、

（こんなに多くては話にならぬ）

と、思っていた。

藩士が多すぎては、まず意思統一ができない。

もう一つ重要なことは、三百人近い藩士がいては、せっかく町人を泣かせて藩札を六掛けに値切っても、出目（額面との差）は、平均一人七両。

一年分の浪人手当にもならない。

これでは藩士は等しく貧乏になってしまう。

（どうしたら、この数を減らすことができるか）

それが第一の思案と思った。

もっとも、内蔵助は、そんなことは、この時、おくびにもださない。

ひたすら厳粛な面持ちを装い、大広間が静かになるのを、ゆっくり待った。

この後、できるだけ淡々と、早朝届いた大学からの手紙の全文を披露すると、周囲を見回しながらこう付け加えた。

「目下、我々が知り得たところは以上に尽きまする。いずれ江戸より第二の早駕籠が参るであろう。それで、もそっと、その後の事情が判明しよう。しかし、ご承知と思うが、江戸城内では、小さ刀であれ、鯉口三寸抜けば、切腹ものの処罰を受ける定めとなっておる。まして特定の相手に向かって切りつけたとあれば、理由の有無、その程度の如何を問わず、決してその罪は軽くはござらぬ。臣下としても、この事実は厳粛に受け留めねばなりませぬ。各々方には、次の早駕籠の到着まで、いたずらに揣摩憶測（勝手な推測）することなく、軽挙妄動を慎み、ご自宅にて拙者からの指示を待たれるようにお願い申す」

それだけ言うと、唖然とする藩士を前に、さっと立ち上がった。

「ま、ま、待ってくだされ、ご家老。それでは、あまりにも……」

と、手を挙げて怒鳴ったのは、やはり間老人である。

「そうだ、そうだ」

廊下あたりからも、声が湧き上がった。

「待って如何にせよ、と言われるのでござろうや」

内蔵助は、開き直って言った。

「そう紋切り型に言われても困る。が、せめて江戸からこられたお二人のご使者から、

直接江戸城での事件のご様子なども伺いたいが」
「いや、それはできませぬ」
断固たる口調で内蔵助は宣言した。
「なぜでござる」と、詰め寄る老人に、内蔵助は、噛んで含めるように言った。
「使者のお二方は、今朝ほどは極度の疲労困憊で倒れられ、目下絶対安静でござる。さきほど、やっと牡蠣粉（精神安定剤）などを飲まれて眠りについたばかり。とてもとても、皆様にお話しできる状況ではござらぬ」
内蔵助は、口からでまかせを言って、まず老人を煙に巻いた。
「それに……、お二方は十四日の昼九つ（十二時）過ぎに江戸上屋敷から出立なされた御仁でござれば、その後の、柳営（幕府）のご処置も、江戸城のご様子も、我ら同様、なに一つご存じありませぬ。今はただ、次のご使者の来るのを、じっと耐えて待つしかござらぬ」
老人は、一瞬黙した。その後、
「で、そのご使者は何時ごろこられましょうか」
弱々しく訊ね返した。
「さて、そればかりは拙者としても……」

と、内蔵助は、一転、優しく受けたあと、

「しかし、早駕籠の使者の経験者は東西二組ずつしかござらぬゆえ、おそらく次は、ある程度の決着の出たところでの江戸ご出発となろう。となると……」

と言って、大広間がしんと静まりかえるのを待って言葉を結んだ。

「ご到着は、今夜半――でござろうか。されば、今朝のところはこれにて散会と致す」

内蔵助は総登城・第一幕第一場をなんとか凌ぎきると、一旦藩士を解放した。

側近の一部には、この藩士解放に反対があった。第二の早駕籠の来るまで藩士をここに閉じこめなければ、第一報の内容が、すべて城下に漏れてしまうというのである。

しかし、内蔵助は笑って答えなかった。

心中、こう思っていたのである。

（藩札は噂で暴落すればするほどよい。藩士も逃げるなら逃げよ。その方が残る者たちに与える浪人手当が増えるだけだ）

6

大手門脇の屋敷に一旦戻ると、大石邸は、数十人の男女をかり集めての〈炊き出し大戦争〉の最中だった。一際背の高い女は、もちろん指揮を執る妻の理久。

理久は城内の話の内容を察知すると、自邸の米倉をすべて開放し、言われた炊き出しの量を一挙に十倍以上にふくらませていた。

頭から籠城の積もりであった。

「殿さまが、こんなに早くお帰りとは……。どうしましょう、こんなに炊き出ししてしまって」

と、汗びっしょりで当惑する妻。

その豪快さと早とちり、そして空になった米倉を眺めて、内蔵助は苦笑いするばかり。

「やれやれ。では仕方がない。みな握り飯にして城内の大広間に持っていってやれ。どうせ若い連中は、まだ収まりがつかず、大広間で侃々諤々やっているはずだ。あいつ等なら際限なく食ってくれる」

この後、下男を秘かに呼んで言った。

「今夕以後のことと思うが、ま一度江戸から早駕籠が来る。その先触れが来たら、逆行させて、かく申させよ。『此度の早駕籠は城内に入る前に大石の元に行くように』と。そして早駕籠がきたら……」と、ここまできてにやりと笑い、更にこう付け加えた。

「そっと余を起こすのじゃ。ただし寝ていることは、女房大明神には内緒でな」

汗みどろで働く妻をほったらかして勝手に寝ることに気が引けた。が、いよいよ今夜が正念場になるかもしれないのだ。

今は休息の時。

昼間なら、いつでも、どこでも眠れる。「昼あんどん」の本領発揮である。

案の定、第二の早駕籠の先触れは、同じ十九日の酉の下刻（午後七時）。早駕籠の到着は、その一刻後の戌の下刻（午後九時）であった。

先触れの後、眠りから醒めた内蔵助。

十分腹ごしらえして、大野九郎兵衛を秘かに呼び寄せ、二人で自邸に待機した。

ところが、早駕籠に乗っていた使者の名を告げられて驚いた。

「なんと、原どのがご自身で参られただと！　それに瀬左衛門も――」

原惣右衛門。

足軽頭。新参、五十四歳。知行三百石の上士。

もう一人は大石瀬左衛門（譜代、馬廻、百五十石）。

内蔵助の曾祖父・良勝の弟の孫。当時二十五歳と若いが、胸を患って江戸の薬師の下で療養中。まだ、この時本復していない。

どちらも、年齢あるいは体力で、とても過酷な早駕籠に乗って来るような人物ではなかった。

このような人選となったのは、幕府の処置がよほど腑に落ちなかったからではないか――。

内蔵助は直感した。

原の第一声は、内蔵助の予想を超える苛烈なものであった。

「十四日即日、ご切腹とお家取り潰しでござる。如何に将軍家のご命令とはいえ、あまりに理不尽な――」

その絞り出すような悲痛な声が、内蔵助の肺腑をえぐった。

もう一人の使者・大石瀬左衛門が、無言で差し出した書状は三通。

一通は内匠頭が預けられた田村右京大夫から。
即日の長矩の切腹を知らせ、遺体の引き取りを依頼する書面の写しである。
二通目は、老中より三次の浅野土佐守長澄、大垣の戸田采女正氏定、旗本・山田奉行の浅野美濃守長恒の縁者三人に宛てた手紙の写し。
この中で老中は、「赤穂家中を騒がせぬように」と厳命し、三人に、万一騒乱の生じた場合の連帯責任を負わせていた。
第三の手紙は、大学長広、浅野美濃守、戸田采女正の三人連署による書状の写しで、長矩の切腹、上下藩邸の接収、そして赤穂への収城使の派遣を予告するものであった。
内蔵助は、三通の手紙を、交互に眺めながら、二度、三度と読み返した。
なんともやりきれない無味乾燥な文章の羅列であった。
最初は自分でも、なぜそう考えるのか、はっきり解らなかった。が、やがて、その理由がおぼろげながら摑めた。
三通とも〈主君・浅野内匠頭の刃傷に及んだ事由〉を素通りして物を書いていた。
それが手紙の趣旨をすべて空虚なものに感じさせたのである。
特に田村右京大夫の手紙が酷かった。こういう場合に、通常伝えるべきは、同じ大名としての惻隠の情ではないのか。それが、いたわりの言葉はおろか、内匠頭の夫人

や家臣への遺言や遺品などについても一切触れていなかった。

そして、知らぬ間に赤穂・浅野家は、世間の危険物となり、がんじがらめに監視されていたのであった。

（これは、もしかすると、主君の突発的発作事件だけではないかもしれぬ）

内蔵助が、主君の殿中の刃傷について、最初の疑惑を持ったのは、この時である。

しかし、誰にもこのことは口にしなかった。また出せなかった。

7

この日（十九日）夜半。

内蔵助は、原と瀬左衛門の二人の使者に休息を命じて自邸に残し、再び城の大広間に藩士の総呼集をかけた。

総登城・第一幕第二場の開始である。

藩士は、総員二百数十人が瞬く間に駆けつけた。今朝方と人数に変わりはなかった。むしろ幾分増えた感じである。今朝こられなかった近隣の藩士が馳せ参じたせいであろう。

内蔵助は、今朝と全く同じ姿勢で、淡々と三通の手紙の内容を読み上げた。そして、

「事態はかくの如くでござる、各々方」

と、今度は、家老としての解説も一切加えぬまま、後は黙した。

満場から、驚きと怒りが爆発した。

声にならない呻きが大広間をはい回った。

そして男泣きにむせび、すすり泣く声。

しかし、内蔵助は、目を瞑ったまま動こうとしなかった。

藩士のいらだちは解っている。

内蔵助と藩士の間には、根本的な認識の違いがあるからである。内蔵助には、この事件の原因に——程度問題はあるにせよ——主君の持病である「痞」が絡んでいることがわかっている。

ところが、藩士は主君の持病を知らない。だから、「なにゆえのご刃傷か」が理解できないのである。

しかし、家老としては、主君の心の欠陥を、みだりに部下に喋るわけにいかない。

とすれば、黙するしかないのである。

しばらくの沈黙の末、「御家老！」と叫んで、たまらず立ち上がったのは、大目付の間瀬久太夫正明（二百石、役料十石、六十一歳）であった。

間と並ぶ「ウルサ型」の一人である。

「まっことご家老は、この城を明け渡すのでござるか。黙ってこのまま……、我らの先祖が血の出るような思いをして築いたこの御城を」

と、顔を真っ赤にして、つっかかってきた。

内蔵助は答えない。答える必要はないと思った。

見るに見かねてか、横に控えた九郎兵衛が内蔵助を代弁した。

「すでに御公儀の決められたこと。やむを得ぬことと存ずるが……」

この大野の（言わずもがなの）言葉が、藩士の憤激に火を付けた。

「黙れ、算盤屋！」

「算盤屋とはなんだ！　家老に向かって」

「なんだとは、なんだ。俺は大石殿に問うておる。算盤屋は黙らっしゃい」

九郎兵衛との間に、つかみ合いの喧嘩が始まりそうな気配だった。

ここで、「御家老！」と、もう一人声を上げた者がいた。近松勘六（馬廻。二百五十

石、譜代。三十二歳）であった。

日頃は無口な物静かな男である。それが、この場の雰囲気にたまりかねたのか、立ち上がると、堰を切ったようにしゃべり始めた――。

「ここで内輪同士で争っても仕方ござるまい。しかし、大野どの。確かに言われるとおり、御公儀がすでに決めたことなれば、みだりに事を荒立てることはできぬかもしれぬ。だが、〈一寸の虫にも五分の魂〉とやら。まして我らは武士でござる。かくまでいわれて『はい、さようでございますか』と、引き下がるわけには参らぬ。残された我々にも〈武士の一分〉がござる。だが、浅学にして、拙者、それをどういう形で表すべきかを知らぬ。そこで大石殿。この際、我ら、どのように身を処すべきかを、お教え願いたい」

近松は、切々と説いた。

「そうだ、そうだ」

「ご家老お願い申す、お願い申す」

あちこちからも続く。

難しい注文だった。

が、ここまでくれば受けて立つしかなかった。

「よく言ってくれた。間瀬どの、大野どの、そして近松どの」

内蔵助が、三人の発言者に、ゆっくりと順に礼を述べたのは、あくまでも言葉の時間稼ぎ。次の考えをまとめるための苦し紛れの準備に過ぎない。近松に向かっては、うやうやしく頭まで下げてみせた。

「特に近松どのの言われた〈武士の一分〉というお言葉。この内蔵助、久しゅうに、ずんとこの胸の心の臓に響きましたわい。そう、確かに、ここでの大事は、それよ。武士の一分よ。これを如何に我らが貫くか、貫けるかじゃ。だがな……」

天井を見つめ、一呼吸措き、全員の注意を十分引きつけた内蔵助は、自分でも意外に思うほど口がなめらかに動き始めた。

「これほど言うは易く、行うに難いものはござらぬ。拙者、この場に臨むに当たって、拙者なりに武士の本分、臣たる者の面目を、如何に立てるべきかを、つくづくと考え、すでに存念を二つほど固めて参っている。だが、正直の所、ここでは言いだしかねておる」

「なぜでござる」と、詰め寄る面々。

内蔵助は、更に力を込めた。

「拙者の考える武士の一分は、各々方のお命のすべてを求めることになるやもしれぬ

からじゃ。義は一分でも、血は一分では済まぬでな。それも我が身だけなら、捨つるは鴻毛（軽い毛）より易かろう。だが、妻がいる、子がいる。そして親がある。殊に親じゃ。拙者の場合は、すでに親はこの世にいない。だから気軽く物が言える。しかし、ここに居られる方々の中には、これから孝養を尽くさねばならぬ両親をお持ちの方が大勢おられよう。《忠ならんと欲すれば孝ならず》。義のために命を捨てて逆縁となるはこの世の最大の不孝。かの山鹿素行先生の、お教えにも反する。それゆえ、拙者言いかねておるのじゃ」

しかし、近松は食い下がった。

「いえ、かまいませぬ。我が親は、子が義のために果てることを厭いませぬ。なにとぞ、ご家老のお考えを、ここで披瀝してくだされ」

他にも「そうだ、そうだ」の声。

だが、内蔵助は、首を横に振り続けた。

「いや、いや。今夜の所は申すまい」

内蔵助は、意識してもったいをつけた。

「なぜでござる」と、近松は迫る。

内蔵助は、おもむろに答えた。

「機が熟しておらぬゆえでござる。それに城明け渡しまでには、まだ時の流れに余裕もござれば、ここは熟考が肝要と存念致す。それまでは、ここでそなたたちと何度でも話し合う積もりじゃ。焦る必要はない。今朝からここに詰めたままの者もおられよう。各自、今夜のところは、一旦、家にもどられて、これまでの経過を家族に報告なされるがよろしかろう。そして、明日昼四つ（午前十時）また揃ってご登城されよ」

内蔵助は逃げた。この時、正直のところ、心は定まっていなかった。千々に乱れていた。

「すでに固めてきている」と公言した二つの存念は確かに持っていた。嘘ではない。

一つは、赤穂城籠城と徹底抗戦。

二つは城あるいは地元の浅野家菩提所（華嶽寺＝現花岳寺）を枕にしての全員の自決。

幼少の頃、父母や山鹿素行から叩き込まれた儒教の教えによれば、答えはこの二つしかない。

「君、君たらずといえども臣、臣たらずんばあるべからず」（『古文孝経』）

公儀の論理はどうあれ、武士の切腹は己れの意思で決めるべきものである。命令による切腹は、屈辱以外のなにものでもない。

この「君」の受けた切腹の屈辱は、即「臣」の屈辱である。臣たるもの、屈辱を受けて、おめおめと生きながらえることはできない。

これが当時の臣道である。

この二つの道のどちらを選ぶか、と言われれば、内蔵助は、籠城と徹底抗戦の方を選びたかった。

城の攻防戦については、日頃、退屈のあまり秘(ひそ)かに研究までしていたからである。

赤穂城は、先々代の名君・浅野長直が家臣の近藤正純(こんどうまさずみ)に縄張りさせた名城。熊見川の河口に半島のように突き出た地形を利用した変形輪郭式で、曲輪(くるわ)の要所が矢尻(やじり)の先のようになっており、稜堡式(りょうほしき)と呼ばれる。

銃撃戦に死角がない点では、六十三年前に幕府軍を四ヶ月に亘(わた)って苦しめた天草の乱の肥前・原城より優れている――、と内蔵助は秘かに自負していた。

大砲も二門ある。

あるといっても浅野家の資産ではない。

大砲の所有は幕府の厳しい監視下にあったため、家士の萩原兵助・儀右衛門の兄弟が所有している形になっている。この二人は地元の有数な資産家で、兵器収集を趣味

としていたから、幕府の目を逃れるのに好都合だった。しかし、その維持費や火薬の補給などは、浅野家が裏で補助金を出して負担していたから、いつでも使うことができる点では変わらない。

だが、いずれにせよ、籠城戦は家族を巻き込み、町民を苦しめる。城攻めのあおりで熊見川からの取水（赤穂水道）を断たれれば、子供、幼児まで苦しむことになろう。決して内蔵助の好む「美しい死に方」にはなれそうもない。

では、第二の「城を枕に自決」を選べばどうか。こちらの方がはるかに美的である。しかし、これとても残された家族、特に藩士の老いた親たちを路頭に迷わせ、屈辱を強いる点では、たいして変わるまい。

どちらの道を選択するにしても、「父母に対し、専ら孝行を尽くすべき事」という教えに背くことになる。

つまり「君、君たらずとも臣は臣」を貫けば「専ら孝養を尽くせ」と言う、もう一つの教えと相容れない。

山鹿素行の教えた儒教の教義は、ここで破綻してしまうのである。

（兵法教義などというものは、そんなものよ。現実の前には全く無力なのだ）

と、内蔵助は秘かに悟っていた。

となれば、自力で「第三の道」を探すしかない。それが、まだ見つからないのである。

今は逃げるしかなかった。

時間が欲しかった。

内蔵助は、自邸に帰ると、憮然として家人に告げた。

「寝る。誰とも会わぬぞ」

就寝は丑の中刻（午前二時）を過ぎていた。

それでも目が冴えて眠れなかった。

少しうとうとっとしただけで、まもなく夜明けを迎えた。

怒濤のような赤穂の最初の一夜は、こうして終わったのである。

8

翌日（二十日）。

内蔵助は、ずきずきと頭が痛んだ。しかし、休んではいられない。床から起きあが

ると、うたた寝の間に考えていた二つの手をうった。

一つは、萩原文左衛門（百石）と荒井安右衛門（十五石三人扶持）の二人を使者として江戸に送り込み、吉良上野介の安否を探ること。

二つ目は、広島の本家に借財を申し込むこと。

しかし、どちらも本気でしたわけではない。

吉良上野介が生きていることは、主君が、小さ刀で一太刀切りつけただけで引き離されていることから、容易に想像できた。確かめるまでもなかったのだ。

次の本家からの借財は、返す当てもないから、最初からする気はなかった。

要するに、「籠城・徹底抗戦」と「城を枕の自決」の二つ以外の「第三の道」探しの〈時の間〉稼ぎにすぎなかった。

昼四つ（午前十時）。

総登城・第一幕第三場の開始である。

大広間の出席者は、前の二回よりさらに増えて三百人に達していた。

内蔵助は、今朝ほど行った江戸への使者の派遣と広島本家への借財申し入れを、諄々と、いかにも意味ありげに報告した。

ところが、この二つの報告は、誰も異議を挟む者がなく、あっさり了承されてしまったのである。これだけで時の間がつぶせると思った当てがはずれた。

内心、当惑した内蔵助。

「さて」と呟いて、集まった全員を見回さざるをえなくなった。今日は、ここまでで終わることは許されない。それでは部下に後ろを見せることになる。では、なにを語るべきか。

当然、皆、昨夜内蔵助が発表を保留した二つの「存念」を知りたがっていることは、目の前にいる藩士のぎらぎらした目で解った。

仕方がない。

「では、ここで今朝（昨夜）保留した、拙者の存念を申し上げる」

内蔵助は観念した。

「前回は存念が二つあると申した。だが、あれから拙者、つらつら考えて、次の一つだけに絞ることにした。よっく聞かれよ、各々方」

「お～う」という地鳴りのような呻きと期待がこだました。

「それは、死である」

内蔵助は、あっさりと言ってのけた。

「死？　でござるか」

一瞬のうちに、悲鳴とも嘲笑ともつかぬ、ざわめきが藩士の間を駆けめぐった。

「さよう、死ぬことじゃ。御一同うち揃って」

「と、言われると、我ら、籠城して徹底抗戦することでござるな」

この日も内蔵助の真ん前に陣取る、間、間瀬といった「ウルサ型」が、嬉々として目を輝かして叫んだ。

「いや、いや、早まられるなご老体」

内蔵助は、手振りで二人を制して続ける。

「拙者は、ただ死としか申しておらぬ。それも従容とした死でござる。籠城抗戦などとは、毛穴ほども思ったことはござらぬ」

もちろん嘘である。今のような無意味な人生を続けるくらいなら、籠城抗戦ほど面白い「死の誘惑」はない。本気でそう思っていた。

しかし、指導者として、先頭切ってそんな無責任なことは言いだせない。またできない。それに――、

「考えてもみてくだされ、間どの」

と、内蔵助は、間と他の藩士の交互に視線を配りながら、実は自分にも言い聞かせ

ていた。

「籠城で救いがあるのは、城の外に強力なお味方の見込める時だけでござる。なければ我ら、敵に囲まれて、ただ飢えるのみじゃ。肥前・原城の悲劇を、とくとご勘考くださされ」

寛永十五年（一六三八）の天草の乱当時、常陸国・笠間城主だった浅野家は、ごくわずかしか幕府軍に参加していない。しかし、加わった祖父や父の口から、この時の原城の悲惨な運命を、身震いしながら聞いた記憶がある。内蔵助も、祖父から、この時の籠城の、むごさ、おぞましさを聞かされてきた一人だった。

「となると……、われら一同、うち揃って、城を枕に、あるいは華嶽寺にて従容として自決することしかござらぬ。これは一見、無駄な、女々しい手段のようにみえる。が、実はそうではない。第一に、これは父母への孝養と妻子への情愛を残せる唯一の道である。第二に、我ら自らの自決によって、殿に屈辱的な切腹を強いた幕府を反省させ、大学さまを中心に、浅野家再興の道が拓かれるやもしれず。いや、拓かれると信じたい。第三に、我らを危険物のように思う世間の評価も、これで、がらりと変わろう。それもこれも、我らの従容とした死が前提となる。だが、拙者、これを藩士全員に強要する積もりは毛頭ござらぬ。一つしかない命、あの世とやらは知らず、一度

しかない命でござる。各々方には、拙者のような譜代もあれば、新参の方もおる。浅野家への思い入れに深さの深浅もござろうゆえ、各自がご自身で判断されよ。さきの江戸送りの返事で、相手の吉良上野介の生存の有無が判明するのは、早くても月末。ゆえに許された時は十分にある。これにて帰宅され、家族、親族ともども、今後の身のなり振りをご再考くだされ」

そこまで言うと、内蔵助は、藩士一同に深々と一礼して、騒然たる大広間を後にした。

一見、深刻そうな表情を見せてはいたが、

（これでどのくらい藩士が消えてくれるか。消えれば消えるほど残る藩士への浪人手当が増えて結構なことなのだが……）

内蔵助は、心の隅では、全く別の、したたかな計算をしていたのである。

9

それから二日――。

赤穂城から武士の姿がめっきり減った。

代わって殺到したのは、塩田の所有者や城の御用商人たちである。

元々、諸課税が高かった恨みもある。日頃、卑屈なほどぺこぺこ頭を下げていた彼らは、態度を一変。全くの「銭餓鬼」となった。

亡き主君に哀悼の言葉を捧げる者は、わずかに浅野家と内匠頭の妻阿久里の持参金から運用資金を借りている浜方（塩田業者）ぐらいのものである。それも、このどさくさに紛れて、できれば、この私的借金を棒引きにしようという魂胆ありあり。決して心からの哀悼とはいえなかった。

ちなみに、その借入金総額は五千四百七十両にのぼる。うち阿久里の分は凡そ二千両である。

その他の出入り商人は、藩札を持参し、口々に、殿様の江戸での軽挙を皮肉り、補佐すべき部下の無能を誹った。

中には、藩札を目の前に積み上げ、

「六掛け支払いなどという無法が許されてたまるか。きちんと全額払え」

と、居丈高にどなり散らす者も居た。

逆に、哀願調に窮状を訴え、

「せめて八割、いや七割は頂きたい」

と泣きつく者もあった。

いずれに対しても、内蔵助と九郎兵衛の二人はがんとして一歩も引かなかった。

二人は、これまでお家断絶となった幾多の家中で、藩札がほとんど紙切れになっている事実を人づてに知っていた。また、地元町人たちが、あくどいほどの利ざやを乗せて赤穂城に物を売りつけてきたことも熟知している。

だから、換金率は「六割でも御の字」と自信をもって言えたのである。

それでも、納得しない解らず屋には、内蔵助は、九郎兵衛と諮って、わざと空になった金蔵の扉を開いて見せ、

「我らの決めた換算率六割は、今後借りられる資金を最大限に見積もった上での皮算用でござる。時を経れば、いつ、借金の当てがはずれて、資金が枯渇せぬとも限らぬ。悪いことは言わぬ。お早めに換金された方が身のためでござるぞ」

と、開き直って見せた。

こうして、二十日、二十一日のわずか二日で、藩札の回収は山を越えることができたのである。

しかし、なかに才覚のある者は、藩札を買い集めて、これで阿久里からの借金の返済に充てる者もあった。それなら債務が自動的に四割分だけ棒引きになるわけで、こ

れだけは内蔵助も九郎兵衛もいかんともしがたかった。二人が藩札の回収を急いだのは、このためでもある。

藩札回収の一段落した二十一日夕刻――。

城から町人たちの姿が消えた後、内蔵助は、苦労をかけた大野九郎兵衛を自邸に招いて、この二日間の慰労を兼ねて夕食を共にした。

居室にささやかな宴を張った内蔵助は、まず、

「ご苦労おかけ申した」

と、本心から九郎兵衛に謝した。

「大野殿のご協力なくば、到底拙者一人では、この藩札処理という大難事は乗り越えられなかったろう。大野殿の才腕、肝に銘じまする」

「いやいや。礼を申し上げたいはこちらの方でござる。拙者も大石殿の、早期のご決断がなければ、ここまで確信をもって振る舞うことはできませんでした。しかし、お部屋さま（阿久里）の御貸付金の回収について、『藩札での借入れゆえ藩札の額面でお返し申し上げるのが筋』と言ってこられた時は、拙者、正直のところ肝を冷やしました。まさか、我らのとった六割交換率作戦を逆用されようとは思ってもみませんでし

たゆえ」

「まったくだ。明日からもそのような抜け道が拡がらぬように、一段と藩札回収を急がねばならぬ。明日からは、城の御金蔵前だけでなく、回収場所を町中に何ヶ所か置いて急がせよう。そうしないとお部屋さまに、もっとご迷惑がかかることになろうで」

内蔵助は、ご主君以上に奥方の阿久里に好感を持っていた。いつも、夫に隠れては、内蔵助や部下たちに、なにくれと江戸土産を託してくださる優しいお方である。

こんなこともあった。

夫・内匠頭が故郷赤穂で、癇気にまかせて侍女を斬り捨てた時のこと。人伝えに、この話を耳にしたのであろう。阿久里は、遠く江戸から内蔵助に丁重な詫び状と多額の見舞金を託して、夫に内緒で、侍女の両親の所に行くことを指示してきた。内蔵助は、喜んで、自分も相応の見舞金を付けて、この役目を果たした。

そんな内助の功を発揮される夫人である。

（今はさぞかし、殿に先立たれてお寂しくしていらせられよう。ご無念であらせられよう）

そんなお方のご持参金の運用に、一両たりともご損をかけてはならない。

とは思いながらも、すでに、昨日、今日だけでも、何百両もの損失をおかけしている。

そんな内蔵助の心中を察してか、九郎兵衛も、

「幸い、お部屋さまから借金のある奴らで返済を急ぐ者はそう多くございませぬ。あわよくば全額棒引きを、と決め込んでいるらしく、六割も払いたくないようでござる。今のうちに是非回収を急ぎましょうぞ」

と、早期回収に積極的な姿勢を示した。

だが――。

「どちらにしても返済無しか回収率六割。全く痛し痒しじゃな。お部屋さまに、これ以上大きな不義理にならねばよいが」

内蔵助は暗澹たる想いである。

「全く、辛い話でござるな」

と、九郎兵衛も顔を曇らせた。

九郎兵衛の場合は、主君に頼まれて、阿久里の持参金の有利な運用先として塩田業者を選んだ責任の一端もある。他人事ではなかった。

「まあ、しかし、ここで取り越し苦労しても仕方なかろう。今宵だけはその憂さを封

印して、一献いこうではないか。九郎兵衛どの」

「一夜の憂さ晴らしでござるな。よろしゅうござる。いきましょう――」

九郎兵衛もいける口である。差しつ差されつ、二人はしたたかに痛飲して我を忘れようとした。

しかし、そんな酒の味は苦かった。どちらからともなく、話はまたこの二日のボヤキに戻ってしまう。

「大石殿」

「なんじゃ、大野氏」

「大石殿は、この二日をどう、お感じになられたかは存じませぬ。が、拙者、藩札を引き替えながら、つくづく町人、地主どもの本心を知らされた思いがいたしましてな」

「ほう、どのような」

「彼らは、合戦もない今の世では、武士は只の無用の長物、はっきり言えば〈穀潰し〉としか見ていませぬな。これまで入れなかった城に初めてやってきたせいもござろうが、口を開けば、薄ら笑いを浮かべて、拙者の部下に向かい、『毎日なにをなさっておられるのですか』『退屈ではありませぬか』『眠い時はどうなさるので』といっ

た、人を小馬鹿にした類の質問攻めばかり。五万三千石の家中を失った武士は、彼らの目には、飼い主のない犬以下の存在としてしか映じないのではござるまいか」

そこまで言うと、九郎兵衛は、不意にぼろぼろと涙を流した。

九郎兵衛は「泣き上戸」だった。

だが、内蔵助は笑えない。九郎兵衛の掻き口説きに返す言葉を知らなかった。部屋は違っていたが、全く同じ思いを、別室で、砂を噛むような気持ちで味わっていたからである。

一体、武士とは何なのだ。

働くことも知らず、「忠」だの「義」だのという化石のような言葉を弄ぶだけで、いい気になっていたのではなかったのか――。

（笑止の沙汰よ）

自嘲がこみ上げてきた。

内蔵助が、泥酔した九郎兵衛を、護衛の下侍をつけて送り出したのは、この夜、九つ（十二時）過ぎである。

門外まで九郎兵衛の肩を抱くようにして見送った内蔵助は、妙に醒めていた。

そのまま床につかず、書斎に入った。
ひとしきりの思案の後、ふと思い立って筆を取ると、一通の手紙を認めた。
宛先は石清水八幡宮の法印大西坊。
大西坊には、内蔵助の曾祖父大石良勝が居た縁もあって代々大石家から住持が出ている。当時の住持は内蔵助の従弟で証讃である。

急ぎお手紙を差し上げます。こちらの事情については、すでにご承知のことと拝察いたします。我々としては〈降って湧いたような話で〉どうしようもない次第でございます。どうか我等家中一同の〈苦悩の〉心底をお察し下され。

赤穂城下を立ち退かねばならぬ事情については、すでにお聞き及びでございましょう。何処にでも引っ越す気持ちでおりますが、何処といって心当たりもなく困惑しております。

それについて、そちらの近辺か、山崎辺りか、山科辺りか、こちらは上下十四、五人ぐらいおります。上方は不案内でございます。それに浪人などの住所として好

い所か悪い所かの判断もつきません。この点も御考慮下さい。伏見か大津あたりでしょうか。それとも貴僧に近い所でしょうか。是非ご返事給わりたく思います。以上

弥生二十一日（元禄十四年）

大石内蔵助（花押）

大西坊
西の坊
専成坊

城中あるいは地元菩提寺で、藩士たち一同に自決を――、と訴え、一方で石清水八幡の住持に秘かに赤穂からの移転先を探してもらう気になった内蔵助の心中は複雑だった。

しかし、この手紙で、内蔵助が主君の復讐を思い立ったとするのは、時期として早計である。

復讐の相手があるとすれば、それは痞を病む主君に、理不尽な切腹を命じた幕府である。

吉良上野介ではない。

この点、内蔵助は、感情に走らず、あくまで冷静だった。

かと言って、もちろん、藩士たちを置いて逃亡を図る積もりは毛頭ない。

だが、藩士たちに宣言した「自決」の気持ちが、この夜、この手紙を書いている間だけ、ほんの瞬の間ではあるが、揺らいだことは確かである。九郎兵衛と酒を酌み交わした時、ふと抱いた、武士に対する自嘲の気持ちがそうさせたのである。

「武士の一分」などと深刻ぶっていた自分に、つくづく愛想が尽きた。そんなことのために死ぬことが馬鹿ばかしくなったのである。

浅野家は、できれば大学さまに、このまま家臣を路頭に迷わせることなく跡を継いで戴きたい。

しかし、己れは、これを機会に、武士のような詰まらぬ存在を止めたい。

望むのは、ただ〈世捨人〉になること——。

——願わくば人間の事を棄て、赤松子（仙人の名）に従って遊ばんと欲するのみ

内蔵助の好きな『史記』の張良の言葉である。ここに漠として求めていた「第三の道」があるような気がした。

（では、どうしたらいいか）

手紙を書き終わった内蔵助は、寝床に、ごろりと大の字に寝転がると天井を睨んだ。

内蔵助が、これまでの「自決一辺倒」からの作戦の大変更を、真剣に考え始めた一瞬である。

だが――。

そんな〈甘美な夢想〉を吹っ飛ばすような狂気の風が、江戸から、まもなく吹いてくることを内蔵助は知らなかった。

第四章　大石内蔵助（くらのすけ）周辺　元禄（げんろく）十四年晩春

1

三月二十二日からの数日――。

「第三の道」を模索する内蔵助の元に、江戸、大坂の情勢が続々と入るようになる。

この影響で、内蔵助の心に、さざ波のような「ゆらぎ」が生じた。

三月二十五日。

江戸詰めだった菅谷半之丞（すがやはんのじょう）（馬廻・郡代、百石。四十二歳）が帰国。その来訪が、まず

藩外情勢を知る皮切りとなった。

「お暇乞いに、お部屋さま（阿久里）を赤坂今井のご実家にお訪ねしました。なかなか三次家からのお許しが得られなくて、やきもきしましたが、ようやくご挨拶だけということでお目にかかれました。その折り、帰りがけに、侍女の一人から、ご家老にご内密にと、この手紙を――」

お部屋さまの親書であった。

お部屋さまからは、これまでも土産物をいただく都度親書を頂戴していた。だが、夫の内匠頭に知られたくないため、すべて実家の三次家経由であった。赤穂の家臣に直接託した、お部屋さまの親書は、これが初めてである。

内蔵助は押し頂いて読んだ。

この手紙によって、お部屋さまが、二十八歳の若い身そらで落飾（髪をそりおとし、仏門に入ること）、「寿昌院」を名乗った事実を知った（五七忌＝三十五日忌ののち、将軍綱吉の生母桂昌院との類似性をはばかって瑤泉院に変名）。さらに、薄墨で大きく書かれた主君内匠頭の戒名を教えていただいた。巻紙のこの部分だけが、やけに広い空間をあけてあった。

冷光院殿前少府朝散大夫吹毛玄利大居士

三度押し頂いて拝誦。

生前は、主君とは、なんとなくしっくりいかなかったが……、いざ切腹されたとなると、さすがに万感せまる思いで、胸が締め付けられた。

すぐにでも、寿昌院さまの所に飛んでいってお慰め申し上げたい。だが、赤穂を離れることは、大学さまからの手紙で堅く禁じられている。

今は、どうしようもなかった。

刃傷事件について寿昌院は、次のように触れていた。

相手の吉良上野介が「存生（存命）」であること。

その傷が浅手で、上野介が一切抵抗しなかったことを幕府から「神妙」とされ、「将軍から懇篤（丁重）な見舞い」まで賜ったこと――。

（高家は文を尊び武を蔑視する家系。刀を抜かなかったのは当然ではないか。別に褒められることでもなかろうに――。それとも、あの老人め、驚愕のあまり腰でも抜かしたか……）

内蔵助は小首を傾げただけで、吉良に関する記述には、これといった感慨はなかった。

それよりも、寿昌院が、吉良上野介のその後の事情を、あまりにも淡々と書いて寄越したことに奇異を感じた。どこかに、ご自分の気持ちを抑圧しているような無理がある。

「これだけか」

と、内蔵助は半之丞に念を押した。

「はい」

「この他に我等への伝言などは、なにもなかったか？」

「ございませぬ」

「ということは、殿には、今際の折り（最期）に、遺書も遺詠も残されなかったということになるが――」

「残念ながら、そのように思われまする」

事実なら情けない。

だが、そんな筈はないと思った。

あの生真面目な、世の仕来りを、なによりも大事になさる殿が、今際の折りとはい

え……、と言いかけて内蔵助は口を閉ざした。

半之丞は、直接、寿昌院さまからお声を掛けて戴けるだけで恐懼感激、顔も上げられないような小者である。そんな立ち入ったことまで問い質せるわけがない。

訊く方が無理なのかもしれない。

しかし、殿が〈理由なき狼藉〉に及んだのなら、愛妻の阿久里や我々部下に、一言詫びがあってしかるべきだろう。理由があるなら、なにか弁明らしきものがなくてはならぬ。

そのどちらもないのは何故であろうか。

だが、これ以上半之丞を追及しても始まらない。

「ではやむをえぬ。ご苦労おかけしたな」

内蔵助は、ここで打ち切ろうとした。ところが、半之丞の方が、逆に食い下がってきた。

「しかし、ご家老。御公儀も、御公儀ではござりませぬか」

「なにがじゃ」

「なにが、ではござらぬ。此度の事件の処置でござる。我が殿は、問答無用で即日のご切腹。しかるに相手は、聞くところでは、全くお構いなし。それも手厚い看護を受

けるなど、あまりにも不公平なお裁きではござらぬか」

半之丞は、これが言いたかったらしい。

しかし、内蔵助は答えなかった。

余計なことを言えば誤解を招く。

それでなくとも、我々は――表向き徳川家の譜代大名扱いされているとはいえ――実体は元豊臣家の外様大名の家臣。幕府から、とかく疑惑の目で見られる身である。

部下たちは、この自覚がなさすぎる。

現に、お部屋さまは、夫・内匠頭が、これほど冷酷な処置を受けながら、幕府の対応に、なに一つ恨みがましいことを書いてこられなかったではないか。

この時知る限りの知識では、内蔵助には、あからさまな「幕府批判」まではできなかった。

内蔵助は、そこまでとし、半之丞を下がらせた。

と――、翌二十六日。

入れ替わるようにして、大坂の留守居役の岡本次郎左衛門（四百石）がやってきた。

内蔵助が、自邸の黒書院に通すと、挨拶もそこそこに、岡本は訊ねてきた。

「ご家老は、お城にて全員の自決とお決めになられたとか……」
探るような眼が細く光る。
内蔵助の嫌いな、ずる賢い眼である。
「うむ」
とだけ言って内蔵助は黙した。
岡本は、年の頃は五十過ぎ。如才ないが軽薄、いまひとつ信用できない男である。
余計なことを言ってはならない。
しかし、この男、早耳だけが取り柄であった。
ふと、思い直して、
「此度の事件、上方の町衆はどのように噂しているかの」
こちらから探りを入れてみた。
と、案の定――。
「それはもう……」と、岡本は、鼻をうごめかしながら乗ってきた。
「いまだに、上方は、権現様（家康）より太閤様（秀吉）の方が人気のある町でござれば……」
「そうだったな」

内蔵助は小さく笑って頷いた。

この岡本から聞いた話がある。

大坂では八月十八日の秀吉の祥月命日、徳川幕府の命令で参道を封鎖された筈の豊国社への民衆の密行夜参りが、今も後を絶たないという。

太閤さんあっての大坂。それだけに百年以上経った今も、旧豊臣方に同情的なのであろう。

岡本は続けた。

「それゆえ赤穂への此度の不公平なご処置も、町衆は、将軍の外様潰し戦略の一つではないかとの噂しきりでござる」

「ほう、これも戦略でござるか？　初めてお聞きしましたな」

と、内蔵助は、とぼけてみせた。

「つまりですな、幕府は、わざと赤穂浅野の家来を怒らせ、ご本家ともども浅野十家を一挙に改易に持ち込もうとしているというわけですわ」

したり顔の岡本。

しかし、内蔵助は、なお、乗らなかった。

「なるほど、なるほど。町衆の噂、有り難いご忠告と肝に銘じておきましょう。され

ど、此度の柳営さま（幕府）のご処置を、そこまで邪推するは、いささか考え過ぎのようにも思いまするが……」

と、言葉を濁した。

今の内蔵助には、これ以上のことを話す積もりはなかった。

まだ物間いたげな大坂留守居役との会見を早々に打ち切った後、内蔵助は、庭のあじさいの、漸く開きかけた萼の淡い青色を眺めながら、一人思案に耽った。

（もし、上方の町衆が、岡本のいうように外様大名の家臣である我々に、それほど好意的なら――、そんな町衆を味方に引きつけて、将来、幕府と〈お家再興交渉〉を計るのも一つの手だな）

そう思うと、さらに、この事件をお膝元である江戸の町衆がどう見ているのかが、無性に知りたくなった。

江戸の一枚摺（後の瓦版）屋では、この事件を、どう扱っているのだろう。誰か、俺の手足になって江戸の噂を探ってくれる者はいないであろうか……、この思案の先に浮かんだのが、関白近衛基熙とその手先となって働いていると噂される八瀬童子の利用であった。

内蔵助の思考の背景にあるのは、浅野家と朝廷との浅からぬ関係にある。

藩祖浅野長政が、天皇尊崇の念の厚い太閤秀吉の縁戚であったことはもちろんだが――、直接的には、内匠頭の祖父長直時代の寛文二年（一六六二）、浅野家が、その前年焼失した御所の造営費を進んで分担したことにある。

この決断には、「天照大神に対する信仰こそが兵学の根本原理である」とする山鹿素行の薫陶が絡んでいる。

このために、赤穂城の天守閣の造営費が捻出不可能となった、とまで言われる大負担となった。

ちなみに、この出費の内訳は次のとおりである。

御所再建規模　総坪五千五百坪
工人延べ数　五十一万人
費用　二千四百七十七貫
米　二万二千七百九十七石

これに対して幕府の御下賜金は、わずか三百四十二両に過ぎない。
赤穂の自己負担は、推定六万四千両。現代時価にして六十四億円に達する。
以来、なにかと朝廷とは関係が深い。
特に大石家は、その出自である近江・大石郷（現大津市）で、近江の守護佐々木氏の下司職（荘園管理役）を務めた関係で、五摂家筆頭の近衛家と個人的にも接触があった。
しかも、内蔵助の曾祖父良勝の母志茂は、近衛基熙の四代前の近衛前久の娘でもある。
（一度、関白さまにお願いに行ってこよう。あわせて此度、御勅使の見たままの刃傷事件のご見解も聞きたいもの……）
と、この時、ふっと、思ったのである。

2

続いて二十六日夕刻——。
第三の使者が江戸からやってきた。

片岡源五右衛門（側用人・三百五十石・三十五歳）
田中貞四郎（側用人＝手廻者頭・百五十石・生年不詳）
礒貝十郎左衛門（物頭・側用人・百五十石・二十三歳）

いずれも中堅藩士。内匠頭が好んで江戸に連れていった硬骨漢ぞろいである。すでにこの時、亡君の霊を慰めるために三人とも剃髪していた。

それだけに意気込みが違う。これまでの二組のように、軽くあしらえる相手ではなかった。

三人を黒書院に招じると、内蔵助は、余人を退け、腹を据えて三対一の密談に入った。

礒貝十郎左衛門が、冒頭、事件発生当時の江戸藩邸での経過をつぎのように述べた。

「殿中の刃傷が勃発したとき、拙者、建部喜六、中村清右衛門と、主君に扈従（お供）して大手下馬先にて供待ち申してござる。待つうちに玄関前が急に騒ぎ立つので、何事ならんと思う間もなく、お目付殿が、お顔を真っ赤にして飛んでこられた。聞いてみると、なんと、我等が主君内匠頭さま刃傷とのこと。足下ら（お前たち）は、即刻屋敷に引き下がって謹慎せよ、との厳しいご命令で、我等、追い立てられるようにして鉄砲洲の屋敷に立ち戻り、次のご沙汰を待ち申し上げた。が、待てど暮らせど、

なんの指示もござりませなんだ」

そこまで言うと、ちらりと先輩の片岡の方を見やった。

（ここから先はどうぞ）

という意味だろう。どうやら、あらかじめ、話の分担を決めてきたらしい。

「さればでござる、御家老殿」

と、片岡は大きく頷いて、膝を乗り出した。

「礒貝殿と共に待つこと二刻（四時間）あまり。ようやく田村右京大夫邸から、呼び出しがござりました。が、なんと、その口上は、〈当家にて浅野内匠頭切腹のことなれば、事の済み次第、直ちに遺骸の引き取りに参られよ〉とのこと。まさに《青天の霹靂》。それも一方的な、高圧的な宣言でござったので、我等、一時は怒り心頭に発し、爆発寸前にまでなり申した。鉄砲洲に詰めておられた大学さまの、必死のおとりなしで、ようよう気を鎮め、我等、夢中で田村邸に駆けつけましてござる。のう、各々方、そうだったな」

「そうじゃった、そうじゃった。あの時は、走りながら、悔しゅうて、情けのうて、涙がとまらんかったわい」

礒貝と田中は、顔を見合わせ、思い出し涙で、うなずき合う。

気持ちは解る。が、今から、部下と傷をなめ合っていては話にならない。
「では、続いてその後の田村邸での様子を――」
内蔵助は、情を殺して次を促した。
今度は礒貝が語った。
「田村邸には、江戸詰めの我等全員が行く積もりでござったが、殿の身柄を奪還される危険でもあると思ったのでござろうか、田村側が承知しませぬ。やむなくこの三人の他に、糟谷（勘左衛門）、建部（喜六）、中村（清右衛門）だけが認められてござる。しかし、行ってみると、六人とも体よく庭の離れの茶室に閉じこめられ、周りを家士どもに囲まれて、殿との接見はおろか、屋敷内の移動すら叶わぬ始末。そうこうしているうちに、邸内で、なにやら大騒動が持ち上がりましてな」
「ほほう。一体何が起きたのじゃ。申せ」
内蔵助は、三人を交互に見つめて促した。
「それが、まっこと、けしからぬことでござってな、御家老」
「早く先を――」
「なんと、殿のご切腹の場所を何処にするかで、内輪同士、大もめに、もめ始めたのでござる。いや、我等がその場にいたわけではござらぬ。が、いやでも拙者らの居る

茶室まで口論が聞こえてきましたのじゃ、その怒鳴り声の応酬が……」

「怒鳴り合うてまで争ったか。で、いずれで切腹せよとの論争でござろうや」

さすがの内蔵助も、そんなことで怒鳴り合う意味が想像できない。

「なんと、役向きのお一方が、庭先で切腹を執行せよと主張し、もうお一方は、庭先などとんでもないこと、大名は大名らしく、邸内のしかるべきお部屋を用意して執行なされよ、と反対したのでござる。挙げ句には、お二方は取っ組み合いの喧嘩にまでなりましてな」

「誰と誰でござろうか、お名前をご存じかな、片岡殿」

内蔵助は、三人の中では筆頭格の片岡源五右衛門を指名して訊ねた。

ここで片岡が再び進み出る。

「はい。拙者も、この時は、はっきり判りませなんだが、後に手を回して聞き出しましてござる。庭先での執行を主張されたは、大目付庄田下総守さま。対して自邸内で丁重な執行を、と主張されたは、目付の多門伝八郎殿でござりました」

「ということは、庭先を主張した庄田の方が役柄は上位ということか」

「はい。しかし、柳営にては、大目付と申しても、目付に対する直接の指揮権はござりませぬ。目付は独立の役職でござれば、論争は延々明け近くまで続きましてござる。

だが結果は、庄田さまが大名への指揮権を盾に、田村右京大夫殿に命じて、己れの主張どおり、お庭先に幔幕を張っての執行となりましてござる」

「なに、お庭先だと！」

内蔵助は、唖然とした。

「しかも小書院の庭に、急造の木台、白縁の畳。周囲を幔幕で覆って、血の飛び散らぬように油紙の障子で囲う念の入れようでござった」

屋内で行えば、そうした〝不浄〟な屋敷は取り壊さねばならない。田村右京大夫にとっては、庭先の方が金がかからなくて好都合。そんな思惑もあったかもしれない。いずれにしてもけしからぬ。五万三千石の大名の遇し方ではない。

「月番老中はなにをしていたのじゃ！」

大名の切腹ともなれば、老中も検使に加わっていた筈、と思って内蔵助は念を押した。

「土屋さまは、見て見ぬふりだったようでござる」

片岡が、苦り切った顔で答えた。

「ということは……」

さすがの内蔵助も、ここまできて、思わず声が上ずった。

「……殿は切腹に際し、士庶人（一般人）の扱いを受けたということか！」
「さようでござる、御家老。殿の御屈辱いかばかりだったかと思うと、我等一同、今も――」
三人は、ここで、とうとう堪えきれず号泣した。
（そうか、そうだったのか。殿はそこまでの辱かしめを受けられたのか）
初めて知った。
内蔵助は、一瞬、胸が黒雲に包み込まれる思いになった。が、なお自分の気持ちを抑え込むと、
「で、このこと、お部屋さまはご存じか？」
と、話を意識してそらした。三人の男泣きを、なんとか止めねばならなかった。
「いえ、あまりにもお気の毒で、ご報告いたしかねております。まだ我等側近の数人しか知らぬことでござる」
片岡が内蔵助の誘導に乗った。
「よかった、よかった。それでよい。以後もお知らせするでないぞ。家中の者にも言うな。しかし……、殿のお庭先でのご切腹は、老中からのお達しであろうかの」
内蔵助は、もう一つ、話の輪を拡げてみた。

「いえ、庄田さまの独断でござる」
「なぜそう言える」
「それは、殿の初七日を終えて我等が江戸を立つ頃に聞いた噂ですが、庄田さまは、庭先での刑の執行を知った側用人筆頭の柳沢殿のご不興を買ったようだ、罷免も免れまい、とのことで」
「そうか」
幕閣にもそのような男がいたか。
（かねてから、〈柳営一の阿諛男〉と評判が悪い柳沢だが、案外なところがあるものだな）
というのが、この時の——柳沢に対する初印象となった。
最後に、
「他になにかあるか」
と、三人を促した時、田中と礒貝が、
「片岡殿、あれをお忘れなく……」
と向き直った。
片岡は、あわてて——と見えたが、これも打ち合わせどおりだったのかもしれない

――胴巻の奥深く油紙に巻いて蔵していた書き付けを出し、

「おお、そうだ」

内蔵助の前に、まずその一枚を差し出した。

「なんじゃ、これは？」

「殿のご遺言……と思われます。もう一枚は遺詠のようでござる」

続けて、もう一枚を横に並べた。

「なんだと！　やはり殿には、ご遺言や遺詠があったのではないか。愚か者！　なぜもっと早く余に出さぬのじゃ」

「それが実は……」

「実は、も団扇もないわ」

内蔵助は、かっとなって、まくし立てた。

「それに〈思われます〉などと持って回った妙な言い方をするな。さっさと二つとも出してみせい。気の利かぬ奴らめ」

本気で怒った。だが、

「そこでござる。ご家老のお怒りは一々ご尤もなれど、そこには、かくかくの……」

片岡は、こう前置きしながら、次の事実を語り始めたのである。

3

浅野内匠頭の切腹は、三月十四日明け方近い（現在の十五日早朝）七つ過ぎ（午前四時半）、田村邸の庭先で執行された。

執行の直後、浅野家の家臣六人は、初めて許されて庭先に入った。あくまで遺体引き取りのためである。事実、六人は、まだぬくもりのかすかに残る内匠頭の遺骸にすがりつき、あるいは身首二つに引き離された殿の御首を抱きかかえて、ただただ無性に男泣きするばかりであった。

この時、暁闇（夜明け方の闇）の中から、秘かに片岡の片袖を強く引く者があった。身の丈六尺近い大男。

男は、庭の片隅の四阿を指さし、片岡一人を引きずるようにして誘ったという。

片岡は、なにやら面妖な気がしたが、導かれるままに、庭の隅の四阿へ……。

そこで男は、そっと「目付の多門伝八郎」を名乗り、この書き付けを渡した。

渡しながら多門は、口早に囁いたという。

「庄田殿と田村右京殿の厳命で、貴公らのご主君は、一切遺言など残してはならぬ身

とされましたのじゃ。だが、これは、あまりにも温情なき処置。せめてもの武士の情けと思い、拙者、役目柄を利して浅野殿に近づき、口伝にて、この遺言と遺詠を承った次第でござる。遺言は、片岡殿と礒貝殿宛てとのご指名でござったゆえ、そなたを呼んだのじゃ。拙者、しかと聞き取った積もりなれど、多少の誤りがあれば、事情が事情だけに許されよ」

それだけ言うと、さっと消えたという。

その後、三人は、田村邸で髻を切って剃髪した。

ところが――、と、片岡の話は続く。

「殿の初七日が終わり、こちら赤穂に参るに当たって、先夜のお礼にと、身を町人風に装い、夜陰多門殿を役宅にお訪ねしてござる。しかし、玄関に出てこられたのは、先夜の大男とは似ても似つかぬ小男。拙者の話を聞くやいなや、『そのようなことは拙者の全くあずかり知らぬこと。あのとき、確かに大目付殿とは言い争いを演じたが、浅野殿と話などしてはおらぬ。あの場でできる道理もなかろう。どこぞのだれかが、拙者の名を騙ったのであろう。役目柄、迷惑な話じゃ。とっととお帰りくだされ』と申され、我等、ほうほうの体で退散仕った次第」

「ほほう。ということは……」

「これは、書き人知らずの遺言と、詠み人知らずの遺詠でござる。文字も稚拙で、到底目付殿のものとも思われませぬ。偽作かもしれませぬ。が、是非、ご家老にご判読ねがいたいと思い、かく持参申しました」

片岡は、弁明を終えると、やれやれといった表情で肩を落とし、涙と汗に濡れた顔を拭った。

どうやらこの書き付けの処置が、三人の一番の重荷だったらしい。

「事情あい解った。怒ったことは詫びる。では、即刻読ませて頂くとしよう」

内蔵助は、漸く得心がいった。

（多門という男、なかなか味なことをやるわい）

と、思いながら、まず遺言から開く――。

どうやら片岡と磯貝に宛てたものらしい。横に、次のような走り書きの付言がある。いや全体が、乱暴な走り書きであった。

おそらく、多門は、言われるままに、手暗がりの中で書き留めたのであろう。本物に違いない。

まずは、その付言――。

この儀は家来片岡源五右衛門、礒貝十郎左衛門と申す者に相伝（あいつた）えるようにとのことある。

以下が、その本文（現代訳）である。

これまでのことは、かねてから知らせようと思っていたが、今日、せっぱ詰まったことなので、知らせることができない。不審に思うかもしれぬが。

そこまでである。意味皆目不明。

しかし、内蔵助は雷に打たれたような衝撃を受けた。内容についてではない。これだけの言葉では、内容は全く理解できない。が、衝撃は、むしろ内匠頭の語っている姿勢にあった。

（この言葉どおりなら、殿は平静、心身健全。まともであらせられた。殿の行動は「痞（つかえ）」による衝動ではなかったのでは――）

なまじ、主君の持病を知っていただけに、その先入観から、殿の行動のすべてを「癌」からの発作と断じてきた自分。

なんと浅はかだったことか――。

内蔵助は、初めて自分の愚かさを思い知らされた気がした。しかし、この慚愧の念（申しわけない気持ち）は、もう一つ推理の飛躍につながった。

（ということは――、真の理由は解らないが、殿は「本当に怒って」おられたのだ。そして思いあまって、城中の抜刀禁止令を百も承知で、小さ刀を抜かれたのだ）

この推理は、さらに飛躍した。

（しかし、それなら、なぜ仕損じられたか？）

武辺好みで、剣道の鍛錬を欠かさぬ主君。

ご正常なら、小さ刀とはいえ、無抵抗な老人相手に失敗するような生兵法ではない筈……。そこまできて、急ぎ眼を二枚目の遺詠に転じた。

風さそふ花よりもなほ我はまた
　春の名残をいかにとかせん

とある。

歌そのものは、今際に武士が遺詠として残すものにしては感傷過多。むしろ稚拙である。

しかし、そんなこととは別に、内蔵助は、下の句の「春の名残をいかにとかせん」を、一点凝視して動かなかった。

（《春の名残》に掛けた殿の心残りとはなにか！）

内蔵助は、目を瞑って、殿の心中を懸命になって探った。

（吉良を討てなかったことか？　いや、それだけではあるまい。吉良の存生如何については幕府は教えなかった筈だ。あるいは目付の多門なら、死んだ、と嘘を教えて、殿のお気持ちを慰めたかもしれぬが……）

では、なんであろう？

（もしかして、それは遺言にある《かねてから知らせようと思っていたが、今日、せっぱ詰まったことなので、知らせることができない》を、念頭においたものではなかったか。となると……、殿は、言いたくて、言いたくて、たまらないなにかが、胸の内につかえておられたのだ。それも、幕府から受けたであろう訊問の際には、決して口に出してはならないなにか――、ということは、幕府の御政道に関するものではな

いのか。それが、文字どおり痞の持病を誘発した。場所柄を弁える余裕すらないままに……）

そうだったのか！

知らなんだ！

内蔵助は、天を仰いで自分を責め続けた。

「片岡！」

と、内蔵助は遺言と遺詠を鷲づかみにしながら、絞り出すような声で叫んだ。

「はい」

片岡は内蔵助の剣幕にぶるぶると震えている。

「この件に関して、ちと訊ねたいふしがある。しかと包みなく申せ。よいか」

「はい」

「まず、弥生十四日までの殿の行動じゃ」

「と申されますと？」

「ご饗応の指南役である吉良上野介との接触は、いつ頃でござったかな」

「如月（二月）中・下旬でござる。拙者ら江戸詰めの者二十人ほどが、その都度、呉

服橋の吉良邸までお供仕りました」
「その都度？　というと、何度も通ったのか」
これも初耳だった。
「如月の中・下旬から都合四度ほど。実にご熱心に通われましてござる」
「その間、なにか変わったご様子はなかったか」
「特にお変わりの所はござりませなんだが、最後の方は、鉄砲洲屋敷に戻られると、疲れた、疲れたと、お部屋さまや侍女におこぼしになられ、なにやら、ぶつぶつと独り言までいわれていた、と聞き及びましたが……」
「そうか」
内蔵助は頷いた。特に具体的な収穫はなかったが、「吉良との間に、なにかがあった」に違いないとの確信を得た。
部下が知らないのは、殿が弱みを見せるのを嫌われたからであろう。となると、殿の素顔を知るのは誰か？
お部屋さましかいないことになる。
（会いたい、お部屋さまに――、そして、そのご本心を、お聞きしたい。恐らくお部屋さまは、殿から、なにかを、お聞きになっているに違いない。柳営（幕府）の者に

は言い出せなかった、なにかを……）

痛切に、そう思った。

「次に、もう一つ訊ねる」

内蔵助の言葉は、無意識のうちに、さらに厳しくなる。

「なんでございましょうか」

片岡は、身を縮めていた。

「殿は、刃傷に及んだ時、誰かに邪魔されたのではなかったか。知らぬか？」

「さて、どうでございましたか。誰も我等には、事件の仔細を語ってくれませぬので、拙者は存ぜぬが……、いかがか各々方は」

「あいや」

と、ここで田中が膝を乗り出した。

「拙者の仄聞した話でござるが、先程、片岡氏も申されたように、例の庄田殿は柳沢殿の不興を買われたよし。いずれ解任では、との噂でござる。ところが、事件がらみで加増に与った者がいたと聞く。それかもしれぬな。それも二名だとか」

「一人は多門殿か」と、片岡。切腹の屋外執行に抵抗した功、というわけであろうか。

「いや違うな。もっと身分の低い者じゃった。が、拙者興味がないので、それ以上は

聞き漏らした。しかし、一緒に聞いていたのは堀部安兵衛じゃ。あの男は、記憶力抜群じゃで、それらの名前も知っておろう。間もなくやってくるので、いずれ判明しよう」と、田中。

聞いていた内蔵助、危うく、

（なに！　あのあばれ馬が後から来るのか）

声を上げるところであった。

堀部安兵衛（馬廻、二百石、三十二歳）。

学識も教養も家中では抜きんでているが、問題は性格。人呼んで「喧嘩安兵衛」といわれるくらい直情な単純男である。一度こうと決めたらテコでも動かない、コチコチ頭の武辺者。

それだけに主君の最大のお気に入りであった。

逆に、内蔵助にとっては、家中一番の「御しがたい悍馬（あばれ馬）」であった。

（それが、この三人を後押しするようにやってくるのか――）

内蔵助は、もう一つ厄介事を背負い込んだ気になった。

「で、堀部はいつ頃当地へ」

何気ない風に訊ねる。

「いや、卯月（四月）に入ってからであろう。あの様子では……」

と片岡。

「あの様子では？　とは、如何な意味じゃ」

「実は、堀部の奴、最初は、拙者らと一緒に来る積もりじゃったが、どうにも此度の柳営の片落ちの処置が気にいらぬ、と直前になって吐かしよって、最後は、俺は行かぬ、と申しておった。仕方なく置いて参ったわけで」

他の二人も、これに無言で頷いた。

「片落ち？　なにが気にいらぬのじゃ」

内蔵助は、わざととぼけて訊いた。

「堀部は、此度の処理について幕府に抗議したいと申したのでござる。殿は切腹、相手の吉良は褒められるでは、殿も我等も立つ瀬がない。如何になんでも不公平じゃ。俺の抗議に幕府から返事がなければやむを得ぬ。その腹いせに吉良邸に押し入って上野介と差し違えて死ぬまでよ、と……」

「まさか！　本気ではあるまい」

内蔵助は一笑に附そうとした。

が、喉が涸れて笑いにならない。

内心ぎくりとなったのである。

（あの男なら、そんな腹いせもやりかねぬ。腕もたつと評判じゃ。一人、暴走しなければよいが……）

4

三月二十七日昼四つ（午前十時）。

内蔵助は、急遽（きゅうきょ）、家臣の総登城を命じた。

家中の意見を早急に統一しておかなくては、堀部のような暴走男が出てくる危険がある。これを未然に阻止しなければならない。

それに、時間稼ぎに江戸に送り出した使者の目的であった吉良の安否の確認は、お部屋さまからの手紙で、帰りを待つまでもなくなっていた。

一方、本家への借財申し込みの方は、あっさり拒否されて終わった。

この二つの結果報告が必要である。

なお、この間の渉外活動の唯一（ゆいいつ）の収穫は、お部屋さまの実家三次（みよし）家の対応だけである。

第一が赤穂の藩札の回収に当たり、その信用を維持するために必要なら、三次家で裏保証をしてもよいとの好意ある回答があった。

さらに三次家中を流れる赤穂の藩札を自己責任で消却してくれるというのである。どのくらいの額を買入消却してくれることになるのかは不明だが、ともかく、その分だけこちらは手許資金に余裕ができるわけで、内蔵助にとっては、涙の出るほど有り難かった。

こうした事情をふまえての総登城劇・第二幕の幕開けとなった。

出席者は、若干減りはしたが、依然二百五十人を超えていた。内蔵助は、後から後からやって来る家中の者を眺めながら、秘かに舌打ちした。

（どいつもこいつも……、最後の分け前欲しさにやって来おってからに――）

藩札の六割切りや三次家の藩札の自己消却などで、手許資金に余裕ができた――、となれば残余財産の分割に我々も与らねば損だ、という憶測が、大野あたりの口を通じて家中に流れているらしい。

（大野も口が軽いな。よし、それならこちらにも考えがある――）

内蔵助は、一時考えた「第三の道」探しを、しばらく延期することに決め、なにが

なんでも自決を前面に押し立てる方向で大広間の評定に臨んだ。

内蔵助は、大広間一杯に埋める家中の静まるのを待って、

「各々方――」

と一同を睥睨した後、いきなり高飛車に出た。

「――前回の総登城による評定から六日がたち申した。が、今日、かくも多数の方々にご参集頂き、城を枕に自決せんという拙者の意見に、ご賛同戴けるとは……、正直のところ夢にも思わなんだ。この大石、涙の出るほど嬉しゅうござる」

と、ぬけぬけと言って出て、まず反応を見る。

頷く者。

苦虫を嚙みつぶしたような顔をする者。

あるいは、きょとんとして内蔵助の顔をのぞき込む者。

ばらばらである。

だが、じっと観察すると、そんな家中に、これまで見たこともないような者が、何人か混じっていることに気付いた。

いずれも、畳敷きの場所を避けて、廊下近くに目立たぬように座り、両脇の者と碌

に話もしない。ひたすら内蔵助だけを見つめて動かないので、こちらから見ていると、いやでも目に付く。

集まる家中の者は、頭がカッカしているせいで気がつかないが、内蔵助の方からは、すべてお見通しだった。

密偵！

そうに違いない——と思った。それも一つや二つの集団ではなさそうだ。

幕府の黒鍬組？

朝廷の八瀬童子？

いや、それだけではない。すくなくとも三集団いた。となると将軍綱吉を目の敵とする甲府宰相綱豊の手の者——かもしれない。

我等を煽動して事件を拡大し、将軍綱吉を失政に追い込む。その上で将軍職を早期に奪う。

容易に考えられる想定だった。

（いずれにせよ、しゃべる内容は要注意だ。籠城抗戦など刺激的な発言は、一切慎まねば……）

内蔵助は、言葉をゆっくり選びながら喋ることに決めた。

「しかし、この自決決行については、いずれ、江戸よりの城受け取りの使者が参るゆえ、その日と合わせて決める所存なれば、なおしばらくのご猶予を願いたい。その間、親子・兄弟あるいは親族などとの水盃なども交わされ、ゆるり気を鎮めて待たれるがよろしかろう」

自決の決意を既成事実化する。と同時に、これなら密偵の警戒心も緩むだろう。

だが、言い終わると同時に、

「ご家老！」

という怒号が、あちこちから上がった。江戸から来た初参加の三人は、一番前に陣取って、血相変えて立ち上がろうとしていた。

「我等は門外漢。そのような決議は与り知らぬこと」とでも言いたいのであろう。

「静かにせんか！」

内蔵助は、声を荒げて一喝した。

「各々方。質疑のほどは、後にせい。拙者これより報告したき儀がござれば、それが終わるまで私語は許さぬ。慎まれよ！」

内蔵助は、ここを先途と全員を睨みつけながら、次に、一転、優しい口調になる。

「まず、ここに手紙が二通ござる。この話から申し上げたい。一通は拙者に対するお部屋さまからの御親書でござる」

内蔵助は、横に置いた文箱から手紙を出すと、これを押し頂くようにして語った。

「この手紙で、拙者、お部屋さまが、殿のご切腹の後、直ちに髪を下ろされ、寿昌院を名乗られたことを知り申した。三次家に戻る前のご決断じゃ。解るか。心は赤穂の者として残るというお気持ちの表れじゃぞ。今は、身はご実家に帰られ、静謐のうち（静か）に殿のご冥福を祈っておられるが、御心は我等と共にある。我等もまた、そのお気持ちを察して、今日の評定に入るに際して、ここで、まず殿のご冥福を祈ろうではないか」

言い終わると、内蔵助は、家中の反応も聞かずに、後ろに向かって手を挙げた。

嗣子松之丞を奥の屏風裏に控えさせていた。

「一同、ご静粛に！」

内蔵助の凛とした言葉に応じて、松之丞が、無言で立って進んでくる。

胸に燦然と輝くご主君の金のご位牌。

手紙を読んだ後、菩提寺の華嶽寺に急遽造らせたものである。

参加者は、声もなく、この光景を見守った。そして、内蔵助が後ろを向いて、ご位

牌に黙禱を捧げると、あわてて内蔵助に倣った。

大広間は一瞬にして、しわぶき一つない静寂の世界に戻った。時々聞こえるのは、家士たちのすすり泣く声だけである。

やがて――。

静かに向き直った内蔵助は、おもむろに口を開いた。

「では、各々方。お気の静まった所で次に参ろう。第二の手紙は、江戸在住の家老安井彦右衛門、藤井又左衛門殿連名の書状である」

この書状は、今朝方届いたばかりであった。

「――これによれば、当赤穂城の公取（召し上げること）、その収城使として、竜野の脇坂淡路守殿と備中足守の木下肥後守殿が命じられ、また幕府の御目付役として、荒木十左衛門、榊原采女の両幕臣が江戸を出立されるとのこと。併せて、城受け取りに遺漏なきを期すため、両収城使は、千余の兵を引き連れてこられるとの噂である」

「千余の兵」という言葉に、一同は再び騒然となった。すわ合戦とあわてる者まであった。

「いやいや、誤解召されるな。城受け取りに、使者が将兵を率いるは、開城の常でご

ざる。拙者も去る七年前、殿の代理として備中松山城の受取人となったことがある。この折には、当地より、人をかき集めて七百の将兵を連れて参った。此度は逆の立場になっただけのこと――」

と言って、かすかに微笑んでみせ、「おお、そうだった、そうだった……」と、話をつなぐ。

家中の注目が、内蔵助の次の言葉に集まるのを計算し、内蔵助は、さらに、ゆっくりとしゃべり継いだ。

「あの時は、松山城の殿・水谷出羽守勝美さまが永のお患いで亡くなり、続いて跡目相続人の勝晴さまも二月足らずで急死。そのため、跡目が絶えてのお家断絶でござった。断絶の事情は当家とは全く異なるが、禄高（五万石）といい、家臣の姿勢といい、なにやら似ておった。というのは、領民も家臣も、城を幕府に渡すものか、という反発がひしひしと伝わってくるほどじゃったでのう」

ここで一呼吸措いた。さらに――。

「そこで拙者、覚悟の臍を固めて、水谷家のご家老・鶴見内蔵助殿と、同じ内蔵助同士の一対一の差しでお会いした。そこで、拙者、水谷家の再興に、ご尽力を約して無血開城を迫り、ようやくにしてご了承を得た。柳営におかせられても、この平和裡の

決着を喜ばれて、出羽守さまの弟さまの勝時殿に三千石の禄を与えて水谷家の存続を認められた。さて、そこで当家のことだが……、お家断絶の咎は、この時の松山藩より重い。されど、大学さまという歴とした、お世継ぎさまが残っている。それだけが有利。そこでじゃ――」

もう一度、家士を見回して、内蔵助は結論へと話を向けた。

「我等が平和裡の自決と引き替えに、お家断絶を撤回願いたいというのが、拙者の、今の偽らざる心境でござる。たとえ五万三千石が半知（半分）になろうとも、浅野の家と城を守らねばならぬ。それこそが、残された我等の務めではなかろうか」

しかし、これも本心ではなかった。

主君の遺言と遺詠を読んで、吉良との間に、（なにかがあった）ことを知った今となっては、その内容を知らずに死ぬ気にはなれない。

（自決は延期）

心底ではそう思っている。

ただ、目の前で、自決に恐れおののく者どもを追い払いたいための詭弁であった。

しかし、江戸三人組は、内蔵助のそんな魂胆を知らない。片岡が、いきなり制止も聞かず立ち上がって叫んだ。

「ご家老！　では殿のご無念はどうなるのでござる。自決してなんのお役に立とうや！」

（馬鹿者めが！）

と思ったが、ここで片岡と喧嘩しても内輪争いになるだけである。

内蔵助は、静かに諭すように語った。

「役に立つと信ずるゆえにこそ申すのじゃ。俗に言うではないか、〈身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ〉と。これよ、拙者の言いたいことは。解ってくれ、片岡。それともなにかな、城に籠もって徹底抗戦でもなさるお積もりか。しかし、よっく耳をほじって聴かれよ。これは片岡殿だけに申すのではない。ここに居られる全員に申すのだが、この城は、まともに幕府より攻撃を受ければ十日とは持たぬ」

内蔵助は、日頃の城に対する自信と愛着とは全く反対のことを平気で言った。

この際は、嘘だろうとなんだろうと、片岡や堀部の暴走を阻止できるなら、たとえ地獄で閻魔に舌を抜かれようと、言い続ける積もりである。

「十日！　そんなに脆うござるか、この城は！」

片岡が、唖然とした顔で絶句した。

内蔵助は、しめたと思った。自分の話柄に片岡を引き入れられれば、こっちのもの

だ。

「脆い、脆い。近頃の新鋭大砲による攻撃にあえば十日はおろか、せいぜいが五日であろうよ」

内蔵助は、他人事のように嘯いて見せると、

「何ゆえか？　理由は二つある」

いかにも確信ありげに続けた。

「一つは我が方の火器の脆さじゃ。確かに城の武器庫には鉄炮が百丁以上ある。だが肝心の火薬の備蓄がまるでない。近年の手許不如意のせいだ。また、あっても、この城に向かって常時吹いている強い潮風の影響で、火薬は多分に湿気を含んでおり、いざの役には立たぬ。大砲も二門用意できるが、この砲弾も同様であろう。つまり、この城の火器は、ほとんど張り子の虎同然なのじゃ」

半ば、この大広間にまぎれこんだ忍びに向けての外交発言である。

「第二に食糧じゃ。現在は端境期で備蓄が少ない。あるのは、柳営さまからお預かりしている城付米ばかりじゃ。これを使い込めば、それだけでお縄を頂戴することになる。そうでござるよな、大野氏」

大野九郎兵衛は、突然の指名に、どぎまぎして答えた。

「さようでござる」

これで、大野も嘘の共犯者とした。

しかし、これでも、この日は、家中の意見の一致を見ることは、なかった。

5

翌二十八日、総登城の第二幕第二場を開いた。

参加者は五十人ほど減って二百人。

忍びの姿は消えていた。昨日の内蔵助の火器諜報(ちょうほう)だけで、派遣元に飛んで帰ったのであろう。

内蔵助は、腹の中で、ほくそ笑んだ。

(第一の外敵は、これで追えたな)と。

だが、内なる敵——片岡以下の三人は、昨日にまして強硬だった。

片岡は、最初から絶叫調であった。

「我等三人は、殿のご最期(さいご)のご無念を知る者だ。殿の吉良への死の恨みの形相(ぎょうそう)も、この目で、しかと見届けている。さればこそ、我等は、城や菩提寺で自決しようなどと

いう大石殿の女々しい説には承伏しかねる。そのような死に方で、あの世とやらで、どの面下げて殿と相まみえられようや！」

田中、礒貝が、これに和する。

「そうだ、そうだ。このまま死んでは、あの世で、殿に合わせる顔がないわい。あるなら教えて下され。ご家老、ご一同」

そして、三人揃っての号泣。

処置なしだった。

内蔵助は、主君のご位牌の前に座り、終始無言を貫いて、江戸の過激派の怒号に耐えるしかなかった。

こういう時は、全く別のことを考えるに限る。

内蔵助は、今も懐に持つ、お部屋さまの手紙のことに心を向けた。

（なぜ、あなたさまは、このように吉良のことを淡々と書いて寄越されましたのじゃ。この内蔵助、不思議でなりませぬ）

だが、もちろん答えはない。

この間に、三人は、内蔵助の前後を囲んだ。

地元の家士たちも、内蔵助を助けるように詰め寄り、自然と小さな対陣ができた。

当初は「殿の最期の無念の形相を知る」江戸三人組の絶叫調に、地元組はたじたじだった。

しかし、地元組も、間喜兵衛（はざま）、間瀬久太夫、それに吉田忠左衛門といった老人たちを中心に、徐々に反撃に出た。

老人たちは、

「では、ご三人方はどうなさりたいのじゃ」

と突っ込んでいった。

そうなると、三人の答えは、次第にしどろもどろとなった。ここまでは合意ができていなかったらしい。

「柳営に不当を訴える積もりじゃ」

「訴えて無視されたらどうなさる」

「吉良邸に殴り込む」

「何人でじゃ」

「我等の他、堀部らを含め六、七人ほどじゃ」

「相手は何人じゃ？」

「そんなことは知らぬ。関係ないわ」
「それはおかしい。吉良の背後には、米沢の上杉家（十五万石）が控えている。赤穂浪士の殴り込みの噂が流れれば、江戸城の城郭内での狼藉ゆえに徳川の旗本衆も黙ってはいまい。相手は百人、二百人、いやもっと多いかもしれぬぞ。その時はどうなさる」
「切って、切って切り死にするだけじゃ」
「しかし、吉良の屋敷は、意外に広いと聞いておる。上野介の寝所がどこか、居室がどこか、おぬしら、判るのか。部下と斬り合っているうちに脱出されたらどうなさる」
「その時は、その場で腹を切ってみせる」
「それこそ犬死じゃ。世間の笑いものになるだけではないか」
「ならば、吉良の登城を狙って、路上で刺殺するのみじゃ。我等の腕なら失敗はせぬ」

三人の感情論は、老人たちに理詰めに出てこられて、次第に追いつめられていった。一刻ほどの、激しい言い争いの後、気持ちの収まりのつかない片岡は、憤然と立っ

た。

「話にならぬ。俺は帰るぞ」

「どこへじゃ」

「江戸よ。江戸に戻って、堀部と今後の方針を相談する。場合によっては単独行動を取るかもしれぬ。覚悟して欲しい。行こう田中氏、礒貝氏」

三人は立ち上がった。

この時である。

満を持していた内蔵助が、

「待て、江戸の衆」

と叫んで振り返ったのである。

6

三人をこのまま江戸に帰すのは「虎を野に放つ」ようなもの。まして、堀部と一緒になっては、〝飢虎〟（飢えた虎）にも等しくなる。

万一、路上で幕府の要人である吉良に切りつけることがあったら、それこそ一大事。

この悪影響は浅野本家を含め、全浅野家に及ぶだろう。

仮に討ち取ることができたとしても、それは暗殺でしかない。

（殿との間になにがあったのかを知らずに討ち果たしたとしても、大義名分は不明のまま。ただの老人いじめに過ぎないことになる。大坂はもとより江戸町民の賛同も得られまい）

しかし、この理屈も、暗殺思想に凝り固まった三人には通らない。

物を知らぬだけの無知なら説明すれば解るかもしれない。だが、頭から「解ろうとしない」暗殺派の確信犯には、いくら説明しても無駄である。

ならば、どうしたらいい。

内蔵助は、やむなく、歩み寄った。

「拙者、殿のご位牌とお話をして、よくよく勘考仕った（考えました）。片岡殿の意向を汲んで、今夜、拙者が幕府の目付さまに手紙をしたためよう。もし、これに柳営側が真摯に対応していただけない時は、拙者の自決一筋の案は再考してもよい。しかし、それまでは、私的な暴走を控えてもらいたい。堀部には、そなたらから伝えて欲しい」

事実上の譲歩である。
「どのような案文か、お聞かせ貰えませぬか。そうでなくては堀部を説得できかねまする」
片岡は、なお堀部をダシにして居丈高に要求した。
「わかった。では申し上げる。骨子は二点と考えている」
「承りましょう」
「一つは、吉良上野介の処分」
「処分と申されると？」
「我が殿の切腹に相応する処分と存念いたす」
そう、ぼやかすしかない。
しかし、
「曖昧でござるな」と、片岡は反論した。
「しかし、あからさまに切腹させよ、とは要求できまい」
「それもそうでござろうが……、まあいい。明日読んでもらってから考えましょう。で次は」
「第二に大学さまによる浅野家の再興」

「よろしゅうござる。すべては明日に」

どちらが上司か解らないような片岡の態度に、内蔵助は、一瞬むっとした。

だが、これも――。

主君の刃傷沙汰を、単純な「吉良との口論」と考える片岡。

そこに、もっと深い「幕政に絡んだ論争の有無」まで考えようとする内蔵助。

この違いにある。しかし、この差を縮めるだけの諜報が、今、内蔵助の手許には集まっていない。

それを考えると、ここで片岡を説得することも、そして、当然ながら決別するわけにもいかなかった。

（決別すれば、糸の切れた凧のように暴走するだけだろう。それだけは阻止しなくては……）

内蔵助は、片岡の無礼を「大事の前の小事」と思うことにするしかなかった。

三人が先に中座すると、内蔵助は、むっとしたまま、全員に向かって告げた。

「各々方、見てのとおりでござる。彼ら江戸衆の独走を阻止するために、拙者、幕府に向かって、やむなく嘆願書を書く羽目になった。だが、いくら愁訴（事情を話して

あわれみを乞うこと）しても、聞く、聞かぬは相手のあること。実現は期しがたい。そこで、明日は、我等の嘆願が、死を覚悟の、真の心より出ていることの証とするため、拙者と共に、誓文を出して戴きたい。この署名を懐に、拙者、今後、江戸三人衆の暴走を抑え、城受け取りの使者にも浅野家の再興を懇願する積もりじゃ。従って、誓文する気のない者は、明日のご出席はご無用じゃ。よろしゅうござるな、皆の者」

いよいよ家士を色分けし、本当に自分に随いて来る者だけを選び出す時期がきたと思った。

この夜、内蔵助は、苦心の末、次の手紙を書き上げた。元より不本意なものである。だが、こう書いて見せる以外に片岡や堀部の暴走を阻止することができなかったのである。

このたびは、内匠の思いがけぬ礼儀知らずの行為で、切腹を命じられ、城地を召し上げられました。家中の者はみな恐縮し、仰せに従うつもりでおります。

（中略）

相手の上野介さまは、亡くなられた上で、主人内匠は切腹仰せ付けられたものと

ばかり思っておりましたところ、追って知らせがあり、上野介さまは御無事であったと知りました。我々家中の侍どもは、主君一筋の無骨者で、世間の作法を知りません。相手の上野介さまが御無事でなんのお咎めもないままに、当方だけが城を明け渡して離散するとは、と嘆いております。

私ども老臣や上に立つ者共が、色々と部下を訓戒しておりますが、何分にも無骨者ばかりで、どうしても納得しませぬ。もう私どもでは宥めきれず、そこで憚りながら御願い申し上げる次第にございます。それは決して上野介さまを御処分戴きたいと申し上げるわけではございませんが、なにとぞ御目付さま御両人の御尽力にて、家中の者共が納得できますように、筋をお立て下されば、まことに有り難く思います。

当赤穂へ御到着の上で申し上げては、お城受け取りになる上で、滞りが生じては如何かと思い、ただいま、前もってお願いする次第でございます。以上

弥生二十九日

浅野内匠頭家来

荒木十左衛門様
榊原采女様

大石内蔵助

（なんという情けない手紙か！）
自分で書きながら思わず涙が出た。
これでは、まるで暴走派の家来が手に負えないので、なんとかしてくれ、という幕府への哀願、いや、とりようによっては、脅迫しているようなものである。
家老としての指導力の欠如を責められたらグウの音もでないだろう。
（だが、この際は負けるが勝ちか）
最後は開き直って、内蔵助は筆を擱いた。
しかし、もとより、転んでもただで起きる男ではない。この時、人には言えぬ、ある策略を思いついたのである。

7

二十九日早朝。

内蔵助は、片岡一人を自邸に招き江戸に送る書状の内容を事前に読んで聞かせた。

予想どおり片岡は、

「内匠の思いがけぬ礼儀知らずの行為」

という、殿をないがしろにするような文言は、けしからぬ、また、

「吉良へのお仕置きがないのは片落ちなのに、黙すのか」

と、とても承服しかねるといった体であったが、最後には、「幕府に此度の処断の反省を求め、しばらく様子を見たい」という内蔵助の説得に渋々応じた。

江戸への「帰心矢の如し」だったのであろう、内蔵助のいう自決説を拒否したまま、三人は、この後、直ちに江戸に立つことになった。

「自重してくれ。頼むぞ」

後は、祈るしかなかった。

片岡が屋敷を出るのを見届けると、内蔵助は多川九左衛門（四百石）、月岡治右衛門（三百石）の二人を呼んだ。共に、大野九郎兵衛の一派で、最も穏健な「無抵抗城明け渡し派」である。

「これより急ぎ江戸表に下り、城受け取りの御目付役の荒木、榊原の両氏に、この手紙をお渡しせよ。急げ。しかし、いささか思うところあれば、決して安井、藤井の両家老に、事の相談をするな。また大学さまには、この手紙のこと、夢々お耳にいれてはならぬ。なお御目付に差し出したのちに、しばらくしたら、頃合いをみてから、写しの一通を、開城の見届け役となられた戸田采女正（うねめのしょう）さま（大垣城主。内匠頭の従兄（いとこ））に差し上げるようにせよ」

と、内蔵助は命じた。

片岡に託すことを避け、大野派の二名を使者に選んだのは、内蔵助の深慮遠謀である。

一つには、大野派なら、江戸下りで、犬猿の仲である片岡らと行を共にする危険がない。勝手に加筆でもされたら、たまらない。

もう一つは、この手紙の宛先（あてさき）である荒木、榊原とは、必ず東海道で行き違いになるだろう。つまりこの手紙は、受取人を失って宙に浮く。

その間、開城が決まれば、この二人は、手紙どころではなくなり、逐電（逃亡）するは必定。後に写しが親族の戸田采女正のところに残るだけで、いずれ消えてしまう――、と考えたのである。

だが、この内蔵助の遠謀は、二人の使者の粗忽から、脆くも崩れてしまうのだが――、これはあくまで後日談である。

この日（二十九日）昼四つ（十時）。

第二幕第三場の総登城が開始された。

内蔵助の〝脅し〟がきいて、登城した家士は激減。

この日の出席者は百名を割った。

激論の末に、内蔵助の要求に応じて誓文署名したのは、六十一名であった。

この中に先日、江戸表から駆けつけた菅谷半之丞、また大坂留守居役の岡本次郎左衛門が入っている。が、当然ながら、議事を放り出して江戸に向かった片岡以下は入っていない。

もっとも、この第一次署名者には、部屋住み、隠居、地方など、評議に参加できない者六十余人は除かれている。彼らが、後から、ぼつぼつと加わり、署名者の総員が

百二十五人にふくれあがるのは、翌年春になってからである。

ここでは便宜上、百二十五人全体について、分限（階級）の内訳を示せば、

百石以上　七十一人
百石未満　二十八人
御給金のみの者　十六人
部屋住み　十四人
隠居　二人
足軽　二人

五割以上が百石以上の中堅層、現代流にいえば部課長級である。いざ事を起こす時、頼りになるのは、やはり、よき指導者と、それに従う中堅層という歴史的証であろう。

もっとも、この層は脱落者も多い。

話がやや先走るが――、結局、最後まで内蔵助と行動を共にした四十七人の中、百石以上の中堅層は、わずか二十三人に過ぎない。「中堅層は口説（口先だけ）の徒」という面も否定できない。

閑話休題。

この「ぼつぼつ組」の加わる中で、血盟の趣旨が、当初の「籠城または華嶽寺での自決」から次第に不鮮明になっていったことは、注目しなければならないだろう。

「要は、御家老と共に、浅野家の再興のために行を共にすること。そういう理解でよろしいのでござるな」

そう言って署名血判に加わったのは、大石孫四郎（三百石）、糟谷勘左衛門（二百五十石）、井口忠兵衛（二百五十石）ら、後の討入り脱落組である。

そして、内蔵助も苦笑いして、この署名血判を受理していたと思われる。

なぜなら、自決を前面にかざして忠誠心の薄い者を追い払う最初の目的は、残った家士の激減で、十分に果たしたからである。

それに内蔵助の胸中には、この時もまだ、吉良上野介を標的とする復讐の観念は、明確ではなかった。

（主君の胸中の無念がなにか、いまひとつ解らない。それでは吉良を討つ名分が立たない）

これによって、逡巡の尾を引いたまま、内蔵助は、この後も、ずるずると無為の

日々を過ごすことになるのである。

8

四月に入ると、幕府は、赤穂城の平和的受け取りに万全を期するため和戦両用の態勢を敷いた。

まず、先陣として、備前岡山の池田家が、郡代の津田永忠に六百人の兵を率いさせて国境に進出した。同じく、讃岐高松藩は、家老の大久保主膳が数百隻の船を配して赤穂沖の厳戒態勢に入った。

続いて、阿波の蜂須賀家、丸亀の京極家、明石の松平家、姫路の本多家にも、大動員指令が飛んでいる。

いずれも、陸と海から赤穂城を孤立させるという幕府の作戦に従ったものである。

この態勢と並行して、幕府は、広島、三次、大垣などの浅野親族藩主に「赤穂の平穏な開城」を勧奨する鎮撫使節の派遣を命じた。

誰の目にも籠城抗戦は不可能――と映った。
追い込まれた内蔵助に残された道は、一つしかなかった。
城を平和裡に明け渡した後、華嶽寺に引き下がって、お家再興を願い、神妙に集団自決すること。
これだけである。
しかし、この自決行も〈主君の御無念の内容〉を知らぬままに、あの世に行くには強い抵抗感があった。
（それでは、あまりにも自分たちが惨め過ぎないか）
内蔵助は、口でこそ弱音は吐かなかったが、ここにきて、なんとなく手詰まりを感じていた。
そんな心の懊悩をひた隠して、まず実施したのが、残余財産の分配であった。
四月五日。
第一回目の配分金を家臣に支給している。
配分方法については、内蔵助と大野九郎兵衛との間で、当初、意見が割れた。

大野は「家禄に応じた同率配分」を主張した。

別に、――後世言われるほど――九郎兵衛が利己的だったわけではない。

禄高の多い者は、抱えている又者（家来の家来）も多いから、彼らを去らせる出費も嵩む。冷静な実務家として、当然の主張であった。

これに対して、内蔵助は、上級者の義務として「下禄の者への配慮」を、極力考慮に容れるべきだと主張した。

「そうではござらぬか、のう、大野氏。下禄の者とて、これまで縁あって、この地に共に生きた者ではないか。主人が浪人になったため、食を断たれ、職を求めてさすらう途中で、万一にも盗みを働いたり、飢え死にしたりしてみよ。『見よ、あれが、お家断絶を食った赤穂家の家来どものなれの果てよ。あな情けなし！』などと言われたら、我等とても恥ではないか」

そんな話し合いの結果、折衷案が決まった。

基本としては、大野の言う「禄高による基礎支給額」でいく。内蔵助の方が歩み寄った形である。だが、禄高による支給額（百石につき十八両）は、禄を増すごとに微減（百石毎に二両減）させることを納得させた。

これとは別に、禄高のない者には、次のように決めた。こちらは、多分に内蔵助の

主張の入った結果であろう。

まず中小姓が十四両。これは扶持米取りである。続いて徒士組が十両。さらに並役人、小役人はそれぞれ七両、五両とする。水手は米三石。足軽は、筒持が同じく米三石、槍持は同二石。臨時雇いの、いわば渡り者は米四斗とした。他に、定番人は三両二分と決まった。

この恩恵を受けた下士の中から、後に討入りした四十七士の半数が出たことを考えると、内蔵助の「下禄の者への配慮案」の効果は、絶大だったことが解る。

四月十一日。

内蔵助は、この日、第二回目の剰余金の分配を行っている。江戸藩邸から回金された剰余金壱千両や、三次藩の赤穂藩札の自主回収などの結果、予想以上に金に余りが出たためであろう。

支給基準は、前回に準じたと推測される。

なお内蔵助本人は、この支給方法に準拠すれば百七十両もらえる計算になったが、

「拙者は、ご辞退申し上げる」

と、二回とも受け取りを断り、無私の姿勢を貫いた。

寿昌院の持参金の運用に巨額の目減りをきたした責任もある。ちなみにこの段階での運用金（約五千両）の回収は一割にも満たなかった。いずれお目通りする時のお詫びを考えれば、ここで、分配金をもらうわけにはいかなかったのである。

しかし、ここまでは、寿昌院の持参金回収問題を除けば、事態は、内蔵助の計算どおりに進行していたといっていい。

ところが――。

この辺りから内蔵助の誤算が始まった。

同じ四月十一日夕刻。

分配金の配分を終わって一息いれている最中のこと。先月末に、手紙を持たせて江戸に出した使者二人が、予想以上に早く赤穂に戻ってきた。

さぞ、ばつの悪い様子で内蔵助の元に現れたことであろう。

というのは――、彼らは出発に当たって内蔵助が与えた指示を全く守らなかったからである。

以下が、使者二人の、江戸での動きである。

四月五日　江戸到着

三月二十九日の出発（当時の三月は大の月で三十日まで）だから、往路も恐ろしく早かった。

おそらく、途中、嫌な片岡ら急進組と会いたくない一心で、夜行も辞せずに江戸に向かったためであろう。

このため――日中を悠然と行進したと思われる――幕府の荒木ら目付たちと、すれ違いになってしまった。当然、手紙の相手先の目付二人は、すでに江戸に居なかった。もっとも、ここまでは内蔵助の作戦どおりであったとも言える。元々、この手紙が宙に浮くことは、内蔵助の意図であったからである。

ところが、この後の使者の行動が、内蔵助の目算を完全に狂わせることになる。

というのは――。

相手の不在で思案に余った使者二人は、内蔵助から禁じられていた筈（はず）の江戸屋敷の安井、藤井の両家老と糟谷勘左衛門、早川宗助（二百石）らに相談してしまったからである。

これではたまらない。事がぱっと公（おおやけ）になってしまった。

不幸中の幸いは、この手紙が親族の戸田采女正や目付段階で留まったことである。それ以上に、老中や柳沢の目に入ったなら「幕政への威嚇」と取られて、〈大石追討〉の事態にまで及んだに違いない。ともかく、片岡らに、無理矢理書かされた手紙とはいえ、予想以上の波乱を巻き起こしたことだけは確かである。

（なんということをしてくれたのだ！　俺があれほど江戸家老に見せるな、と言ったのに）

平身低頭して、不始末を報告する使者に、さすがの内蔵助も、怒りで言葉を失った。そして二人が持参した戸田采女正からの次の返事を、内蔵助は、怒りに震える手つきで読んだ。

ところが、この内容もまた、内蔵助への叱責に満ちたものであった。

――多川、月岡の両使をもって寄越してきた手紙の趣が無礼きわまるのは、こちらの事情に無知――公儀の意思、威力の理解不足の意――なるゆえであろう――

――内匠が、日ごろ公儀大事と務めていたことは、そなたらはよく知っている筈ではないか。内匠への家来としての奉公の筋を知る者ならば、速やかに赤穂の地を引

き払い、そっくりそのまま城を返上することが、公儀を重んじ、かつ内匠の気持ちに添うことであるから……――

――申すまでもないが、追って指図に従い、穏便に退去することこそ肝要である。この旨は家中の者は、皆承知し納得しているべきものである――

戸田采女正（花押）

卯月五日

けんもほろろ、とはこのことであろう。

部下の手前でなければ、内蔵助は、悔し涙に暮れたところである。

読み終えた内蔵助は、その救いのない内容――、親族として内匠頭の行動に一掬（ひとすくい）の涙すら見せない戸田采女正の冷たい姿勢に、呆然となった。

確かに自分の書いた手紙は、

（相手の上野介をなんとかして欲しい。そうでないと部下の収拾がつかぬ）

という脅迫めいた内容にとれるかもしれない。

しかし、それならそれで、

「気持ちはわかるが、こういうことを、お上に向かって言ってはならない。口を慎んだ方がいい」

という、親族藩主としての、横からの忠告の一つぐらい書き添えてくれてもよかろうに……、と思った。

「しかし、拙者の手紙、よもや大学さまのお目にはとまっていないであろうな」

内蔵助は、も一つ、念を押した。

ところが、二人は、さらに身を縮めて答えた。

「それが、拙者らはお留めしたのですが、ご家老衆が……」

「ご家老衆がどうした！」

「大学さまのところに、お手紙持参で飛んで参られたのでございます」

「あれを大学さまにも読まれたのか！」

これでは万事休す。四面楚歌である。

（どうしたものか）

思案に余った内蔵助は、もう一度、こちら側の態勢整備と団結確認の必要を感じた。

その夜は、思った展開にならない苛立ちで、一睡もできなかった。

翌十二日朝。

追いかけるようにして、戸田采女正から第二の手紙が、使者正木笹兵衛・荒渡平右衛門の手で届けられた。

日付は四月六日。

幕府関係の使者は、最優先で街道を走れるから意外に早く着いたのであろう。

以下が、その本文。

――昨日、両使者が持参した手紙の趣旨、家来の面々が一筋に主人のことを思われるとのこと、事情はわからぬではないが、これは、もっぱら御公儀の威力に対する理解不足と思います――

――先だって両使に申したとおり、公儀を重んじ城を滞りなくお渡しして、退去されることは、内匠の日頃の思いに叶うものと心得ます――

前段の一部に、ちらり、家来が主人一筋に思う気持ちも解らぬではないが――、と

付け足しただけで、後段は全く同じ調子である。

（ふん）

と鼻で笑って、内蔵助は、この手紙を放り出した。いまさらなにを言っているのだ、という気持ちである。

この後、直ちに、上級武士たちと「玉砕派」の下級武士だけに呼集をかけた。

内蔵助は、集まった五十人ほどを前に、次のように一方的に宣言した。

「間もなく収城使がやってくる。拙者は、これまで申しているとおり、あくまで『殿の屈辱は家臣の死』という我々の気持ちを前面に押し立てて、華嶽寺にて切腹する覚悟でござる。本音は死の抗議と思って下さって結構。そこでこの覚悟のほどを収城使に披瀝するために、改めてもう一度、皆の者の神文血判を貰いたい。だが強制はせぬ。意見の違う者は、即刻散会されよ」

有無を言わせず自ら誓詞を書き、真っ先に血判してみせた。

集まった者たちは、一時ざわめきを見せたが、ぽつぽつと血判に応じる者が出た。

応じた動機は色々であろう。

上級者たちは、内蔵助の追いつめられたような気迫と配分金の辞退にみせた無私の

姿勢に共感したからかもしれない。

神崎（与五郎、徒目付・郡目付、五両三人扶持、三十六歳）、奥田（貞右衛門、加東郡勘定方、九石三人扶持、二十四歳）らの「城を枕に玉砕を」と叫ぶ若手は、内蔵助の気迫の中に、単なる切腹以外の「なにものか」を感じ取ったからであろう。

事実、この時の内蔵助には、もはや、いずれにおいても切腹する気など、さらさらなかったのである。

「事ここに及んで、そんなに易々死んでたまるか」

という開き直りがある。特に、浅野の親族藩主の無理解と保身に汲々とする姿勢には、はらわたが煮えくりかえっていた。

なお、この時、この場で血判に応じたのは二十九人に過ぎない。が、この後、内蔵助の元に神文を提出した者は、急速に増え、合計七十人に上っている。

その夜の大石自邸――。

内蔵助は、嗣子・松之丞を書斎に招き入れて、今朝の集会の経緯を語ると、

「これだけおれば十分」

と、その後、続々集まる神文の山を前に、不敵な笑みを浮かべた。

「なにがでございます。父上」

嗣子松之丞が訝ると、内蔵助は、さらに、ふくみ笑いをして、こう加えたのである。

「これだけの者が一団となれば……、共に死のうと、生き残って暴れようと、世間は、我々をうっちゃってはおくまいでな」

敵は何百、何千いようと、世間という、もっと強い味方さえ造ればいいではないか。

そんな気持ちが、こう言わせた。

次いで、その夜更け——。

岡嶋八十右衛門が、血相変えて飛び込んできて、大野九郎兵衛父子逐電の事実を報告した。

この時も、内蔵助は動じることなく、八十右衛門を、次のように諭した。

「放っておけ。人には、さまざまな生き方があるでな。しかし……」

「しかし、なんでござろうや」

「人の評価は、いずれ世間が決めること。我々ではない。まして幕府でも親族、親藩でもござらぬでな」

後は、どうやって、この世間を味方につけるかだ。

内蔵助の心の中で、この時、なにかが吹っ切れていた。胸の内をほとばしったのは、（今は臥薪嘗胆の時。いずれ幕府や浅野親族の奴らを、あっと言わせて見せようぞ……）の反骨であった。

9

翌十三日。

内蔵助は、早朝から全く別人のように働き始めた。札座勘定奉行の岡嶋、金奉行の前原（伊助、十石三人扶持、三十八歳）を中心に、以下、数字に強い杉野（十平次、札座横目、八両三人扶持、二十六歳）、勝田（新左衛門、札座横目、十五石三人扶持、二十二歳）、奥田（貞右衛門）ら若手を総動員して、来るべき収城使に渡す財産目録その他の書類の再点検に入った。

何十年かぶりに、検算のため自ら算盤も手にした。

もっとも――。

「結構今も使えるぞ、見ろ」

そう言って、妻に算勘の技を自慢すると、理久には、
「太夫さまは、長らく、お三味線で指先の調練をなさっておいでしたので」
と、皮肉られた。
「こいつめ」と、怒鳴った時には、理久の姿は消えていた。

しかし、大野が残した財産目録は、どこを突いても一分の狂いもなかった。合わなかったのは、城で番犬に飼ってきた犬の数だけであった。
若手の報告で、犬の話を聞いた内蔵助は、
「届ける相手は犬公方さまだ。城の引渡し当日だけでも、農民から犬を借りて数合わせだけはしておくがよかろう」
冗談混じりに笑いながら、（惜しい男だったな）と、大野のことを思った。
どこに消えたかは知らぬ。が、あれほど算勘のできる男だ。生きる道はいくらもあろう。いずれどこかで消息を聞くこともあるだろう。
だが、そんな平穏な笑いも二日しか、もたなかった。

恐れていた堀部安兵衛が、十五日午後、大石邸に押しかけてきたのである。

若年ながら、年上の奥田孫太夫（武具奉行、百五十石、五十五歳）、高田郡兵衛（江戸詰め給人、二百石）の先頭に立っての登場である。

それだけ口が達者だった。

三人に共通の特徴は、譜代の臣下でなく新参者であること。それが武辺好みの内匠頭に陶酔して、忠義一徹に固まってしまっていた。

そして堀部安兵衛は、越後新発田から十九歳で江戸へ出て、以来、剣客堀内源左衛門に師事してきた名うての剣士。高田郡兵衛も槍術の達人として聞こえが高い。共に、最後には、吉良暗殺に走るだけの「腕に覚え」がある。

それだけに始末が悪い。

特に安兵衛は、堀内道場を通じて細井広沢ら文人との交流があり学識も深い。論客としても一流であったからたまらない。

書院での挨拶もそこそこに、内蔵助は、安兵衛との激論に入った。刃傷事件で恩賞を受けた二人の人物の名を訊ねるのも忘れるほどであった。

だが、いかにも内蔵助には分が悪い。

初っぱなから、

「聞くところによれば、太夫殿には……」
と、妻と同じ呼びかけに、内蔵助は、まず機先を制せられた。もっとも、こちらの太夫は、まともな敬称である。妻のような皮肉は込められていないが――。
「うむ」
と言ったきり、内蔵助は、後が続かない。
「当初の籠城自決説を撤回され、平穏に、お城引き渡しされる御決意と承ったが真でござるや」
と、安兵衛はやんわりと攻めてきた。
これも、「うむ」と受けるだけである。
「ほう。では……、かの悪名高い腰抜けの大野なにがしの主張とどこが違うのでござろうや」
と、安兵衛は食いついた。
「同じではないか」と挑発的に言わず、「どこが違うのでござろうや」と、いかにも討論慣れした、抜け目のない言い方である。
内蔵助は、たじたじとなった。
が、沈思黙考の末、二つの反論を以て応戦した。

「かくなった理由は二つある」
「ほう、と申されると」
「一つには、拙者が江戸に使者を派した失敗でござる」
追いつめられた内蔵助は、正直に告白した。
ところが――。
「ああ、片岡が太夫殿に書かせたと自慢していたあれでござるか」
安兵衛は事も無げに、妙なことを言った。
「いや、片岡とは関係ない。拙者の一存で書いた口上書でござる」
内蔵助は、思わずそう口にした。
片岡がそんなことを言って、江戸で自慢しているとは、ついぞ知らなかったのである。事実ならけしからぬ。
「いずれにせよ、読ませていただいた。が、ちともの足りぬゆえ、拙者らで、独自の文案を書きました。しかし、それを無断で提出しては、太夫殿にあまりに失礼でござれば、結局は、出すのは控えましてござる。我等の文案、ご参考までに一度ご覧になりますか」
安兵衛まで人を馬鹿にするようなことを言った。

「その必要はない。しかし、江戸の衆は拙者の口上書を巡って、そんな勝手なことをやっていたのか。無礼にも程があるぞ！」

内蔵助は呆れ、また、怒った。

しかし、安兵衛は、平然と答えた。

「お言葉ながら……、太夫殿は勝手と申されるが、江戸藩邸の雰囲気は、とてもとても、太夫殿の手紙のような生ぬるい文言では、収まりきらぬ状況でござった。片岡などは、俺は殿のお恨みの形相を、この目でしかと見た特別な人間なのだ、このような卑屈な訴えなどするご家老は承知できぬ、切り捨ててやる、とまで息巻いて聞く耳持ちませぬ。しかし最後は、拙者がすべて取り押さえ申した。提出したのは、間違いなく太夫殿の書かれた文言どおりでござる」

（どうだか）

と思ったが確認できない以上、水掛論である。

黙らざるを得ない。

余談だが、この時の安兵衛の言葉が本当かどうかは、今もって判らない。

というのは、今に残る内蔵助の口上書には、いくつも異なる伝本が現存するからである。

以下、その各々（おのおの）の末尾の部分のみを二例示す。

御目付お二人さまのお働きで、家中一同が納得できるような筋を立ててくださいましたら、有り難き仕合わせにございます。この段、御両使、もし赤穂に御到着になりましてから申し上げたのでは（遅すぎる）、と述べた後、以下原文で、

城御請取被成候滞ニモ罷成候処、如何奉存只今言上仕候

つまり、城の受け取りに支障を来すかもしれませんので、今の内に申し上げます――とするのは、『大垣藩戸田氏播州（ばんしゅう）赤穂一巻覚書』で、前述したもの。

脅迫的色彩が、やや強まっている。

次に――。

安心して、離散できるような筋に取り運んで下さるならば、その時は格別の儀にございます――、と書いた後、以下、これも原文で、

奉対上毛頭御恨（おうらみ）ケ間敷（まじき）所存無御座候へトモ、於当城餓死可仕覚悟御座候。此段申

上候

つまり、恨みはしませんが、当城において餓死する覚悟でおりますので、念のため申し上げておきます――とするのが、『堀部武庸筆記』の記録。

これも、死をちらつかせての脅しであることに変わりない。

内蔵助の口上書を巡って、江戸の過激派に、如何に激烈な論争が巻き起こったか、そして勝手に、もっと激しい文言に改変しようと画策した動きがあったか、を暗示する史料である。

もっとも、安兵衛は、ここまでの「内輪話」は内蔵助に語っていない。

けろっとして続けた。

「では、そういうことで、太夫殿の第二の理由をお聞かせ願いたい」

内蔵助は、思わず立ち上がり、なにもかも放り出したい気持ちになった。

（勝手にせい。俺は知らぬぞ……）と。

だが、それでは、これまでの苦心が水の泡になる。

追いつめられた内蔵助の心の、最後の最後に残ったものは――、名誉も地位も、な

にもかも捨てた後の、一人の男としての意地しかなかった。

「さよう、第二は……、拙者の意地じゃ」

と、天井を向いて、悔しさに堪えた。

「謹んで承りましょう」

安兵衛は、内蔵助の、あまりの怒りの姿勢を見て驚き、座り直した。これまでの自分の言動に、多少、後ろめたい気持ちが働いたのであろう。

当然である。片岡といい、この安兵衛といい、態度が横柄すぎた。

後の二人も、安兵衛にならって、気持ちをあらためた。

内蔵助は、なんとか落ち着きを取り戻すと、ようやく語り始めた。

「御三人衆、これはごく内密の話として申し上げる。その旨、とくと心得られよ」

「承知仕ってござる。のう、お二方」

安兵衛は、この場を取り仕切って答えた。

「今は、この内蔵助、涙を呑んで城を明け渡す。だが、一寸の虫にも五分の魂と申す。虫けら以下のように見える拙者にも、三分や四分の男の意地はござる。決して、御三人衆のお考えのような、ただの腰抜けではござらぬぞ」

「それはもう……」

安兵衛は恐縮し、両手をついて詫びる姿勢まで見せた後、こう続けた。

「御家老。これまでの無礼の数々、平にお詫び申し上げる。どうか、ご本心を、お聞かせ下され。我々、誓って他言はいたしませぬ。お二方ともよろしゅうござるな」

言い終わると、安兵衛以下三人は、各々、脇に置いてあった小刀を取って前に差しだして宣言した。

「今日ここに、かく、刀にかけて神文致す」

芝居がかった声だが、三人の顔は真剣そのものであった。

10

内蔵助は、この時、初めて、これまでの家老という裃を脱いだ。男一匹としての自分の意地を語ったのである。

「一つには……、浅野家の再興のためでござる。折角、木挽町さま（浅野大学）という公認の後継者がありながら、我等の勝手な行動によって木挽町さまの再出仕の道が閉ざされたとあっては、臣下として申し訳ない気持ちがある。だが、断っておくがな、これは国家老としての建前論に過ぎぬ」

内蔵助は、ここでにやりと笑って見せた。

「えっ！」

三人は、この内蔵助の本音に、一瞬呆気にとられた。

「そうじゃ。今の俺はな、正直に言うと浅野家のことなど、どうでもよくなった気がしている。そうではないか。浅野親族の、我等に対する非情の姿勢を考えてもみよ。我等を見捨て、それほど柳営に身を屈して生きたいのか。情けない、浅ましいにもほどがあるわ。浅野家などと言っても、この国に、二百何十もある大名家の一つに過ぎぬではないか。それが、ま一つ余計に潰れるだけのことよ。どちらにせよ、たいしたことではないわ。この世に、お一つしかない天皇家が潰れるのとは訳が違う。そんな些細な家の存続のために、一つしかない命をかけるのは、俺は真っ平御免こうむる」

「と、申されると、自決のお覚悟は？」

「知れたこと。誰が自決などするものか！　本気で俺に付いて来る者を選別したいがための手段に過ぎぬ。言うなれば切支丹の踏み絵じゃ。今の俺に残るは、ただ一つ。武士を超えた、一人の男としての意地だ。その意地が、まず、殿のご無念の中味を知れ、その上で、よくよく考えて、ご無念あらば、それを晴らせと命じるのだ。家の存続など知らぬ、どうでもいい。恐らく殿も、殿中で抜刀なされた時は、同じお気持ち

だったに相違ない」

「と申されますと、結局は？」

「まだこの先は解らぬ。しかし、今は殿のご無念の中味を知ることこそ大事だ。そなたら、殿の無念だ、遺恨だというが、その無念や遺恨の中味を、本当に知っているのか」

「いえ、突き詰めては存じませぬ。なにやら、よう解らぬと聞いております」

「そうだろう。俺も知らぬ。だが、俺は欲張りだ。それを知らずには死ねぬ。そなたら、今のままでよく犬死にできるな。俺は真っ平だ。堀部氏、そなたの高田馬場の助太刀とてそうではなかったか」

「あの助太刀でござるか」

「そうだ。よくよく相互の事情を聞き知った上での助勢ではなかったかと訊きたいのじゃ。それとも、なにか、ただ、喧嘩がしたかっただけなのか？」

「とんでもござらぬ。しかと菅野殿（六郎左衛門。助太刀した安兵衛とは叔父甥の義盟を結んでいた）の申し条を、菅野殿の妻女から承った上での助太刀でござる。喧嘩などとんでもござらぬ」

安兵衛は、むっとして答えた。

「そうでござろう。しかし、あれは、何年前の話じゃ」
「かれこれ七年になりまする」
「いま、お幾つかな」
「三十二歳でござる」
「ということは、当時、二十五歳か。若いな」
「いけませぬか」
安兵衛は、益々ふくれた。
が、内蔵助は頓着しなかった。
「いかぬと言っているのではない。怒るな、堀部氏。今の俺は、四十をとうに過ぎている。堀部氏の二十代の仇討ちのように、がむしゃらに果たし合いに首を突っ込むには、少々年齢を食い過ぎていると言いたいだけなのじゃ。まして皆と徒党を組んでやるからには、分別臭いことを言うようだが、江戸、大坂の町衆をも引きつけるに足る大義が欲しい、私憤を超えた大義がな。それには、殿の本心を知らねばならぬのじゃ」
「殿の本心は、一体なんでござろうか？」
「解らぬ。それが解れば苦労はないわ。だが、殿は、あの殿中で、分別をなくされた

のではない。前々から浅野家断絶の危険のことも、よくよく秤にかけた上で、分別の彼岸を超えた行動に出られたのだと思っている。俺はそう信じたい。では、ご本人なき今、どうやってそれを知るかだ」

内蔵助は、じろりと三人を睨んだ。

「唯一、それを知ると思われるお方は、お一人しかおられぬ。今は寿昌院となられたお部屋さまじゃ。そうは思わぬか、お三方」

「しかし、お部屋さまは、我々はおろか、大学さまにも、決してお会い下さいませぬ。唯一会えたのは、赤穂に戻られた菅谷殿だけでござる。それも当初の混乱の最中でござった。どうやら、ご実家が、赤穂の者との接触を嫌って厳戒態勢を敷いているらしゅうございますな」

「当たり前だ。我々は、すでに素浪人。警戒されるのは当然じゃ。そなたら、主なき犬であることを忘れるなよ」

財産目録作成の時の、犬騒動を思い出しながら、内蔵助は苦笑いした。

だが、この時、ふっと思い出した。

（それにしては、あの、お部屋さまのお手紙。あまりにも通り一遍すぎたな。やはり、ご実家の監視の目が光っていたのであろうか――）

この一瞬だった。

かちっと、目の前に閃くものがあった。

（もしや、あの手紙に、隠し文字があったのではないか……）

そう思うと、いたたまれなくなった。

「ちと、小用に参る。年を取ると蔵出しが早うてな」

笑いでごまかす。この後、内蔵助は、飛ぶようにして書斎に駆け込んだ。

桐の文箱に大事にしまっておいた、お部屋さまの手紙を取り出すと、恋文でも見るように、もどかしく、巻紙をさらりと見開いた。

と――、あった！

殿の戒名の後の広すぎる空白部分に秘密があったのである。桐の文箱の中で乾燥し、すでに、青みがかった文字が、薄く浮いていた。

いそぎ、明るい処に出て、さらに、はっきりとすかし読みすることができた。

いちにちもはやい

あすま下りを

（一日も早い東下りを）
おおいしとのまいる（大石殿に一筆参らせます）
くり

くりは、幼時の名「栗姫」か、阿久里か、そのどちらかであろう。
内蔵助は、そっと手紙の匂いを嗅いだ。
馥郁とした紙の香に隠れて、かすかに酒の匂いがした。日本酒で書いた文字に違いない。子供の頃覚えたと思われる「あぶりだし」である。
紙が乾燥することで、あぶり出すことなく、文字が自然に浮き上がったのである。
「有り難や！　やはり、お部屋さまは、殿のご無念の秘密を知っておいでなのだ！　そして拙者の東下りを待っておられる。そうに違いない」
歓喜で胸が震えた。
目の前が、ぱっと開けた感じになった。
（よし、必ず参るぞ、お部屋さま）
決意も新たに書院に戻ると、内蔵助は、三人に威儀を正して宣言した。
「ご三人衆」

言葉に力がある。自信がみなぎってくることが、自分でも解った。
「ご三人衆」
ま一度、さらに力を込めてぐっと睨む。
「はっ」
思わず、三人は身を乗りだした。
「この内蔵助、今、天地神明に誓って申し上げる。聴け！　大学さまが、ご出仕を許されるか、上野介になんらかの処罰がなければ、拙者、このままでは捨ておかぬ。以後の含みもあると、ここに申し上げておく。それゆえ、此度（こたび）の開城を含めて、ここしばらくの方針は、内蔵助に任せてもらいたい。決して悪いようにはせぬ。それまでは、臥薪嘗胆（がしんしょうたん）、江戸の衆にも、自重してもらいたい。これは、前家老としてではなく、一人の男としての意地が言わせる願いじゃ」
内蔵助は、深々と頭を下げた。
小用に行っただけと思っていた大石の、あまりの変容に、三人は驚いた。
やがて、三人は、顔を見合わせて頷（うなず）くと、一斉に居ずまいを正した。
安兵衛が、代表して答えた。
「我々も、ご家老の今のお言葉、『以後の含みがある』を信じたい気持ちで一杯とな

り申した。それゆえ、江戸も、ご家老と行動を共にすることを、ここに天地神明にかけてお誓い申す。よろしゅうにお願い申し上げまする」

この後、内蔵助は、理久を呼んで、酒の用意をさせ、お互いに盃を交わした。

こうして、男と男の「臥薪嘗胆の誓い」が成立した。時に、薫風かおる四月十五日（現在の五月末）のことである。

だが、まだまだ、男たちの前途は、全く見えていなかった。

そして、浪人となった内蔵助の身に、思ってもみない方向から、魔手がのびる初夏が、間もなくやってくる――。

第五章　江戸　元禄十四年初夏

1

四月二十四日夕刻。

柳沢保明の駒籠別邸は、翌日の三の丸（桂昌院）さまのご来訪を控え、いつになく華やぎ、人の行き来が慌ただしい。

そんな中――。

広大な庭の、見え隠れに点在する四阿の一つに、夕日に映えて、二つの影が動いた。

四阿は全部で九つある。

いずれも、ただの仮屋ではない。
茅葺きの屋根の下に、八畳、六畳の二間に四畳半の草庵風茶室と水屋を配し、柱はすべて、黒檀と紫檀造り。
遣水には、常時、清流が流れていた。
庭木には、手入れの行き届いた松、竹の他、四季折々の花が、時に絢爛と、そして時に清楚に彩る風情あふれる独立の密室である。
この日は、ちょうど額紫陽花が小さな青い花を付け始めたところである。

「戻ったか、ご苦労。どうやら、赤穂の城の受け取りは、無事落着したようだな」
ぽつりと、主間の八畳に控える男に声を掛けたのは、この別邸の主・柳沢保明である。
すでに城下がりして、さっぱりした薄茶の作務衣に着替えていた。
対する男――黒鍬組頭領・堀田将監は、紙子羽織の町人姿。平伏したままの姿勢で、
「はっ。殿のご指令よろしきを得て、恙なく終わりましてございます」
と恭しく答えた。
その浅黒い矍鑠とした横顔は、西国への長旅で日焼けして、一層精悍に見えた。

「面をあげよ、そして座を崩せ。ここは二人きりだ。余も安座するゆえ」
保明が、まず、どさっと胡座になる。
「では、お言葉に甘えて拙者も」
ここから座が和んだ。
「よかった、ともかくよかった。これで余も生き延びられたわい」
「殿、悪いご冗談を……」
「いや、本音だ。一時は本気で板倉重昌殿に倣って出陣まで考えておった。嘘ではない。弁庵（細井広沢）先生の城の解説を聞きながら、赤穂城の図面に残らず目を通し、必要箇所は暗記した。余なりに攻め口の腹案まで考えたわ。それがすべて不用になった。だが、余のつまらぬ腹案などどうでもよい。出陣すれば、余もまた板倉殿の二の舞になったかもしれぬでな」
「殿が板倉さまのような無謀なことをなされる方とは心得ませぬが……」
「いや、いざとなれば、戦慣れしていない悲しさ。余とて、どうなったかは解らぬぞ。なにしろ、上さまは、お父上（家光）以上に気短であらせられるようだからな」
苦笑いしてごまかしたが、これは本音である。

寛永十四年（一六三七）十月二十五日に始まった『島原の乱』。
その最初の江戸幕府追討使・板倉重昌は、翌十五年一月一日、敵城前を馬に跨って陣頭指揮中、城兵の一斉射撃にあって即死した。
頭を蜂の巣のように撃ち貫かれていたという。
元旦ぐらいは「兵に休息を……」という側近の意見を聞かずに、独走した結果である。気負いばかり先に立ち、鉄炮の怖さを忘れたのである。
後任の追討使・松平信綱は、それだけに慎重だった。まず、新教国・阿蘭陀に頼んで、海から大砲、そして陸の至近距離からは、新型の臼砲で攻撃させた。
その上で、兵糧攻めにした。
それでも、小さな原城攻略に、丸々二ヶ月を要している。

（俺も松平さまと同じ戦略をとったろう。そうなれば今頃は、まだ赤穂城付近をうろうろしている最中かもしれぬ）
保明は、板倉の死に様の恐ろしさを我が身になぞらえ、思わず首をすくめた。
「いやいや。こちらがいくら注意深くとも、相手が死ぬ気でくる点では、一向宗徒、島原の切支丹、そして此度の赤穂の城兵、みな同じじゃ。死を恐れぬ兵ほど始末に負

えないものはないからな」

「しかし殿。大石めは、幕府の目付と代官に向かって、ただひたすら辞を低くして浅野家の再興を懇願するのみ。抵抗らしい抵抗は一切なく、我等、いささか拍子抜けいたしました。あの男、口ほどの者ではないのではござりませぬか……」

「いや、大石を見くびってはならぬ。目付の荒木十左衛門からの早馬による報告によれば、領内の整理、資産の管理、家中の謹慎、その悉くに非の打ちどころなかった由。城の内部には塵一つなく、番犬の数まで一致していたそうな」

「番犬？　いやはや、犬の数合わせなどとは、皮肉というか、立派というか――」

「上さまに対する無言の抵抗かもしれぬ。それがあの男の恐いところだ。先月も申したが、此度、大目付が、浅野内匠頭を庭先で切腹させたことで、幕府は要らざる敵を二人作ってしまった。大石と浅野の妻じゃ。今、浅野の妻は、髪を下ろして瑤泉院を名乗っておるそうじゃが、大石は、いずれ東下して、瑤泉院と会うに違いない。そして、余もわからぬ浅野の刃傷沙汰の〈事の真相〉を聞き出し、巻き返しを図るだろう。なんとなくそんな気がするのじゃ。要警戒じゃな」

「いっそのこと、大石を亡き者になされては如何でござろう？　我等にお任せ下されば、造作もないことでござるが」

「ならぬ。それでは刃傷沙汰の真相が判らず仕舞いになってしまうではないか」
「それもそうですな」
「それだけではない。残る赤穂浪人たちを、一層激高させるだけじゃ。以後、我等幕府の者は、枕を高くして寝ることもできなくなる。拙宅への、上さまの今後の《お成り》にも支障をきたすだろう。大石の暗殺だけは、断じてしてはならぬことじゃ。堅く申し付けておくぞ」
「承知しました」
「そこでだ――」
「例の忍びの配置でございますな」
「そうだ」
「その後、浅野関係は、ご命令の二名に、もう一人加えて三名といたしております。一人は予定した中村座の舞台装置造りの男。これは赤穂の塩浜で、すでにその器用さを買われて、申し分ない働きをしております。この男の手で、赤穂の塩造りの秘密も、間もなく判明致しましょう」
「それは上々。で、おなごの忍びの方は？」
美女の方は、そなたの娘か？　と訊きたい気持ちを抑えた。

余計なことは、この際、きかぬが花である。
「一人は、赤穂の地元の尼寺に待機させておりまする」
「ほほう、地元の騒ぎの静まるまで隠したか」
「はい。時折、赤穂の町中に忍び出ては、大石の動向を探らせておりまする。いずれ大石が赤穂を出る時は、改めて指示を出しまするが……」
「大石が落ち行く先はどこかの」
「まだ、そこまでは把握できておりませぬ……」
「大石の行方を見失うまいぞ」
「その点は抜かりございませぬ」
「そうか、で、もう一人の忍びはいずれに？」
「瑤泉院の赤坂今井のご実家に、下女として奉公に上がらせておりまする」
「よく気付いた。余も、今日、そこに一人追加してくれぬか、と言おうとしたところじゃった。しかし、下女だけでは心許ない。もそっと内部の、それも瑤泉院の身辺に近い動きが知りたい」
「と、なると奥向きの侍女で。難しくはござるが、なんとか出入りの商人に働きかけてやってみましょう。して、この侍女には、どのような動きを探らせればよろしゅう

ございましょうか」

「瑶泉院には、いずれ赤穂の者からの接触が頻繁になろう。これを探ることがまず第一」

「すでに何人もの赤穂浪人から、ご面談や百ヶ日の法要を含めたご挨拶の話が参っているとのこと。その悉くを三次家では、はねつけて、なかなかに会わせぬとか……」

「当然じゃろう。瑶泉院は、中年増になったばかり。まだ二十八じゃ。それに子もない。養父式部少輔（長照。実父因幡守・浅野長治は瑶泉院二歳のときに没。いとこの長照の養女となり長矩に嫁ぐ）自慢の娘じゃ。許しを得ずに剃髪してしまったと、嘆かれているらしいが、法体になることまでは認めなかった。ということは、いずれは故郷の三次に戻して、再婚させたい気があるからじゃろう。元々が側室（お石の方）の娘だし、いつまでも正室のいる江戸屋敷に置いておくわけにもいくまいでな。とすれば、赤穂の者とは、早々に縁を切らせたいのが親の情というもの。しかし、大石だけは、その監視の目をくぐってでも、いつか必ずやって来る。なんとなくそんな気がするのだが……」

「なるほど。しかし、大石に手出しするな、と殿に命じられては、我等とて、その東下りを見て見ぬふりするしかありませぬな」

「いや、それだけではいかん」
「どうせよと仰せで？」
「大石の身を守るのじゃ」
「えっ、大石殿を守る？　なぜまたそこまで命じられまするか……。それに、我等、どこのどなたから大石の身を守るのでござろうや」
「大石の仮想敵は二つ考えられる。一つは江戸の急進派による内輪もめじゃ」
「その心配は当面はありませぬな。大石殿は、拙者の赤穂滞在中、江戸の急進派と、どうやら《手打ち式》を行った様子でござれば……」
「そうか、それはよかった、といいたいが、こればかりは判らぬぞ。内輪の手打ちほど脆いものはないでな。まして大石は鈍牛じゃ。若手が大石の生ぬるい動きに飽き足りなくなる日が必ずやってこよう。以後も大石の監視は怠るまいぞ」
「心得ました」
「となると、残るは、綱吉公の治世に波乱を願う不埒者たちじゃろう」
「大勢おられまするな」
将監が、にやりと笑った。
「あはははは。声が高いぞ。だが、大石を殺して、赤穂の過激派を激高させ、暗殺者

に仕立てて幕府の要人を狙わせる。そんな狡猾な筋書きを考える者となると……、そう多くはあるまい。その筆頭は、やはり陰謀好きな甲府宰相殿じゃろうな」

「甲府宰相さまのことなら、すでに、その配下と思われる雑賀衆を、拙者、赤穂城の大評定で目撃しておりまする。その旨は、密書にて殿に、いち早くお知らせしてありますが」

「うむ、読んでいる。益々甲府殿の線が危険だと睨んでいた。もっとも雑賀衆は、我等と違い、浅野家の行方を見届けに行ったわけではあるまい」

「と、仰せられますと……」

「ただ、大石の人相を確認したかっただけ。そうは思わぬか？」

「なるほど」

将監は、膝を打って大きく頷いた。

「その人相書きを頼りに、いずれ赤穂を去って身の備えの手薄になった大石を暗殺しようというわけですな」

「そうだ。それも我等幕府の手の者の仕業と見せかけるぐらいの小細工を弄するかもしれぬ。そうなったら、江戸、大坂の町衆がうるさいぞ。将監、早急に、対抗策を考えよ。よいか」

「心得ましてござる」
将監は、飛び上がるようにして平伏した。

2

将軍綱吉（五十六歳）と甲府宰相綱豊（四十歳）とは、叔父・甥の血縁関係にある。
表面的には、到って穏やかだが、裏面では、次期将軍の座を巡って争い、そして今も――二十年余に亘り――骨肉の抗争を繰り返している。

話は二十一年前に遡る。
延宝八年（一六八〇）五月八日。
四代将軍・家綱は、四十歳で病没した。最後まで子女に恵まれず、次期将軍を指名することなく世を去った。
次弟は綱重であったが、大酒飲みが祟り、その二年前、三十五歳の若さで急死していた。
綱豊は、その綱重の遺児である。

当時十九歳。

徳川政権が、もっと安定期であったなら、「長兄（系）相続」という、神君家康の定めた遺命に従い、綱豊将軍が誕生したであろう。

だが、その頃は、三代将軍家光の豪腕政治がひきおこした朝廷との摩擦が深刻だった。一時は、両者の融和を図るため、暫定的に五代将軍を朝廷から仰ぐ、という妥協案を考えたほどである。

加えて、家康の開幕から八十年近くの間に大名の改易・取潰しは百家に近く、その揺り戻しで紛争も頻発していた。

江戸は、そんな不満を抱く不穏な浪人で満ちあふれていた。

こうした背景から、幕閣は、十九歳将軍の誕生に危惧を抱いた。侃々諤々の論議の末、三代将軍家光の四男で、家綱の末弟に当たる館林宰相・綱吉（当時三十五歳）の五代将軍起用を採択した。

臨終に際して、家綱の〈綱吉指名〉があったとするのは、もちろん老中の演出にすぎない。

その後、綱吉は、期待どおり――、いや期待以上に辣腕将軍ぶりを発揮した。

朝廷との融和策を第一とし、民政では、賞罰厳明を掲げた。改易政策は外様以上に譜代大名の腐敗と失政に向けての糾弾姿勢をとった。

世に「天和の治」という。

この治世の実績をふまえて、綱吉は、後継者には自分の子女を、と望むようになった。

親の情としては、当然の成り行きである。

だが、当然でないのは綱豊である。

待ちぼうけを食わされた上に、次期将軍候補の系統からもはずされてしまったからである。

綱吉の後継者候補の第一は、側室・お伝の方が延宝七年（一六七九）五月に生んだ徳松であった。しかし、この徳松は、天和三年（一六八三）五月、五歳で夭折した。

一説には、綱豊側の謀略による毒殺とも言われている。あり得る話だが、もちろん確証はない。

やむなく、綱吉は、第二候補として、娘・鶴姫の夫である紀伊徳川家の嫡子・綱教を婿養子として江戸城に迎えいれ、自分の世嗣に据える工作に走った。

この綱吉の第二の動きに、公然と嚙みついたのが、御三家の一つ、水戸徳川家の光

圀であった。

これは神君家康公の定めた「長兄（系）相続」の遺訓に反するというのである。

尾張徳川も、光圀の意見に同調した。

以後、末子・綱吉の系統が将軍家を継ぐようなら、我々御三家が、いつまでも将軍候補の圏外に居るのはおかしいではないか、というわけである。

もっとも、家康は、三代将軍の選定にあたって、「長兄相続制」を定めて、家光を指名したことになっているが――。

自分の直接の後継者である秀忠は、厳密には長男（信長に命じられて切腹した信康を除く）ではない。次男である。

長兄には天正二年生まれの於義丸（側室お万の方の子）がいた。ただし、家康は、この子を秀吉の養子に出している。後の結城秀康である。

家康は、終生、この秀康を嫌い、秀吉亡き後も自分の長男の地位に戻さなかった。

理由の一つに、お万の方の不義の子ではないかという噂がある。

もう一つは、秀康は豊臣秀頼の義兄となったことで、「秀頼に危害を加える者あらば成敗してくれる」と公言して、秀頼殺しを目論む家康を困らせたことである。

それもあってか、秀康の子の血筋も長子扱いとはされなかった。

だから、神君の遺命（長兄相続）は厳密なものではない。これが、保明を含む綱吉側近の、光圀に対する暗黙の反論である。

しかし光圀は、この反論を認めなかった。

認めないばかりでなく、自らも、処世に筋を通した。つまり、父の命令とはいえ、弟の身で、兄を差し置いて水戸徳川を継承してきた己れの過去を改めるため、自分の嗣子を、敢えて他家に養子に出し、子がない形を、わざと作ったのである。その上で、後継者に兄の息子を指名している。

綱吉にとって、これは自分への当てつけとしか思えなかった。

当てつけといえば、綱吉の「生類憐れみの令」を冷笑するかのように、犬の毛皮百枚を送りつけてきたのも光圀である。

幕府は、こんな光圀と対決することができなかった。そんなことをすれば、甲府宰相、尾張徳川、そして結城家まで巻き込む天下の大騒乱になる。幕府が戦えないことを見越しての光圀の挑発であった。

だが、そんな「目の上のたんこぶ」であった光圀が、昨年十二月、七十三歳で、よ

うやく他界した。

「やれやれ」

と、綱吉と老中たちは肩の荷を下ろしたに違いない。しかし、闇の軍団を預かる保明と将監にとって、これが、逆に苦闘の始まりであることを知る者は少ない。

というのは、光圀の死を契機に、その配下にあった水戸雑賀軍団が、甲府宰相綱豊の元に、ごっそりと移籍されたからである。

特に注目は、その頭領・雑賀孫市。

紀州・雑賀の地に発祥する雑賀衆の頭領・雑賀孫市は、歴代孫市の名を称して、戦国時代を生き抜いた。

その息子・重朝は、秀吉の天下統一後、その配下となり、一万石を領した。ところが、関ヶ原の戦いで西軍に与したため、あえなく浪人に転落した。

雑賀衆の実力を知る家康は、伊達政宗が雑賀衆召し抱えに動いたのを知ると、機先を制して重朝を三千石の家禄で横取りしたのである。

しかし、当時、家康は、配下に服部半蔵軍団を抱えていた。忍び同士は相容れない。

そのため、雑賀衆を、そっくりそのまま、水戸家の祖・徳川頼房の配下につけかえた。これが水戸と雑賀衆の結びつきの始まりである。

光圀の死を契機に、今、重朝の嗣子・雑賀重次が、甲府宰相綱豊のやり手用人・間部詮房の指揮下で、影の軍団を統率することになった。

赤穂事件を巡る柳沢・黒鍬組対間部・雑賀組の〈闇の抗争〉が開始されるのは、この後、間もなくのことである。

3

保明と将監の密談は、なお続いている。

夕闇が迫まると、どこからともなく手燭を捧げた侍女が現れ、室内の行燈をともして去った。

しばらくして、侍女の捧げ持つ懸盤で豪華な膳部が次々と運び込まれた。

懸盤とは、皿を載せる正式な一人膳である。

この略式のものを高坏といい、更に簡略な薄板でできた膳を折敷といった。

当時、懸盤の膳部は最高の宴席を意味した。

「これはこれは、大層なおもてなしを」

と、恐縮する将監。

保明は、笑いながら手で制した。

「いやいや。そのように恐縮されるほどのことではない。実は、明日、三の丸さまが王子稲荷にご参詣になり、そこから日暮里に足を伸ばされ、ついでに、この駒籠の山里に、お寄りになる。あちらの母屋で、将軍家の供御方（料理人）とご一緒に、我等、そのご接待の準備をしている最中じゃ。この料理膳は、いわば、そのお味調べのようなもの。懸盤の持ち運びも、明日のための侍女の予行じゃ。その積もりで気楽に食せ。余も相伴致そう。もっとも料理には、例によって鳥、貝、海老などはない。そなたの口には、少々物足りないかもしれぬがな……」

将軍家の厨房は、貞享年間から、「生類憐れみの令」の趣旨にそって、公卿たちの接待以外では鳥、貝、海老などの使用を禁じている。

柳沢邸でも同様だった。

「それで十分でござる。海山の料理は、此度の山陽の旅で十分堪能いたしましたで」

「それはよかった。だが、当家の料理でも、鮎の塩焼きだけは別格じゃ。鮎は、我が祖が最初に徳川さまの勤番となった武州鉢形領に近い玉淀から、つい先ほど早馬で届けさせたものだ」

「益々結構でござるな」

二人は屈託なく笑い、やがて出てきた料理を片端から平らげ、焼きたての鮎は両手に持ってかぶりついた。

「作法はいらぬ。子供の頃のように、この食い方が最高じゃによって」

「とは申されても、殿は、明日、三の丸さまの前では、このようには食せませぬな……」

「鮎の塩焼きそのものも出せぬ。それが辛い。だからこそ、そちと、こうして前日に大食いしておるのよ」

「拙者もいい時に参りましたもので」

「全くだ」

そんな駄弁がひとしきり続くと、保明は、一転して、真顔に戻った。

「では、そろそろ茶室に移ろうか。例の話が残っておる」

「承知致しました」

将監もまた、それを予知していたかのように、機敏に動いた。

すぐさま手燭を握ると、勝手知った様子で廊下を先に立って隣の茶室へと保明を誘導した。

保明は苦笑いした。

「そうじゃ。この草庵は、そなたの作事（普請）によるものだったな。廊下の道筋までよく知っているはずだ」

「御意。ここは屋根裏の梁一本、床下の木組みの穴の大きさまで存じております。いずれも犬猫一匹潜り込むことはできませぬ。声さえ落とせば、決して話は外に漏れませぬ」

「では声を落として――」

四畳半の茶室には、すでにほの暗く行燈が灯り、薄茶点前の準備が整っていた。入り口から入って左正面の床に書が掛けてある。天和二年、綱吉公の〈読書始め〉に初めて参加を許された時に戴いた綱吉の手書きの書、

主　忠　信

である。

保明は、将監に「正客」の席に着くように勧め、自分は、すこし遅れて席入りした。扇子を前に置き、まずは書に向かって一礼。

ゆっくりと点前畳に座った。
保明が薄茶を点てると、正客の将監がにじって、ゆっくりと茶碗の近くに進み、右手で取って左手にのせた。
「そのままに」
と、ここで保明は囁いた。
「席に戻らず、この場所で飲み、かつ話すがよい。声を落としてな」
「心得ましてござる」
喫茶を終わると、将監は一段と声をひそめた。
「では、まず広島城にあったという、神君の、例の密書にまつわる話でござるが……」
「あったのか！」
保明の声が思わずうわずる。
「殿の方こそお声が大きゅうござる。まずは、我等の調べた結果を、じっくりとお聞き下され」
将監は、無表情のまま告げた。

4

あくまで噂の域を出ませぬが――、と再三前置きして将監は語った。
「元和の昔、福島正則殿が、広島城の無許可修築の廉で除封された時、血判・籠城を誓って城にこもった士分が、凡そ二千名ございました」
「それほど多くの家臣を抱えておられたのか、福島殿は――」
驚きだった。
福島の領国は、安芸・備後併せて四十九万八千二百石。江戸中期の保明の常識としては、せいぜい一千人から千二百というところであった。
「はい。開城に同意しない城代家老・福島丹波のもと、この二千の城兵は、梃子でも動かなかったそうで。困り果てた幕府方の収城使・永井右近大夫、安藤対馬守のお二人は、早馬を江戸に立て、蟄居閉門中の福島正則に、家老の丹波に対する『城明け渡し命令書』を無理矢理書かせ、ようやく開城にこぎ着けました。しかし、開城後、二千余名の名声は、とみに高まり、全員に諸大名から仕官の口がかかったそうで。此度の赤穂浪士とは大分違いまするな」

「今と違って尚武の気風の強い時代だったからな。軽々には比較できぬ。が、昔とはいえ、見事な抵抗であったことは余も認める。で、その城代の福島丹波とやらは、その後、如何した」

「福島丹波殿は、その一糸乱れぬ指揮を褒め称えられ、もちろん引く手あまたでござったそうな。なんでも、前田家からは三万石、紀伊家からは四万石で召し抱えたいとの申し出があった由」

「ほう、紀伊家は四万石か。張り込んだな。で、丹波殿はどうなされたか」

「その悉くを断り、京・東山に隠棲して、以後は一歩も世間にお出になられず、八十三歳で天寿を全うされたとのことで――」

「益々あっぱれ。男はそうありたいものよ」

「さて、しかし、ここまでは、此度の我等の調べの序の口でござる。我等は、この二千人の中から、中枢の上士百人ほどを選び、さらに、広島近在の大名に採用された者十数人に的を絞って《神君の密書》探しを試みましてござる」

「八十余年も前のことじゃ。大変な作業じゃったろう。苦労かけたな」

「なんのなんの。乗りかかった船でござる。しかし、案ずるより産むが易しとはこのことでございましたな。あれこれ当たるうちに、当時、新城主・浅野長晟殿に拾われ

て小普請方を務め、後に赤穂浅野に転じてきた男がござった。名を秋本新左衛門と申す者で、その家伝に、奇妙な噂話が残っているのを突き止めましてござる」

「うむ、聞こう」

「その噂によれば、ある年のこと……正確に申せば、慶安二年（一六四九）如月（二月）五日でござるが――。この日、広島を襲ったなゐ（地震）で、広島城の小天守の壁が一部崩れ落ち、中から奇妙な木箱が転がり出たとのこと」

「ほほう。慶安二年か。微妙な時期じゃな」

保明は、思わず膝を乗り出した。

「なにがでござる、微妙な時期とは……」

「いやさ、内匠頭の祖父・浅野長直が赤穂城の大々的な改築願いを申し出たのが、そのなゐの前年。そしてなゐをはさんで山鹿素行と接近した。この後、朝廷との親交を深め、万治四年（一六六一）睦月（一月）に京都御所が火事に見舞われると、御所の再建に異常な情熱を注いで、とうとう天守閣の建立をもあきらめてしまった。かく考えていくと、なゐによる密書の発覚と浅野の朝廷への接近にはなにやら因果関係がありそうに思えるのだが……。まあいい、憶測は後にしよう。先を続けてくれ」

「では――続けます。その木箱は、早速、帰国中の殿様の元に、中を開けずに、その

まま運び込まれたそうで。その後は、奇妙なことに、上の方から厳しい箝口令が出て、木箱の話そのものが家中から消され、話題にすることも一切禁止されたと、秋本家の家伝は書き残しております。箝口令などというものは、厳しければ厳しいほど、後々に噂が噂を呼ぶものでござれば……」

将監は、ここで、にやりと笑って続けた。

「この噂をもとに、なお秋本家の縁者や周辺他家を当たった結果判ったことは――、まず、その木箱が、長さ一尺、幅二寸ほどのもので、厳重に封印されていたこと。異常なまでに軽かったこと。つまり、内容は隠し金などではなく、間違いなく書類、それも巻紙ぐらいしか入っていなかったのでは、ということでござる。目下の広島付近の調べは、以上でござる。しかし、これだけでは、拙者、おもしろくも、なんともござらぬ。そこで……」

「なにか調べたか、他に」

「御意。拙者、配下の者に命じて、も一つ、探索の輪を拡げ、九州まで《神君の密書》の行方を追わせましてござる。すると、出てくるわ、出てくるわ、あらぬ巷説、風説が続々と……」

「例えばどのような――」

「もっぱら加藤家（熊本藩。加藤清正の子・忠広の時改易）の浪人たちの間に、今も流布する噂でござる。なんとそこには、かの『島原の乱』当時、天草四郎が、この《神君の密書》らしき物を所持していたとの話までござった――」

「なんだと！」

馬鹿ばかしい。『島原の乱』は密書が、さきの地震で転がり出る前の話ではないか。だが、将監は、構わず続けた。

「おそらくそちらは偽書でござろうが、これは、原城の落城とともに焼失せず、隠れ切支丹の農民の手によって、いずれかに消えたとのこと。更に農民の手から、南蛮人に渡って、安全のために海外に持ち出されたとの噂までござる。いやはや驚きの一語で……」

驚く割には、嬉しそうな顔である。明らかに将監は、この探索を楽しんでいる様子だ。

保明は、腹立たしくなってきた。

「そのような無責任な流説はどうでもよいわ。捨ておけ、捨ておけ」

ところが、将監は、強く頭を振った。

「いえ、せっかく調べさせたこと故、もう一つだけ我慢してお聞き下され。これも天

草四郎がことでござるが……」

「四郎がどうかしたというのか？　まさか、今も生きているとは言わせぬぞ」

「ご冗談を……、それはありませぬ。ただ、その身元は、これまで不明ということでござったが、あちら九州では、南に下るほど天草四郎の身元には、もっともらしき噂がござりましてな」

「どのような噂じゃ」

「天草四郎は秀頼の遺児だとのこと――」

「ぷっ！」

そこまでくると保明は、笑うしかなかった。

だが、将監は笑わない。

まじめくさって話し続けた。

将監配下の調べによれば、寛永十四年、『島原の乱』が勃発したとき、加藤家の浪人は二派に分裂したという。

四郎を支えた浪人団の方が断然多かった。ということは、四郎＝秀頼の子を信じるがゆえだ、というのである。

《天草の乱》の首謀者の千々石五郎左衛門、柳平兵衛、下川又左衛門らは、いずれも

旧加藤家の上士――、これは事実である。

他方、加藤家の遺臣でありながら、土着して庄屋となり、細川家に仕えた者も少数ながらいる。

その中で、天草四郎の母と称する女を捕らえて、知行三十石の加増を得たのは、郡浦彦左衛門という男。これも加藤家の浪人である。

この捕まえた四郎の母の口から、拷問の末、秀頼の行方が割れたという。

秀頼は大坂城落城に際して、影武者を仕立てて城の抜け穴から脱出。母の淀だけが自害した。

秀頼は、かねて加藤清正の計らいで肥後に住んでいた乳母・斎藤采女を頼って九州に落ち、南端の薩摩藩の庇護の下、地元の女と隠れ住んだ――というのである。

「その女との間にできた子が四郎だと……、馬鹿ばかしいと思われるなら、笑い捨て下され。しかし、調べとしては、拙者、勝手ながら、今後も続行させていただきまする――」

「まあよかろう。存分にせい。しかし、密書追跡の線からは、あまりはずれるな。なにしろ人騒がせなものだから、そなたには、密書探索優先で今後もいてもらわねば困る。その密書が南蛮に流れた、などと上さまに申し上げたら、それこそ卒倒なされる

に違いないぞ」
それこそ笑えない冗談――と思った。

5

翌二十五日、晴れ。
この日の午後三時に、桂昌院が予定どおり保明の駒籠別邸を訪問している。
以下、この時の状況を、保明の側室である正親町町子の『松蔭日記』の流麗な文章から、若干引用してみよう。
なお、この日記の作者・正親町町子は、この時、二十六歳（自称は二十三歳）である。
すでに、保明との間に、四男経隆、五男時睦を生んでいる。
その名のように、父は正親町権大納言実豊。母は本阿弥家（刀剣鑑定家の家系）の下女で、元は遊女とも、霊元院中宮であった新上西門院房子の侍女ともいわれる。
町子は、天性の美貌と巧みな文章力を兼ね備えた、文字通りの才色兼備の女性である。

午後三時ごろにご来訪になった。お供として牧野備後守成貞、秋元但馬守喬朝、加藤越中守明英などをはじめ大勢がいらっしゃった。護持院の大僧正隆光さまはじめ僧たちも多数、医師も来た。女房たちもめったにない折と思って、我も我もと輿に乗り、こぼれるほどやってきた。

（十、から衣・八段）

こちらの殿方は皆、門まで迎えに出られた。そのまま渡殿――通路用の建物――に御輿を寄せてお下りになるところへ女方が出向きお迎え申す様子は、また大層賑やかである。御座にお着きになると、お食事を差し上げた。お酒の盃を何度も口にされ、それが方々に回った。

この後、桂昌院と侍女たちは、広い庭をあちこち回遊し、再度建物に戻る。

再び、町子の日記から――。

御殿にお入りになってまた御酒を召し上がり、ご機嫌になられる。あるじ方への引き出物は、世に二つとないような貴重な物のようである。上さまも兼ねてこの日

の予定をお聞きになっていて、はるばる使者をお遣わしなさった。

――中略――

さて、お出になったお供の人々には皆、保明さまは普通とは違う素晴らしいおもてなしをした。これには、身分の上下もなく皆大層酔いしれたことであった。桂昌院さまはなお飽き足らぬと思われたが、御城までは遠く、日が暮れないうちにお帰りなさらねばと周囲の人々がお勧めし、ようやくお帰り遊ばされたことであった。

（十、から衣・九段）

以上が当日の模様である。

当時の女性たちが、如何に、この訪問を楽しみにしてきたか。そして駒籠別邸に着くやいなや、無邪気に飲み且つ喰らったか。特に七十五歳の桂昌院が想像以上に元気で健啖なのに驚く。

また、保明が、相手の身分に隔てなく無礼講で接したのも好ましい光景である。

しかし、こんな饗応を受けるだけのために桂昌院は大挙してきたわけではなかった。

院は、息子の綱吉のいないところで、直接保明に話したいことがあったのである。

院は、元々、保明を自分の親族のように溺愛するところがあった。二人には、お互いに「母親が卑しい女」という共通因子がある。これが血を超えた連帯感を生んだのである。

ちなみに、保明の生母は、佐瀬氏津那子といった。佐瀬氏は柳沢氏の所領一袋村の貧しい浪士で、遠祖は下野国佐瀬庄にあった。

津那子は、領主の家に行儀作法を習いに上がる間に、主人の柳沢安忠の手が付き、弥太郎（保明の幼名）を生んだのである。

しかし、津那子は子を生むと、子を置いたまま実家に追い返された。安忠の正室の嫉妬に耐えかねたためといわれている。

弥太郎――のちの保明は、生後すぐから嫡母の青木氏に育てられて、二十歳になるまで自分に「侍女あがりの賤しい生母」のいることを知らなかった。

そんな自分の幼時体験が、同じような卑しい侍女から這い上がってきた桂昌院に対する畏敬の念となっていた。

二人だけの会合の場は、桂昌院が酔った振りをして四阿の一つに休息することで、

容易に訪れた。
桂昌院は、手で無言のうちに人払いし、保明だけを茶室に招き入れる。
優雅に、慣れた手つきで薄茶を点てながら、桂昌院は言った。
「弥太郎や。ちとそなたに訊ねたいことがある」
「はて、なんでございましょう」
保明は、恐縮して平伏した。すでになにを言われるかは、あらかじめ覚悟していた。
（きっと、従一位のご催促に違いない）
ところが訊ねられたのは全く逆であった。
「そなた、上さまから、わらわの昇官のことで、無理難題を言われているのではないか」
老人ながら、目は鋭い。
「いえ」
「天朝さまを困らせてはいまいな」
「決して」
「正直に申せ。わらわ、上さまに金輪際告げ口などせぬゆえ」
「嘘偽りは申しませぬ。天朝さまを困らせたりは致しておりませぬ」

保明は平然と「現在形」で答えた。
今は困らせてはいない。朝廷を困らせるのはこれからかもしれない――、しかし、それは、この尊敬する老女にまで話すことではない、と自分に言い聞かせながら。
「そうか、それならよい」
桂昌院は、ほっとした目つきに戻った。
「わらわは、天朝さまをお困らせしてまで、己れの位階を上げてくれ、などという恐れ多いことはしとうないでの」
「三の丸さまのお気持ち、よう心得て対処いたしますれば、その件、どうかご放念下されませ」
「そうか、安気にしていていいのか」
「はい」
「では、もう一つ訊ねてよいかの」
「なんなりと」
「上さまは、嗣子と思うた徳松亡き後も、ご自分の血の跡継ぎに固執され、聞くところでは、鶴姫夫婦を夫婦養子としてご自分の後に据えたいと思うているとのことじゃ。このこと、そなたどう思う」

思ってもみなかった問いであった。
「さて」
これには保明も、返答に窮した。
「こればかりは、拙者、なんとも申し上げられませぬ」
「なぜじゃ」
「いくらお側にお仕えしていても、上さまの血の呼ぶ声だけは、拙者には聞こえませぬゆえ」
「さすが弥太郎、うまいこと言いやる」
「決して逃げているわけではありませぬ。聞こえぬと申しただけでござる」
「そこが、そなたのうまいところよ。では、その血の呼ぶ声の聞こえる筈の、この母が代わって申そうか」
「お願い致しまする」
「上さまは、ご自分が末子であるという身を思えば、一代を以て満足せねばなりませぬ。後々までも、と願うのは足るを知らぬ餓鬼道というもの。醜い。こういう物の考えは、必ず悪い因果の報いをうけます。わらわは、それが恐ろしい」
「悪い因果と申されますと？」

「上さまの身か鶴姫の身か、そのどちらかに不幸が起こるような気がしてなりませぬ。近頃わらわが神社仏閣に祈るのは、そればかりじゃ。しかし、それも、元はといえば、上さまの我欲が原因じゃ。そこで、そなたに頼みがある」

「なんでございましょうや」

保明は、緊張した。

「甲府宰相殿に、機会を捉えて、わらわの気持ちを伝えてくれぬか」

「えっ、なんと申し上げるのでございましょう」

思わず声が震えた。

「女の身ゆえ、なにもできませぬが、次の将軍は、甲府宰相の筋に戻るよう、わらわは、ひたすら神仏に祈っておりまするとと。それだけを伝えてくれればよい」

「かしこまりました」

ほっとした。これだけなら、いざこざにはならない。

「では、元の席に戻るゆえ、手を取ってたもれ。これまでは、この二つの話が胸につかえていて折角のお食事が進まなかったがの。おほほほほ」

桂昌院は、さばさばとした顔に戻り、再び酒を楽しまれた。

6

翌朝、保明は城中三の丸に参上、桂昌院に昨日の駒籠ご訪問のお礼を申し上げた。
続いて本丸に回って、綱吉公のお目通りを得た。
公は到って上機嫌。
目通りは、こんな会話から始まった——。
「今朝の母上は、ことのほかのご機嫌であらせられた。皆、そちのお陰じゃ。改めて礼をいう」
「もったいのうございます。今となっては、あれもすべきだった、これもして差し上げたかったという悔いばかりで」
「そうじゃろうな。母上は、一つだけ不満を漏らされたぞ」
「えっ」
あやうく、のけぞるところだった。
「それは、また如何なることで」
「そなたが侍女にだけ振る舞った心太が食せなかったのが、返す返すも気残りじゃ、

弥太郎の気の利かぬことよ、と言われての。母上と二人、大笑いしたぞ」
「それは、それは」
保明は顔を赤らめて弁明した。
「あれは磯臭いので、お口に合わないのではないかと思い、あえて三の丸さまには差し上げずにおきました。全く気の利かぬことでした」
「そのようだな。しかし、元より母上のお言葉は本気ではない。気にするな。それに、どうせ年寄りのことじゃ、すぐに忘れる」
「だとよろしいのですが……」
当時は、磯の匂いのしない寒天からの心太の製法は、まだ普及していない。だから、これを嫌う者も多かった。保明自身、磯の匂いが嫌いだった。それで、御酒を召し上がっておられた桂昌院に、つい出しそびれたのである。
――会話は、この後、当然のように桂昌院の昇位に移った――。
「そんなことより、例の母上の昇位の件じゃ。その後どうなっているかな」
「交渉は続けております」
綱吉の問いに保明は、そう答えた。
嘘ではない。

細井広沢を京に派して、「桂一計画」の総仕上げとして、京周辺の荒廃した神社仏閣の修理・改築などに地道な努力を重ねていた。

「で、見込みは？」

「判りませぬ。が、万一の場合は、別に奥の手がございます。葉月（八月）まで、拙者におまかせの上、お待ちくだされ」

「そうか、まだ、待つしかないかの」

上さまは、一瞬、悲しそうな顔をされた。

が、元々無理を承知の要求である。この日は、あっさりと、それ以上の追及はされなかった。

その代わり、もう一つ別の難題を持ち込んできた。

「実はな、吉良がことじゃが」

「はい」

保明は、なにを言いだされるのかと、ギクリとした。

「一月ほど前に受けた傷のことを考慮して吉良には高家肝煎の役を解いたが……、問題は、あの呉服橋の広大な江戸屋敷じゃ。これをどうするかじゃ」

「なるほど」

保明は、即座に上さまの心を読み取った。

吉良は幕閣の同情を引きたさのあまり、受けた傷を過大に喧伝した。これが逆効果となって、事件発生の十二日後の三月二十六日、高家肝煎を解かれた。実権のない寄合職の一人に転落したのである。

これを申し渡したのは四人の老中であった。

このまま吉良に隠居を――、という、もっと強硬な意見も、老中の一部と若年寄にあった。

「浅野内匠頭は切腹、吉良上野はお咎めなし」

それでは、あまりにも処分の均衡を失している。せめて隠居ぐらいさせなければ、世間は納得しないだろう、というのである。

「それに、誰よりも上杉の殿ご本人が、それをお望みです。上さまのご決断を仰ぎたい」

と、月番老中は強引に主張した。

しかし、保明は綱吉と相談の上、上野介の隠居案を退け、「肝煎」だけを解くことにとどめた。

なお、上杉綱憲が、この件に口出ししたことには、込み入った曰くがある。

綱憲は、上野介の実子、それも一人息子（幼名・三之助）であった。

名門上杉家の当主（綱勝、当時二十七歳）が、子のないままに急死したのは寛文四年（一六六四）であった。やむなく、緊急措置として生まれたばかりの三之助（二歳）が、上杉家の養子として差し出されたのである。上野介の妻・富子が綱勝の妹であった関係である。

上杉には、この妹の筋以外に男子がなかった。

上野介の方は、まだ夫婦とも若かった（当時、上野介二十四歳、妻富子二十五歳）から、これからも子宝に恵まれるだろうと思ったのである。

こうして上杉家は断絶を免れたが、逆に、上野介は、以後男子に恵まれず、自分の跡継ぎを失ってしまった。

やむなく、上野介は、息子綱憲の子――上野介の孫にあたる――を貰い受けた。

それが現在の嗣子・義周である。

この時十六歳。

当然、年齢的にも、祖父のような有職故実を熟知していない。だから祖父の高家肝煎職の承継は無理――この一世代の空白を、幕閣に突かれた形である。

一方、綱吉は綱吉で、部下に与える江戸城内（外濠の内側）の土地に余裕が乏しい。

まして呉服橋は好立地。そこに、隠居した老人のために、いつまでも広大な屋敷を許しておくわけにはいかない、という事情がある。

保明は、若干間をおいて、おもむろに答えた。

「上野介を呉服橋から立ち退かせるは、いささか時期尚早と存じます」

「なぜじゃ」

「上さまと小職が、吉良を隠居させなかった理由を思い出してくだされませ。浅野内匠頭に対する我々の断罪は、朝使饗応役という大役にありながら、それを忘れ、城中で上野介に刃傷に及んだという〈天朝さまに対する浅野の非礼〉の一点にございます。世上、これを両名の喧嘩と考え、喧嘩である以上、両成敗が正義などと申す向きもござる。しかし、これは浅野が、時と場所を忘れ、なによりも己が非礼の罪を弁えぬ仕儀。討議にも値しませぬ」

「うむ、それで――」

それがどうしたと言いたい様子。

「でございますれば、この罪は浅野一人が負うべきもの。その断罪は、この姿勢が鮮明でなければなりませぬ。今、吉良に、その江戸屋敷まで取り上げては、上さまの刃傷沙

汰に際して取られたご処分に、なんらかの修正を加えたかのような邪推を招きまする」
「そうか、そうとられるかな」
「はい。吉良の江戸屋敷を召し上げるには、すこし時期が早すぎますし、も一つ、もっともらしい工夫が要りましょう」
「できるか、その工夫が」
「はい、できまする」
「では、それも一緒に考えてくれるというのだな。弥太郎」
「上さま、お望みとあらば――」

城下がりの駕籠に揺られながら、保明は思案した。
二つ目の問題は、さして難事ではない。
呉服橋の吉良邸の隣は、蜂須賀飛騨守の屋敷である。飛騨守をすこし突っつき、吉良に嫌がらせをさせれば、なんとかなるだろう。
問題は、やはり「桂一計画」だった。
（ああは申し上げたものの、本当に弁庵先生、大丈夫かな？）
頼りは細井広沢、ただ一人である。

その広沢は、目下、京に長期滞在中。保明は、この二ヶ月近く会っていなかった。

7

翌五月、六月――と、保明は、朝廷との関係修復のための地道な努力を続けている。その様子を、もう一度、正親町町子の『松蔭日記』から拾ってみよう。

京都の西八条にあった六孫王社が大層荒れ果てていたのを、保明さまに申告されて、幕府が改築しておられたのだが、五月二十七日にそれが完成し、大変見事になった。綱吉公が内裏に申し出られ権現（ごんげん）の称号が贈られた。天子さまのお言葉など読んで、さぞやおごそかな様子であっただろう。

（十一、花まつもろ人・一段）

幕府は、津の国の多田院――現兵庫県川西市所在。源満仲創建――、河内の通法寺――現大阪府羽曳野（はびきの）市所在。源頼信（よりのぶ）・頼義・義家三代の墓所――などについても、元々の建物は修理し、今新たに増築したりして、大変立派に磨き整えさせられた。

綱吉公がお描きなされた書画などをお寄せになる。これらは皆、保明さまに願い出されたのが初めであった。保明さまも灯籠など立派に造らせなさって奉納される。

（同）

「六孫王の社」は、第五十六代清和天皇の第六皇子貞純親王の長子源経基を祭神とする神社である。社名は、清和天皇の第「六」皇子の「孫」の親「王」の三文字からなっている。

完成すると、綱吉から朝廷に奏上し、権現の称号を頂かせると共に、天皇のお言葉を賜るといった「筋」を通している。

すべて保明と、その指示によって動いた細井広沢の功績であった。

さらに、京から仏像などを運んできて、江戸で公開し、京と江戸の平和的関係を喧伝する動きも行っている。いわゆる「出開帳」である。

再び町子の『松蔭日記』から――。

その頃、太秦の広隆寺の上宮太子像――聖徳太子像のこと――を江戸にお連れ申

し上げ、人々はこぞって拝み申し上げたものであったが、このほど、我が屋敷にもお入れ申し上げた。由緒ある宝物などが多数あったが、見事すぎて目移りし、精しくは覚えていない。

――中略――

別の日は真如堂の無量寿仏や、同じように宝物が運び入れられた。これも皆拝み申し上げ、布施もあった。昨年の秋は嵯峨・清涼寺の釈迦如来をお連れ申し上げたが、家人をはじめ、賤しい妻子までがお許しを頂戴し、拝み申し上げた。

（十一、花まつもろ人・二段）

町子の『松蔭日記』は、元々、政治色の全くない日記である。そのため、保明が、京や五畿内の三箇所の寺社の修理を手がけたり、広隆寺・真如堂・清涼寺の仏像などの「出開帳」を行っていることを、淡々と記述するに留まる。

だが、この裏では、保明の対朝廷、対寺社関係改善のため、多額の寄付や謝礼金が動いていた筈である。そして、その下工作をしたのは、間違いなく、全国の神社仏閣の社伝、寺記、修理の考証に詳しい細井広沢であった。

（中巻に続く）

この作品は平成二十年十月新潮社より刊行され、文庫化にあたり、加筆修正をし、上・中・下、三冊に分冊した。

謎手本忠臣蔵(上)

新潮文庫　　か－48－3



平成二十三年十二月　一　日　発　行

著者　加藤廣

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
読者係(〇三)三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Hiroshi Katô 2008　Printed in Japan

ISBN978-4-10-133053-2 C0193

9784101330532

1920193005509

元禄十四年三月十四日、勅使登営の当日。赤穂藩藩主浅野内匠頭が突然、江戸城内松の廊下で高家筆頭吉良上野介に斬りかかった。内匠頭は即日切腹。残されたのは『覚えたるか！』という不可解な一言と事件の謎。なぜ、浅野は吉良に襲いかかったのか。なぜ、勅使の登城は予定よりも早められたのか。元禄赤穂事件を全く新しい解釈で再現し、その真相に迫る壮大な歴史ミステリ。

定価：本体550円（税別）

ISBN978-4-10-133053-2

C0193 ¥550E